

ソ同盟共産党中央委員
所屬特別委員会編輯

363.3
MA59
4



0006578-000

363. 3-Ma59-4ウ

ソ同盟共産党史

マルクス・レーニン主義研究所・訳

日本共産党出版部

2

昭和21

ABF

ソ同盟共産党史

II

マルクス・レーニン主義研究所
マルクス・レーニン主義叢書・第一篇

日本共産党出版部

3633
MA 59-4

マルクス・レーニン主義研究所

マルクス・レーニン主義叢書・第一篇

ソ同盟共産党中央委員會所屬特別委員會編輯
ソ同盟共産党中央委員會認可（一九三八年）

ソ同盟共産黨史 II

原名・ソヴェート同盟共産黨（ボルシエヴィキ）歴史・小教程

一九四六年

日本共産黨出版部發行



第二分冊 目次

第四章	ストルイビン反動期におけるメンシエヴィキとボルシエヴィキ、獨立マルクス主義政黨となる (一九〇八年—一九一二年)…………… 一三七	
一、	ストルイビンの反動。反政府インテリゲンチヤ層内に起つた腐敗作用。頽廢。黨インテリゲンチヤ部のマルクス主義の敵陣への移行、マルクス主義理論を修正せんとする企て。レーニン著書「唯物論と經驗批判論」における修正派における彼の反駁、およびマルクス主義政黨の理論的基礎の擁護…………… 一三六	一三六
二、	辯證法のおよび史的唯物論について…………… 一三六	一三六
三、	ストルイビン反動期のボルシエヴィキとメンシエヴィキ。解黨派とオトゾヴィストに對するボルシエヴィキの闘争…………… 一三七	一三七
四、	トロツキズムに對するボルシエヴィキの闘争。八月反黨プロツク(聯合)…………… 一三七	一三七
五、	一九一二年ブラーグ黨會議。ボルシエヴィキ、獨立マルクス主義政黨となる…………… 一八一	一八一
要約	…………… 一八七	一八七
第五章	第一次帝國主義戰爭前の勞働運動昂揚期におけるボルシエヴィキ黨 (一九一二年—一九一四年)…………… 一九一	一九一
一、	一九一二年—一九一四年における革命運動の勃興…………… 一九二	一九二
二、	ボルシエヴィキ新聞「ブラヴダ」。第四次國會におけるボルシエヴィキ議員團…………… 一九六	一九六
三、	合法的組織におけるボルシエヴィキの勝利。革命運動の一層の昂揚。帝國主義戰爭の前夜…………… 二〇五	二〇五
要約	…………… 二〇九	二〇九
第六章	帝國主義戰爭期のボルシエヴィキ黨。ロシアにおける第二革命……………	二〇九

(一九一四年—一九一七年三月)……………三二

一、帝國主義戰爭勃發と原因……………三二

二、第二インターナショナル諸黨の自國帝國主義政府への加擔。個々の社會排外主義黨への第二インターナショナルの分解……………三六

三、戰爭、平和および革命に關するボルシェヴィキ黨の理論と戰術……………三三

四、ツァー軍隊の敗戦。經濟的破綻。ツァー制の危機……………三八

五、二月革命。ツァー制の倒壊。労働者、兵士代表ソヴェートの樹立。臨時政府の成立。二重政權……………三二

要約……………三七

第四章

ストルイビン反動期におけるメンシエ
 ヴイキとボルシェヴィキ。ボルシェ
 ヴイキ、獨立マルクス主義政黨となる

(一九〇八年—一九一二年)

一、ストルイビンの反動。反政府インテリゲンチヤ層内に起つた腐敗作用。頽廢。黨インテリゲンチヤ一部のマルクス主義の敵陣への移行、マルクス主義理論を修正せんとする企て。レーニンの著書『唯物論と經驗批判論』における修正派に對する彼の反駁、およびマルクス主義政黨の理論的基礎の擁護

一九〇七年六月三日、第二次國會（デューマ）はツァー政府によつて解散された。史上では、通例この事件を六月三日のクーデターといつてゐる。さらに、ツァー政府は第三次國會の選舉に關する新法令を發布し、かうして、一九〇五年十月十七日の詔書を政府みづから破棄した。なぜなれば、その詔書で政府は國會の協賛を経てのみ新法令が發せられることを公約してゐたからである。第二次國會の社會民主議員團は裁判にかけられ、勞働階級の代表者諸君は懲役および流刑に處せられた。

新選舉法は、國會における地主と商工ブルジョアジの代表の數を、いちじろしく増加できるやうに工夫されてあつた。同時に、農民と勞働者の代表の數は、以前からくわづかであつたが、さらに數分の一に減らされた。

第三次國會は、その構成では、黒百組（極右反動團體の總稱——譯註）とカデット（立憲民主黨）的のものであつた。すなはち、議員總數四百四十二人の内、百七十一人が右翼（黒百組員）、百十三人がオクチャプリストと同系統の議員、百一人がカデットとこれにちかひ一派の議員、十三人がツルドヴィキ（勤勞議員團——註）、そして十八人が社會民主黨員であつた。

（註——一九〇六年、第一次國會において、エス・エルのインテリゲンチヤに率ゐられた農民議員の一部によつて構成された、小ブルジョア黨派——譯者）

右翼（彼等は國會の右側の議席を占めてゐたからかく呼ばれた）は、勞働者・農民の最惡の敵、すなはち黒百組のやうな封建地主を代表した。彼等こそは農民運動の彈壓にあつて農民を大衆的に答うち、銃殺し、ユダヤ人ボグロム（組織的暴行掠奪——譯者註）を組織し、示威運動に参加する勞働者を打ちのめし、革命中に集會の開かれた會場を無慘に燒きはらつた連中なのである。右翼は勤勞大衆の最も殘忍な彈壓と、ツァーに無限の權力をあたへることを支持した。彼等はまた一九〇五年十月十七日のツァーの詔書にも反對したのである。

國會で右翼に近く接してゐたものは、オクチャプリスト黨、すなはち「十月十七日同盟」であつた。オクチャプリストは大産業資本の利益と資本家的方法で領地を經營してゐる大地主の利益とを代表した。（カデット黨に屬した大地主の多數は、一九〇五年の革命のはじめにオクチャプリストに鞍がへした。）オクチャプリストが右翼と相違するところは、十月十七日の詔書を、言葉の上だけではあるが、承認するといふ一點だけであつた。オクチャプリストはツァー政府の内外政策を完全に支持した。

カデット、すなはち「立憲民主」黨は第三次國會では、第一次および第二次國會よりも議席を減じた。それは地主の投票の一部が、カデットからオクチャプリストの方に移つたことに起因する。

さらに、第三次國會には、ツルドヴィキと呼ばれる小ブルジョア民主主義者の一小團體があつた。彼等は國家においてカデットと勞働者派民主主義者（ボルシエヴィキ）との間を彷徨した。國會のツルドヴィキはすこぶる弱くはあつたが、彼等は大衆すなはち農民大衆を代表したことを、レーニンは指摘した。カデットと勞働者派民主主義者との間をツルドヴィキが右顧左眈することは小有産者たる階級的地位のしからしめるところである。レーニンはボルシエヴィキ派議員、すなはち勞働者派民主主義者に、次のやうな

任務をあたへた。「弱い小ブルジョア民主主義者をたすけ、彼等から自由主義者の影響をもぎとり、右翼に反対しただけでなく、反革命的カデットに反対する民主的陣營を結成すること」と。(シーニン全集、第十五巻四八六ページ)

一九〇五年の革命中に、とくにその敗北後に、カデットはますます反革命的勢力たることを暴露した。彼等は、その「民主主義的」假面をいよいよよかなくなり、正真正銘の君主主義者、ツァーリ制の擁護者として行動した。一九〇九年には、著名なカデット作家の一人は「ヴェヒ(道標)」といふ論集を刊行し、その中で、ツァーリ制が革命を粉砕したことに對して、ブルジョアジーには「感謝してゐる。答と絞首臺の政府であるツァーリ政府にへつらひ、尻尾をふりながら。カデットは同書で露骨にかう書いてゐる「われ等はこの政府を祝福しなければならぬ、この政府のみが、銃剣と牢獄によつて人民の憤怒からわれら(自由主義ブルジョアジー)をなほ保護してくれるからである」と。

ツァーリ政府は、第二次國會を解散し、國會社會民主議員團を彈壓し、さらにプロレタリアートの政治および經濟的諸團體を入念に破壊しはじめた。既決監や要塞や流刑地は革命家で一ぱいになつた。そして、彼等は獄中でむごたらしく殴りつけられ、苦痛をあたへられ、拷問にかけられた。黒百組的行動のテロルは自由に荒れくるつた。ツァーリの大巨であるストルイピンは全國の津々浦々に絞首臺をつくつた。そして數千の革命家は刑場の露と消えた。當時、絞首臺は「ストルイピンのネクタイ」といはれてゐた。

ツァーリ政府は、労働者・農民の革命運動を打破するにあつて、抑壓、懲罰隊、銃殺、投獄、懲役判決等の手段だけにかぎつたわけではなかつた。「親父様ツァーリ」に對する農民の素朴な信仰が、だんだん失はれてゆくことを同政府は知り、驚愕した。そこで、政府は大幅な術策を弄した。農村における鞏固な政府の支柱を、農村ブルジョアジー内の數の多い階級、すなはちクラーク(富農)を通じて打ちたてることを考へた。

一九〇六年十一月九日、ストルイピンは新しい農業法を發布し、オブシチーナ(土地共有體)を脱退して農場(フートル)にゆくことを農民に奨励した。ストルイピンの農業法はオブシチーナ使用地制を破壊した。オブシチーナを抜けて、自分の分前地を私有財産として所有することを農民は勧誘された。以前にはゆるぎなかつたが、いまでは自分の分前地を賣ることが農民にできるやうになつた。一人の農民が、自分の所屬するオブシチーナを去る場合には、オブシチーナは一區劃の土地(フートル(農場)、あるひはオトルブ(割前地))とよばれた。を彼にあてがはなければならなかつた。

そこで、富農、すなはちクラークは、安い値段で貧乏な農民の土地を買ひしめる機會をえた。この農業法が發布されてから數年もたぬ内に、百萬を越える貧乏な農民はすつかり土地を失ひ、まったく零落してしまつた。貧農が土地を失ふにつれて、クラークの農場又はオトルブの數は殖えた。ときには、これらは賃労働、日傭を大規模に使用する本當の領地であつた。オブシチーナの最良の耕地を、クラーク農場經營者にあてがふことを政府は農民に強要した。

農民「解放」にあつては、地主は農民の土地を奪つた。しかるに、今やまた、クラークはオブシチーナの土地を掠奪しはじめ、その最良地を獲得し、貧農の分前地を捨て値で買ひしめた。

ツァーリ政府は、土地購入と農場經營準備のために、クラークに巨額の金を貸與した。ストルイピンは、クラークを小地主に、ツァーリ專制制度の忠實な擁護者に仕立てることを欲した。

一九〇六——一五年の九ヶ年間にだけでも、二百萬以上の農家がオブシチーナから脱退した。ストルイピン政策の結果、わづかな農地を持つ農民や貧農の状態はますます悪化していつた。農民階級内の分化作用はますます目立つてきた。農民はクラーク農場經營者と衝突しはじめた。同時に農民は、ツァーリ政府と地主カデットの國會が存続するかぎり、地主の土地を獲得することなどは、できないことを理解しはじめた。

農場への移動が盛んになつた時期（一九〇七—一九〇九年）には、農民運動は沈滞しはじめたが、しかし間もなく、一九一〇年一九一一年、およびそれ以後、オプシチーナ員とクラシク農場経営者との衝突によつて、地主とクラシクに反抗する農民運動は非常な勢ひで成長した。

工業の方面でも、革命後、大きな変化があつた。産業の集中、いひかへれば、ますます力を増大してゐる資本家のグループの手中に、産業の併合と集中がいちじるしく強化された。一九〇五年の革命前にすら資本家連は聯合を組織しはじめ、これによつて国内の物價をつりあげ、あるひはこれによつてえられた超利潤を輸出貿易の振興に利用し、安價で外国に投資し、海外市場を獲得することができるようになつた。これらの資本家聯合（獨占）はトラストとかシンジケートとか呼ばれた。革命後資本家トラストやシンジケートの数はさらに増加した。また、大銀行の数も増加し、その産業上における役割はますます重要になつた。外国資本のロシア国内への流入は盛んになつた。

かやうにして、ロシアの資本主義は獨占資本主義、帝國主義的資本主義に大規模に轉化していつた。數年間の不景氣の後、産業は回復しはじめ、石炭、金屬、石油（原）、纖維及び砂糖の生産は増加した。穀物の輸出は巨額に達した。

なるほど、當時のロシアの産業は發達はしたが、しかし、ロシアはなほ西歐とくらべるとおくれをり外國資本家に依存してゐた。ロシアでは機械や工作機械は製作されず、みな海外から輸入した。自動車工業、化學工業、あるひは人工肥料製造といふやうなものはなかつた。武器製造の點でも、他の資本主義諸國よりロシアはおくられてゐた。

ロシアが後進國であることを示すために、レーニンは国内の金屬消費量の少いことを指摘して、かう書する。

「農奴解放後の半世紀間に、ロシアの鐵消費は五倍に激増した。それにもかゝはらず、ロシアは依然

として貧弱なほど未開な、信じられないほどおくれ、先例のないほどおくれた國であつた。近代的生産手段は英國の四分の一、ドイツの五分の一、アメリカの十分の一にすぎなかつた。」（レーニン全集、第十六卷五四三—五五三頁）

ロシアの經濟的並に政治的後進性の直接の結果は、ロシア資本主義とツァーリ制の兩者が西歐資本主義に依存したといふことである。

これは次のやうな事實にあらはれてゐる。すなはち、石炭、石油（原）、電氣施設および冶金といふやうな非常に重要な産業が外國資本の手に握られ、またツァーリ・ロシアは機械と設備のほとんど全部を國外から輸入しなければならなかつたのである。

そのことはペラ棒な條件で外資契約がなされたといふ事實にもあらはれてゐる。この外債の利子を支拂ふために、ツァーリ制は年々何億ルーブルといふ大金を人民の懐からしぼり取つた。

そのほか、右のことはロシアの「同盟國」との秘密條約中にもあらはれてゐる。この密約によつて、ツァーリ政府は戰爭勃發に際し、「同盟國」を援けるために帝國主義戰線へ數百萬のロシア兵を送り、そして、英佛資本家の老大な利潤を確保することを保證したのであつた。

憲兵と警官、ツァーリのプロバカートル（挑發煽動者）と黒百組の暴漢による労働階級に對する攻撃が、おそろしく野蠻であつたことは、ストルイビン反動期の特徴であつた。しかし、彈壓手段で労働者を絶えず苦しめたのはツァーリの部下だけではなかつた。彼等に劣らず彈壓に熱中したのは工場主であつて、彼等の労働階級に對する攻撃は、不景氣と失業の増大の年にとくにひどかつた。工場主は大衆的ロツク・アウトを宣言し、ストライキに活躍した階級意識の強い労働者の「ブラックリスト（黒表）」を作成した。一度ある者が黒表に載せられたが最後、彼は同一産業の工業家聯盟に屬する工場では一切仕事を免れることは望めなかつた。すでに一九〇八年に、賃銀率は一割から一割五分まで切り上げられた。労働時間は何

處でも十時間か十二時間に延長された。非道な罰金制はふたゞび全盛をきはめた。

一九〇五年の革命の失敗によつて、革命の同伴者の仲間に分裂と腐敗の過程がはじまつた。腐敗、頹廢の傾向はインテリゲンチヤの間にとくに甚だしかつた。革命の激烈な昂揚期に、ブルジョアの陣地から運動に投じた同伴者連は、反動期と共に黨を去つていつた。彼等のある者は公然たる革命の敵陣に加はり、ある者はその時まででも存続をつゞけ合法的に活動してゐる労働團體内に立てこもり、プロレタリアートを革命の道からそらせ、あるひはプロレタリアートの革命政黨を中傷することに浮身をやつした。革命から逃げだして、同伴者は反動家の寵をうけ、ツァーリ制と仲良く暮すことをこゝろみだ。ツァーリ政府は革命の失敗を利用して、もつと憶病で利己心の強い革命の同伴者をプロバカートルに編入した。これらの下劣なユダ(註)Ⅱプロバカートルはツァーリの秘密政治警察の手で労働階級や黨の組織内に潜入させられ、そこで内部からスパイを働き、革命家を裏切つた。

(註)キリストを賣つた裏切者(譯者)

反革命の攻勢は、思想戦線の上でも同様に行はれた。かくてあらはれたいのは、流行作家の大群である。彼等はマルクス主義を「批判」し、それを「こなごなに引きさき」、革命を愚弄・嘲弄し、變節轉向を稱揚し、あるひは「個性禮讚」に託して淫樂にふけつた。

哲學の領域においては、マルクス主義を「批判」し、修正せんとする企てがますますしつこくなされた。あらゆる種類の宗教的傾向が「科學的なり」と主張される理論で偽裝されてあらはれ出た。

マルクス主義を批判することが一つの流行となつた。

これらすべての連中は、色彩こそ種々雑多ではあるが、一個の共通目的を追及してゐた。すなはち、大衆を革命から引きはなすといふ目的を追及してゐたのである。

頹廢と懷疑は、また黨インテリゲンチヤの一部にも影響した。彼等はみづからマルクス主義者なりと考

へたが、しかしマルクス主義的態度を固守したことは一度もなかつた。彼等の間には次のやうな評論家がゐた。ボグダノフ、ベザロフ、ルナチャルスキー(一九〇五年にはボルシエヴィキに與した)、エシユケヴィチ、ヴァレンチノフ(メンシエヴィキ)等。彼等は、マルクス主義の哲學的、理論的基礎に對し、すなはち辯證法的唯物論に對し、かつマルクス主義の歴史科學の基礎に對し、すなはち史的唯物論に對し、一齊に「批判」を開始した。この批判は在來の批判とは趣きを異にし、公然と眞正面からなされず、マルクス主義の基本的立場を「護る」といふ假面の下に、陰性な偽善的な形をもつてなされた。この連中は主張してゐる。自分等は、大體において、マルクス主義者ではあるが、マルクス主義を改善し、その原理からあるものを除去したい、と。彼等はマルクス主義に對する敵意を體裁よく否定し、二枚舌主義者によさわしく自分等をいつもマルクス主義者と自稱してはゐるが、實際にはマルクス主義に敵對してゐた。なぜなれば、彼等はマルクス主義の理論的基礎をひそかに顛覆しようとしてゐるからである。この偽善的批判は平黨員をあざむくことを目當てにしてをり、彼等を迷はせることができた。こゝにその危険があつた。そして、マルクス主義の理論的基礎の顛覆を目指すこの批判が偽善的であればあるほど、黨に對してはますます危険なものとなつた。といふのは、黨に對し、革命に對する反動の一般的追撃とこの批判といよいよ密接に同盟してきたからである。マルクス主義を棄てたインテリゲンチヤの一部は新宗教の創立を提唱するところまでいつた。(彼等は「求神者」とか「建神者」とか呼ばれてゐた。)

これらのマルクス主義理論の變節者を適切に論駁し、彼等の假面をはぎ取つて彼等を徹底的に暴露し、かくしてマルクス主義黨の理論的基礎を防衛することが、マルクス主義者にとつての緊急な任務となつた。この任務は「有名なマルクス主義理論家」と自認するブレハノフとか、彼のメンシエヴィキ仲間によつて、引受けられるにちがひないと考へたことは當然であつた。ところが、彼等は一、二の小つぽけな新聞

短評を書きつばなして、退場するといふ方法をえらんだ。

この任務を遂行したのがレーニンであつて、一九〇九年に發行された彼の名著「唯物論と經驗批判論」でそれがなされた。

レーニンは同書で次のやうに書いてゐる。

「この半年たらずのうちに、辯證法的唯物論の攻撃を主にした、あるひはそれにほとんど全巻をさへげた四種の書籍が出版された。まづ第一には、バザロフ、ボグダノフ、ルナチャルスキー、ベルマン、ガルフォンド、ユシケヴィチおよびスヴォロフ等の論集「マルクス主義の（？）これは「反」マルクス主義といつた方が正しい」哲學概論、（セント・ペテルブルグ一九〇八年）、ついでユシケヴィチの「唯物論と批判的實在論」、ベルマンの「現代認識論の光で見た辯證法」、ヴァレンチノフの「マルクス主義の哲學的構成等である。……これらの面々はいづれも、政治的見解では鋭い差異をもつてゐるにもかゝらず、辯證法的唯物論に対する敵意で結束してをり、しかも同時に哲學上ではマルクス主義者なりと自稱してゐる。ベルマンはいふ、エンゲルスの辯證法は「神祕主義」である、と。バザロフは、エンゲルスの見解は「古びた」と、それがいかにも自明の事實であるかのごとく放言する。かくして、わが勇敢なる戰士によつて唯物論は論破されたやうに見え、彼等は「現代認識論」、最新哲學」（すなはち「最新實證主義」や、「現代自然科學哲學」等で、あるひは「二十世紀自然科學哲學」でさへ彼等は誇らかに引證してゐる。レーニン全集、第十三卷一〇ページ）

ルナチャルスキーは彼の盟友である哲學上の修正主義者を辯明して、「あるひはわれわれは迷ひこんだかもしれない、しかしわれわれは道を求めてゐるのだ」といつた。これに答へてレーニンは書いた。

「自分についていへば、自分もまた哲學上の「求道者」である。すなはち、この草稿（「唯物論と經驗批判論」を指す——編輯部註）の中での自分の任務は、マルクス主義の外見の下に信すべからざるは

ど昏迷し、混亂し、反動的なものをもたらしした人々が、どの點で迷つたかを探求することである。」

（前掲書、二二二ページ）

しかし事實の上では、レーニンの著書はこのひかへ目な任務をはるかに越えたものであつた。マルクス主義的唯物論に對抗して、上品で磨きのかけられた觀念論をその論作中で提供しようとしたボグダノフ、ユシケヴィチ、バザロフおよびヴァレンチノフ、ならびに彼等の哲學上の諸先生、アヴェナリウスとマフハ、——これらの人々に對する批判以上のものが實際にレーニンの勞作であつた。同時に、それはマルクス主義の理論的基礎である辯證法的、および史的唯物論の擁護であり、歴史の全時代、すなはちエンゲルスの死からレーニンの「唯物論と經驗批判論」の出現までの時期を通じて、科學、とくに自然科學によつて收得された重要なもの一切の唯物論的普遍化であつた。

レーニンは同書で、ロシアの經驗批判論者とその外國の先輩を完膚なきまで批判しながら、哲學的・理論的修正主義に關して、次の結論に達した。

（一）「マルクス主義のより巧緻な模造、マルクス主義の外貌をもつた反唯物論の最も巧緻な模造——これが經濟學上における、戰術問題における、哲學全般における近代修正主義の特徴である。」

（前掲書、二七〇ページ）

（二）「マツハとアヴェナリウスの全學派は觀念論の方向にすゝんでゐる。」（前掲書、二九二ページ）

（三）「わがマツハ主義者は皆な觀念論に落ちこんだ。」（前掲書、二八二ページ）

（四）「經驗批判論の認識論的スコラ（煩瑣）哲學の背後に、哲學上の黨派戦を見ざるをえなす。この鬭争は終局において近代社會の敵對階級の傾向と思想（イデオロギイ）とを表現する。」（前掲書、二九二ページ）

（五）「經驗批判論の客觀的・階級的役割は、信仰哲學者連の一般的には唯物論に對抗し、特殊的には

史的唯物論に對抗する闘争において、信仰哲學者への従者の役割にほかならない。」（信仰哲學者とは信仰を科學よりも上におく反動主義者——編輯部註）（前掲書、二九二ページ）

（六）「哲學的觀念論は……宗教的神祕論への道である。」（前掲書、三〇四ページ）
レーニンの著書が、わが黨史の上に演じた偉大な意義を評價し、かつストルイビン反動期におけるあらゆる種類の修正主義者と裏切者に對抗して、レーニンがいかなる理論的寶物を守護したかを理解するためには、たとひ簡單にでも、辯證法のおよび史的唯物論の基礎をわれわれは識る必要がある。

このことはとくに必要である。なぜならば、辯證法のおよび史的唯物論は共產主義の理論的基礎、すなはちマルクス主義黨の理論的基礎をなすものであつて、これ等の基礎を知り、これを把握することは活動的なわが黨員全部の任務であるからである。

さて、それでは、

（一） 辯證法的唯物論とは何か？

（二） 史的唯物論とは何か？

二、辯證法的、および史的唯物論について

辯證法的唯物論はマルクス・レーニン主義黨の世界觀である。それが辯證法的唯物論といはれる理由は自然現象の取扱ひ方、その研究および認識の方法が辯證法的であつて、自然現象の解釋、この現象の概念理論が唯物論的であるからである。

史的唯物論は、辯證法的唯物論原理の社會生活研究への延長であり、辯證法的唯物論原理の社會の生活現象への、社會とその歴史の研究への一つの應用である。

マルクスとエンゲルスが、彼等の辯證法的方法を説く場合、辯證法の主要特徴を定義した哲學者としてのヘーゲルに言及するのが常であつた。だからと云つて、マルクスとエンゲルスの辯證法が、ヘーゲルの辯證法と同一であるといふのではない。事實において、マルクスとエンゲルスは、ヘーゲルの辯證法の觀念論的外殻を取り去つて、その「理性的核」だけをそこから借り、さらに辯證法を發展させて、それに近代的科學形式を與へたのである。

マルクスは言ふ。

「自分の辯證法的方法は、その基礎において、ヘーゲルのものと異なるだけでなく、まさにその正反對である。ヘーゲルは思惟行程を觀念と呼んで獨立の主體にさへしてゐるが、彼にとつてその思惟行程は現實世界の創造主であり、現實世界はたゞ觀念の外部現象形態であるにすぎない。これに反し、自分にとつては、觀念なるものは、人類の頭腦によつて反映され、思惟の形態に翻譯された物質世界にほかならぬ。」（マルクス著『資本論』第一卷ドイツ版第二版跋文）

マルクスとエンゲルスが彼等の唯物論を説く場合、唯物論の權威を回復した哲學者としてのフオイエッパツハに言及するのが常であつた。だからと云つて、マルクスとエンゲルスの唯物論がフオイエッパツハの唯物論と同一であるといふのではない。事實において、マルクスとエンゲルスはフオイエッパツハの唯物論からその「核心」を借り、それを唯物論の科學的、哲學的理論に發展させ、その觀念論的、宗教的、倫理的邪魔物を除き去つた。フオイエッパツハは基本的には唯物論者ではあつたが、唯物論といふ名前に反對したことは周知のことである。エンゲルスは一再ならず公言した。フオイエッパツハは「彼の唯物論的根據にもかゝらず、古い觀念論的桎梏から未だ抜けでてゐなかつた」し、また「フオイエッパツハの眞の觀念論は、われわれが彼の倫理學と宗教哲學に觸れるときただちに明瞭になつてくる。」と。（マルクス・エンゲルス全集、第十四卷六五二—六五四ページ）

辯證法（デアアレクチック）はギリシ語の「デアレゴ」に由来してつて、議論、討論するといふ意味である。古代にあつては、辯證法は、論敵の論旨の矛盾を摘發し、その矛盾を克服することによつて、眞理に到達せんとする辯法と考へられた。古代のある哲學者は、思惟上の矛盾を暴露し、反對論を對立させることが、眞理到達の最善法であると信じてゐた。この思惟の辯證法的方法は、後に自然現象に延長されて、自然の認識の辯證法的方法に發展した。その辯證法的方法によれば、自然現象を不斷（運動と、不斷の變化とにあるものと観、また自然の發展を自然における矛盾の發展の結果と観、自然における對立勢力の相互作用の結果と観る。

辯證法はその本質において形而上學の正反對である。

(一) マルクス主義的辯證法的方法の主要特徴は次の諸點にある。

(イ) 形而上學とことなり、辯證法によれば、自然を、相互に關聯なく、孤立し、獨立した事物または現象の偶然的集積と観ないで、事物、現象が互に有機的に關聯し、制約しあひ、限定しあふところの相關的、全一體と観る。

ゆゑに、辯證法的方法は次のごとく主張する。すなはち、いかなる自然現象も、それが四圍の現象と關聯せず、孤立した形で取りあげられるならば、毫も理解することはできない。なぜならば、あらゆる自然の領域におけるいかなる現象も、これが四圍の諸條件との關聯なしに、切りはなされて解釋されるならば、荒唐無稽なものとなりうるからである。逆に、いかなる現象も、それが四圍の現象によつて條件づけられたものとして、四圍の現象との不可分的關聯において觀察されるならば、理解され、説明される。

(ロ) 形而上學とことなり、辯證法は次のごとく主張する。すなはち、自然なるものは、静止と不動、停滞と不變の狀態ではなくて、不斷の運動と變化、不斷の更新と發展の狀態であり、そこでは何物か、不斷に發生し發展し、何物か、不斷に崩壊し衰亡する。

ゆゑに、辯證法的方法の求めるところは、現象はその相互的關聯や相互的制約からだけでなく、その運動、その變化、その發展、その發生、その死滅といふ點からも觀察されなければならぬことである。

辯證法的方法によつて第一義的に重要なことは、一定の瞬間に一見堅牢に見えても、すでに衰亡しはじめてゐるやうなものではなくて、一定の瞬間に一見堅牢に見えなくても、發生し發展するやうなものである。けだし、辯證法的方法は、發生し發展するもののみが打ち克ちがたいものと考へるからである。

エンゲルスはいふ。

「全自然は最小のものから最大のものにいたるまで、砂粒から太陽にいたるまで、原生生物（原生細胞——編輯部註）から人間にいたるまで、無窮の發生と消滅において、不斷の流動において、不休の運動と變化において、その存在を保つてゐる。」（前掲書、四八四ページ）

エンゲルスはつゞけていふ。それゆゑに、辯證法は

「事物とその概念的な映像を、その相互關聯において、その連鎖において、その生滅の運動において、把握する。」と。（マルクス・エンゲルス全集第十四卷二三ページ）

(ハ) 形而上學と異り、辯證法は發展過程を、量的變化が質的變化を起さない單純な成長過程と見ないで、次のやうな發展と見る。すなはち、瑣末な、目にもつかぬほどの量的變化から、公然たる根本からの變化に、質的變化に轉化するやうな發展、質的變化が漸進的におこらずに、急速に、唐突に、一の狀態から他の狀態に飛躍の形をとつておこるやうな發展、變化が偶發的におこらずに、目につかぬ、ゆつくりした量的變化の集積の結果として、規則たゞしくおこるやうな發展、これである。

ゆゑに、辯證法的方法は次のごとく主張する。發展の過程は循環運動として、あるひはすでに發生したものの單純な繰りかへしとして解釋されるべきではなくて、向上運動として、古い質的状態から新しい質的状態への轉化として、單純から複雑へ、下級から上級への發展として解釋されるべきである、と。

エンゲルスはいふ

「自然は辯證法の試金石である。近代的自然科学が、この試験のために極めて豊富な、日々に集積されてゆく材料を提供し、それによつて自然にあつては結局すべてが辯證法的に行はれるのであつて、形而上學的に行はれるのではないこと、また、自然は永劫に一樣で、絶えず反復される回轉輪のやうに動くのではなくて、現實の歴史を體驗するものであることを、近代自然科学が舉證した。この點に關して、ダーウインの功績をあげなければならぬ。彼は、今日の全有機界、すなはち、動物、植物、したがつて人間もまた、幾百萬年の星霜を経た發展過程の一產物であるといふことを實證し、これによつて自然の形而上學的觀察に徹底的打撃を與へたのである。」(前掲書、二三ページ)

量的變化から質的變化への轉化としての辯證法的發展を叙述して、次のやうにエンゲルスはいつてゐる。「物理學においては、……あらゆる變化は、量から質への轉化であり、物體に内在するか、あるひはこれに傳達された或る形態の運動量の量的變化の結果である。たとへば、水の温度は、最初の間、水の液體状態に對しては何等の影響も與へない。けれども、やがて液體の水の温度が上昇または下降するうち、次の一定點に達する。すなはち、その定點においては、水の凝集状態は變化され、そして水は一の場合には蒸氣に轉化し、他の場合には氷に轉化する……。また、電燈のプラチナ線を發光せしめるには、一定の最小電流強度を必要とする。また、それぞれの金屬が各自の溶解熱度をもつがごとく、あらゆる液體もまた、われわれの装置で所要の温度を起しうるかぎり、ある壓力において一定の水點と沸騰點をもつ。最後にまた、あらゆる氣體も、適度の壓搾と冷却とを與へると、それが液體に轉化されるところの臨界點を有する……。物理學のいはゆる常數(一)の状態から他の状態に移る點——編輯部註)なるものは、大多數の場合に次のとき結節點を表現してゐるにすぎない。すなはち運動の量的(變化)増加または減少が、當該物體の状態のうちに質的變化を喚起するところの、した

がつて、量が質に轉化するところの結節點を表現してゐるにすぎない。」(前掲書、五二七—五二八ページ)さらにつけて、エンゲルスは化學に言及して、曰く

「化學を、量的構成の變化によつて、物體內に起る質的變化に關する科學なりといふことができる。これは既にヘーゲルによつて識られてゐた。……酸素の例を取らう。分子は普通に二個の原子を含むが、もし三個の原子を含む場合は、われわれはオゾンを得る。すなはち、臭氣と機能とにおいて普通の酸素と極めて明確に異なる一物體を得るのである。そして、酸素が窒素または硫黃と化合する種々の比例や、その比例ごとに爾餘の一切のものと質的に異なる物體が生れるが、かゝる相異なる比例については云ふまでもないことである。」(前掲書、五二八ページ)

さて、最後に、デューリングは、全力をあげてヘーゲルを嘲罵しながら、無感覺の領域から感覺の領域へ、無機物界から有機界への轉化は、新状態への飛躍であると云ふ有名な命題を、ヘーゲルからひそかに剽竊したが、このデューリングを批判して、エンゲルスはいつてゐる。

「これは正しくヘーゲルのいはゆる分量關係の結節點である、ここでは、一定の結節點まで、純粹に量的に増大するか、あるひは減少するならば、質的飛躍を起すのである。たとへば、熱せられた水、もしくは冷却された水にあつては、沸騰點および氷點が結節點であつて、ここでは新しい凝集状態への飛躍が——通常の壓力の下では——起る。したがつて、そこで量が質に變化されるのである。」(前掲書、四五—四六ページ)

(ニ) 形而上學とこととなり、辯證法は内在的矛盾は一切の自然の事物と現象とに内在するものであると主張する。なぜなれば、それらのすべては、その否定と肯定の面をもち、その過去と將來とをもち、その衰亡しつゝあるものと、發展しつゝあるものともつからである。また、辯證法はかうも主張する。これらの對立物間の闘争、古きものと新しきものとの闘争、死滅しゆくものと産れ出るものとの闘争、衰亡し

ゆくものと発展しゆくものとの闘争。これらの闘争が發展過程の内容、量的變化の質的變化への轉化の内容を構成するものである、と。

ゆゑに、辯證法は主張する。下級から上級への發展過程は、現象の調和した展開として起らずに、事物と現象に内在する矛盾の發現として、これらの矛盾に基いて作用する對立諸傾向の「闘争」としておこると。

レーニンによつて。

「辯證法とは、その嚴正な意味で、事物の本體内部にある矛盾の研究である。」(レーニン「哲學手帖」二六三ページ)

さらにつゞけていふ。

「發展は對立物の「闘争」である、」と。(レーニン全集、第十三卷三〇一、二ページ)

簡略にいつて、以上に述べたことが、マルクス主義的辯證法的方法の主要諸特徴である。されば、辯證法的方法の原理を、社會生活の研究や社會史の研究に延長することが、いかに無邊に重要であるか、またこれらの原理を社會史やプロレタリアート黨の實際活動の上に應用することが、いかに無邊に重要であるか、これを容易に理解することができる。

もし世界に孤立した現象がなく、もし一切の現象が相互に關聯し、相互に制約しあつてゐるならば、しばしば史家によつてなされるごとく、史上の各社會制度や各社會運動は、「永遠の眞理」とか、その他の先入觀念をもつて評價されるべきではなくて、かゝる制度や、かゝる運動を起した諸條件や、それらが關聯してゐる諸條件の見地から評價されるべきである。

奴隸制度は今日の狀態では無意味で、馬鹿げた、不自然なものにちがひない。しかし、解體しゆく原始社會の下では、奴隸制度は頗る當り前な、理にかなつた現象である。それは原始共同體にくらべると進歩

を意味したからである。

例へて云へば、一九〇五年のロシアにおけるやうに、ツァーリ制とブルジョア社會の存在した時に、ブルジョア民主共和國制を要求することは、すこぶる當然な、正しい、革命的要求であつた。なぜなれば、當時ブルジョア共和國制は一步前進であつたからである。ところが、ソヴェート同盟の現状の下に、ブルジョア民主共和國制を要求することは無意味で反革命的な要求となる。といふのは、ブルジョア共和國制はソヴェート共和國制にくらべると一步後退だからである。

すべてのものは條件、時および場所によつて制約される。

社會現象に對するかゝる歴史的取扱ひ方をしないかぎり、歴史科學の存在と發展はありえないことは、明白である。けだし、かゝる態度のみが歴史科學をして事變の渾沌たる寄せ集めとなり、馬鹿げた間違ひの堆積となることから救ふことができるからである。

さらに、もし世界が不斷の運動と發展の狀態にあり、またもし古きが死滅して新しきが増殖することが發展の法則であるならば、「不動」といふ社會制度もありえないし、私有財産や搾取が「不滅の法則」となりえないし、地主の農民隸屬化や、資本家の労働者隸屬化が「不滅の思想」となりえないのは明瞭である。

ゆゑに、かつて封建制度が資本主義制度によつて取りかへられたやうに、資本主義制度も社會主義制度によつて取り代へられることができる。

ゆゑに、また、現在は支配的勢力となつてゐるが、最早發展しないところの社會層に、われかれの重點をおくのではなくて、現在は支配的勢力となつてゐないが、しかし發展をつゞけ、かつ、將來を有する社會層に重點をおかねばならぬ。

前世紀の八十年代、マルクス主義者とナロードニキとの闘争時代には、ロシアでは、人口の大多數を占めてゐた個人農民にくらべて、プロレタリアートは極く少數を占めるにすぎなかつた。しかし、プロレタ

リアートは階級として発展してゐたが、階級としての農民はじつに分解してゐた。そして、プロレタリアートが階級として発展してゐたといふその理由で、マルクス主義者は重點をプロレタリアートにおいた。そして、彼等は間違つてゐなかつた。周知のごとく、その後プロレタリアートはさうたる一勢力から第一級の歴史的勢力に成長したのである。

故に政策に過失なからしめんがためには、前方を見るべく、後を見てはならぬ。

さらに緩慢な量的變化が急激な質的變化に轉化することが發展の法則であるならば、被壓迫階級によつてなされる革命は、まつたく自然で不可避の現象であることがあきらかである。

ゆゑに、資本主義から社會主義への轉化や資本主義の桎梏からの労働階級の解放は、緩慢な變化によつて、改良によつてなされず、資本主義制度の質的變化、すなはち革命によつてのみ行はれるものである。

ゆゑに、政策に過失なからしめんがためには、革命家たるべく、改良主義者であつてはならぬ。

さらに内的矛盾の發現を經、これらの矛盾を克服するために、これらの矛盾にもとづいた對立諸勢力間の衝突を經て、發展が起るものであるならば、プロレタリアートの階級闘争は全く自然で、不可避の現象である。

ゆゑに、われわれは資本主義制度の矛盾を彌縫せず、それを發せき、解きほどかなければならぬ。また、われわれは階級闘争を鎮めず、とことんまで遂行しなければならぬ。

ゆゑに、政策に過失なからしめんがためには、われわれは非妥協的なプロレタリア階級政策を遂行すべきであつて、プロレタリアートとブルジョアジーの利益を協調せんとする改良主義政策、いはゆる資本主義の社會主義への「成長」にもとづいた妥協政策を採つてはならぬ。

以上が、社會生活に、社會史に應用された場合のマルクス主義的辯證方法である。

さて、次にマルクス主義的哲學的唯物論についていへば、それは本質的に哲學的觀念論の正反對である。

(一) マルクス主義的哲學的唯物論の主要特徴は、次の諸點である。

(イ) 世界が「絶対觀念」「宇宙精神」「意識」を體現するものと見た觀念論と異り、マルクスの哲學的唯物論は次のやうに主張する。すなはち、世界はその本性において物質的であること、多種多様の世界の現象は運動する物質の種々の形式をなすこと、辯證法的方法によつて實證されたやうに、現象の相互關聯と相互制約は運動する物質の發展法則であること、世界は物質の運動する法則に従つて發展し、「宇宙精神」などの必要に迫られてゐないことを主張するのである。

エンゲルスはいつてゐる。

「唯物論的世界觀は、何の附加もなしに、そのままに觀た自然概念に外ならぬ。」(マルクス・エンゲルス全集、第十四卷六五—一頁)

「全體の統一されたものであるところの世界は、いかなる神によつても、いかなる人間によつても、創造されたものではない。それは、規則立つたパツと燃えあがり、規則立つてやがて消えゆく永久生命の火であつたし、現在もさうであるし、將來もさうであらう」と説いた古代哲學者ヘラクレイトスの唯物論に言及して、レーニンは、それは「辯證法的唯物論原理の非常にうまい説明」であると云つた。(レーニン「哲學手帖」三一—八頁)

(ロ) 觀念論は、われわれの意識のみが現實に存在し、物質世界、實在、自然は、われわれの意識のうちのみ、われわれの感覺、觀念、認識のうちのみ存在すると斷定する。が、これと異り、マルクス主義哲學、唯物論は次のやうに主張する。すなはち、物質、自然、實在はわれわれの意識の外に、獨立して存在する客觀的現實であること、物質こそが感覺、觀念、意識の源泉であるが故に、物質は第一次的であること、しかるに意識は物質の反映であり、實在の反映であるが故に、意識は二次的で、派生的である

こと思惟は、發展において高度の完成の域に達した物質の産物であり、すなはち頭腦の産物であつて、しかもその頭腦は思惟の器官であること、ゆゑに思惟と物質とを分離するならば、重大な誤謬を犯さざるを得ないといふことを主張するのである。

エンゲルスは當つてゐる。

「實在に對する思惟の關係、自然に對する精神の關係、これに關する問題は全哲學上の最高問題である。この問題に哲學者の與へた回答の如何によつて、彼等は二つの大陣營に分裂した。自然に對する精神の本源性を主張した人々は、……觀念論の陣營を形成した。自然を本源的なものと見做した他の人々は、唯物論の種々の學派に屬した。」(カール・マルクス、選集、第一卷三二九ページ)

「われわれ自身の屬してゐる物質的な、感性的に知覚しうる世界が、唯一の現實的なものである……われわれの意識と思惟とはいかに超感性的に見えても、一個の物質的な、肉體的器官、すなはち腦髓の所産である。物質が精神の所産ではなくて、精神自體が物質の最高所産たるにすぎない。」(前掲書、三三三ページ)

物質と思惟との問題に關して、マルクスはいふ。

「思惟するところの物質から思惟を分離することはできない。物質はすべての變化の主體である。」

(前掲書、三〇二ページ)

マルクス主義の哲學的唯物論を性質づけて、レーニンは言つてゐる。

「一般に唯物論は、意識、感覺、經驗、等から獨立せる客觀的實在(物質)を認める……。意識は……實在の反映にすぎないものであつて、たかゞ、眞實に近い(妥當な、理想的に正確な)實在の反映である。」(レーニン全集、第十三卷二六六―二六七ページ)

物質に、つゞけていふ。

(1) 「物質とは、われわれの感官に作用して、感覺を生むものである。物質は感覺においてわれわれにあたへられた客觀的現實である……。物質、自然、實在、物理的なものが第一次的であつて、精神、意識、感覺、心理的なものは第二次的である。」(前掲書、一一九―一二〇ページ)

(2) 「世界の畫像は、いかに物質が運動し、……かに「物質が考へる」かと云ふ畫像である。」(前掲書、二八八ページ)

(3) 「頭腦は思想の器官である。」(前掲書、一二五ページ)

(ハ) 觀念論は、世界とその法則を識る可能性を否定する。それは、われわれの知識の確實性に信をおかず、客觀的眞實性を認めず、しかも、科學の決して知ることのできない「物それ自體」などで世界は充滿してゐると主張する。觀念論と異り、マルクス主義哲學的唯物論は次のやうに主張する。すなはち、世界とその法則とは完全に識ることのできるものであること、自然法則に對するわれわれの知識は、實驗と實踐によつてためされて、客觀的眞實の妥當性をもつ確實な知識であること、世界に識ることのできないものはない。しかし未だ識られてはゐないが、やがて科學と實踐の力で明かにされ、識られるものがあるだけであることを主張するのである。

世界は不可知であり、不可知の「物それ自體」なるものがあるといふカント、および他の觀念論者の命題を、エンゲルスは批判すると共に、われわれの知識は確實性のある知識であるといふ有名な唯物論的命題を辯護して、次のやうに書いてゐる。

「これと、その他一切の哲學的狂想に對する最も適切な反證は、實踐、すなはち、實驗と産業である。われわれが自然現象を自ら作り、それをその諸條件から生み出し、その上にそれをわれわれの目的に利用し、かくしてわれわれが或る自然印象に對するわれわれの理解の正しさを證明することができる

ならば、その時こそ、カント流のつかみどころのない「物それ自體」などといふものゝ終末である。動植物の體內で作られた化学的物質は、有機化学がそれらを次々に生産しはじめるまでは、かゝる「物それ自體」としてとどまつた。これによつて「物それ自體」がわれわれのための物となつた。アリザリンのごときが、その一例である。アリザリンはあかねの色素であつて、これをわれわれは中野原のあかねの根から苦勞して作るのではなくて、コールタールからはるかに廉價で簡単に製造してゐるのである。コペルニクスの太陽系は、三百年の久しきにわたつて、一に對して百、千、萬もの眞實性のある假説であつたが、それでも依然として一つの假説であつた。しかるに、レヴェリエーが、この體系によつて與へられた材料から一つの未知の惑星の存在の必然を演繹したのみならず、この惑星が必然にかからねばならぬ天空の位置をも算定した時、そして次いで、ガリレオがこの惑星を現實に發見した時、コペルニクスの體系は立證されたのである。(カール・マルクス、選集、第一卷三二〇ページ)

レーニン、ボグダノフ、バザロフ、ユシイケヴィチ、その他マツハ追従者を信仰哲學なりと難詰し、自然の諸法則に對するわれわれの科學的知識こそが、確實な知識であり、かつ科學上の諸法則こそが客觀的眞理を代表するものであるといふ周知の唯物論的定義を辯護し、次のやうにいつた。

「現代信仰哲學は、全體として科學を排斥しない。たゞ排斥するのは、學科の「過大な自惚」、すなはち、客觀的眞理に對する科學の自惚である。もし(唯物論者が考へるやうに)客觀的眞理が存在し、そして自然科學のみが、外的世界を人間の「經驗」の中に反映して、客觀的眞理を與へることができらば、あらゆる信仰哲學は絶対に排斥される。」(レーニン全集、第十三卷一〇二ページ)

簡略にいつて、以上に述べたことがマルクス主義の哲學的唯物論の諸特徴である。されば、哲學的唯物論の原理を社會生活の研究や社會史の研究に延長することが、如何に無邊に重要で

あるか、またこれらの原理を社會史やプロレタリアート黨の實際活動の上に應用することが、いかに無邊に重要であるか、これを容易に理解することができる。

もし自然現象間の關聯と、その相互制約とが、自然發展の法則であるならば、社會生活現象の關聯と相互制約も亦、社會的發展法則であつて、偶發的なものでないといふことになる。

ゆゑに、社會生活や社會史は、「偶然事」の集積ではなくなる。けだし、社會史は一定の法則に従ふ社會的發展となり、社會史の研究は科學となるからである。

ゆゑに、プロレタリアート黨の實際活動は、「傑出した個人」の善良な願望にも、「理性」「普通の道德」等々の命令にも立脚せず、社會發展の法則とこの法則の研究に立脚すべきである。

さらに、もし世界が知覺し得られるものであり、自然發展法則の吾人の知識が、客觀的眞理の妥當性をもち、確實な知識であるならば、社會生活や社會的發展もまた、知覺し得られるものであり、社會發展法則に關する科學の資料もまた、客觀的眞理の妥當性をもつ確實な資料であるといふことになる。

ゆゑに、社會生活現象のあらゆる複雑性にもかゝらず、社會史の科學は、たとへば生物學のごとく、正確な科學となり、社會發展の法則を實用的目的に利用することが可能である。

ゆゑに、プロレタリアート黨はゆきあたりばつたりでその實際活動を導くべきではなくて、社會發展の法則にもとづいて、この法則からの實際的演繹によつて導くべきである。

ゆゑに、社會主義は、人類のためのよりよき未來の夢想から、一個の科學に取換へられる。ゆゑに、科學と實際活動の結びつき、理論と實踐の結びつき、すなはち兩者の統一は、プロレタリアート黨を導く明星でなければならぬ。

さらに、もし自然、實際、物質世界が第一次的であつて、意識、思惟は第二次的で、派生的であるならば、またもし物質世界が人間の意識から獨立して存在する客觀的現實であり、意識はこの客觀的現實の反

映にすぎないならば、しからは、社會の物質生活、その存在もまた第一次的であつて、その精神生活は第二次的で、生理的であるといふ事になり、かつまた、社會の物質生活が人間の願望から獨立して存在する客觀的現實であつて社會の精神生活はこの客觀的現實の反映、すなはち存在の反映であると云ふ事になる。

ゆゑに、社會の精神生活形成の源泉、種々の社會思想、社會理論、政治的見解および政治的機關の起源は、思想、理論、見解や政治的機關自體の中に求めらるべきではなくて、社會の物質生活の状態の中に、社會的存在の中に求めらるべきである。この社會的存在の反映こそがそれらの思想、理論、見解、等であるのだ。ゆゑに、もし社會史上の異つた時代に、異つた社會思想、理論、見解および政治的機關が見られるならば、もし奴隸制度の下に或る種の社會主義、理論、見解および政治的機關に出會ひ、封建制度の下では別ものに、資本主義制度の下ではさらに異つたものに出會ふならば、それは思想、理論、見解および政治的機關の「自然」、すなはち「本性」によつて説明されるべきではなくて、社會發展の異つた時代に於ける社會の物質生活の異つた状態によつて説明されるべきである。

社會の存在がどんな種類のものであるか、社會の物質生活の状態がどんな種類のものであるか、——これがその社會の諸思想、理論、政治的見解および政治的機關である。

右の理論に關して、マルクスは次のやうにいふ。

「人間の存在を決定するものは彼等の意識ではなくて、逆に、彼等の意識を決定するものが彼等の社會的存在である。」(カール・マルクス、選集、第一卷二六九ページ)

ゆゑに、政策の上に過失なからしめんがためには、また怠惰な夢想家の立場に陥らないがためには、プロレタリアート黨は、その活動を抽象的な「人間性の原理」などによらず、社會發展の決定的力としての社會の物質生活の具體的諸條件によつて律すべきであり、また「偉人」の善意な願望などによらず、社會の物質生活の發展の上における現實の必要によつて律すべきである。

大ロイドニキ、無政府主義者、エス・エル(社會革命黨員)なども含む空想家の没落は、なかんづく、次の事實に基く。即ち、社會の物質生活の諸條件が、社會の發展に演ずる第一位的役割を彼等が認めず、觀念論に沈没して、彼等の實際活動を律するに、社會の物質生活發展の要求を基礎とせず、これらの要求とは獨立に、これらを見無視して、社會の現實生活から乖離した「理想的計畫」とか「全包括的設計」とかを基礎としたことにある。

マルクス主義レーニン主義の力と活力の源泉は、その實際活動を律するに當つて、社會の物質生活發展の要求を基礎とし、社會の現實生活から斷じて引離されてはゐないといふ事實にある。

だからと云つて、マルクスの言葉によれば、社會思想、理論、政治的見解および政治的機關は、社會生活の上に無意義であるといふことにはならぬし、またそれらが社會的存在や社會生活の物質的條件の發展の上に、逆に影響を與へないといふことにはならぬ。社會思想、理論、見解、政治的機關の起源について、それらの發生の仕方について、社會の精神生活がその物質生活條件の反映であるといふ事實について、われわれは今まで語つた。また、社會思想、理論、見解および政治的機關の意義について、史上に、それらの演ずる役割について、史的唯物論はこれを否定せずに、かへつて反對に、社會生活の上に、社會史の上におけるそれらの重大な役割と意義とを強調するのである。

種々様々の社會思想と理論がある。時勢におくれた、また衰亡しゆく社會勢力の利益になる古い思想と理論がある。これらの意義は、これらが社會の發展とその進歩とを妨げるといふ事實にある。ところが、社會の進歩的勢力の利益になる新しい進歩的思想と理論がある。これらの意義は、これらが社會の發展とその進歩とをたやすくするといふ事實にある。そして、これらが社會の物質生活發展の要求を正確に反映すればするほど、これらの意義もまた増大する。

社會の物質生活發展が社會の前に新しい任務を負はせた後に初めて、新しい社會思想と理論は生れるも

のである。だが、ひとたび發生するや、これらは社會の物質生活發展によつて負はされた、新任務の遂行をたやすくする強大な力、すなはち社會の進歩をたやすくする力となる。實に、こゝに新思想、新理論、新政治的見解、新政治的機關の偉大な組織的、動員的、變革的意義が現れるのである。新しき社會思想と理論が生れるのは、正にそれらが社會に必要であるからであり、また、その組織的、動員的變革的作用なしには、社會の物質生活發展の當面した、緊切な任務を遂行することが不可能であるからである。社會の物質生活發展によつて與へられた新任務の基礎から生れて、新社會思想と理論とは自己の進路を切りひらき、人民大衆の所有となり、彼等を衰亡しゆく社會勢力に對抗して動員し、組織し、かくして社會の物質生活發展を妨げる衰亡しゆく社會勢力の崩壊を容易にする。

かやうにして、社會思想、理論および政治的機關は、社會の物質生活發展、すなはち社會的存在の發展といふ緊切な任務を基礎に發生して、そして、それ自體で社會的存在の上に、社會の物質生活の上に反應し、さうして社會の物質生活の緊切な任務を、完全に遂行するために必要な諸條件を作り、さらにその一層の發展を可能にするために必要な諸條件を作りだしてゐる。

この點に關聯して、マルクスはいつてゐる。
「理論はそれが大衆をつかむやいなや、一個の物質的力となる。」(マルクス・エンゲルス全集、第一卷四

〇六ページ)

ゆゑに 社會の物質生活狀態に影響を與へ、その發展とその進歩を促進しうるためには、プロレタリアト黨は次のやうな社會理論、社會思想に基礎をおかなければならぬ。すなはち、それは社會の物質生活發展の要求を正確に反映するやうな社會思想、社會理論であつて、したがつて、廣汎な人民大衆を奮起させることができ、かつ、反動的勢力を紛砕し、社會の進歩的勢力の進路を打開せんと欲するプロレタリアト黨の大軍隊に大衆を動員し、組織することのできるやうなものである。

「經濟主義者」やメンシエヴィキは、進歩的論理や進歩的思想の有する動員的、組織的、變革的役割を認めず、俗惡な唯物論に陥つて、右の役割をほとんど無に歸し、かうして黨を不活潑にし、空虚にしてしまつた。なかんづく、この事實に彼等の没落の原因があつた。

マルクス主義・レーニン主義は、社會の物質生活發展の要求を正しく反映する進歩的理論に頼つてゐること、理論をそれに相應した高さにあげてゐること、この理論の動員的、組織的、變革的力の一滴一滴をあまさず利用することを義務としてゐること、——この事實からマルクス主義・レーニン主義の力と活力が湧き出でゐるのである。

以上が、社會的存在と社會的意識との關係、社會の物質生活の發展條件と精神生活の發展との關係の問題に對して、史的唯物論の與へた回答である。

そこで、今や次の問題を明かにすることが残つてゐる。すなはち、社會の相貌、その思想、見解、政治的機關、等々を最終的に決定する「社會の物質生活の諸條件」とは、そも／＼史的唯物論の見地から、何を意味するか？

畢竟するに、これらの「社會の物質生活の諸條件」とは何か？ その特徴は何か？

疑ひもなく、「社會の物質生活の諸條件」といふ概念の中には、まづ第一に、社會を取りまく自然、つまり地理的環境が含まれる。その地理的環境は、社會の物質生活における不可欠で恒久的な諸條件の一であつて、いふまでもなく、社會の發展に影響を與へる。では、地理的環境は、社會の發展の上にかゝる役割を演ずるか？地理的環境が、社會の相貌、人類社會制度の特性、ある制度から他の制度への轉移、これらを決定する主要な力ではないのか？

この質問に對して史的唯物論は否と答へる。

むしろ、地理的環境は社會發展の恒久的、不可欠の諸條件の一であつて、もとより、社會發展に影響を

與へ、その發展を促進し、あるひはおくらせるものである。しかし、その影響は決定的影響ではない。といふのは、社會の變化と發展は、地理的環境の變化と發展とは、比較にならぬほど急速に進行するからである。三千年の期間に、ヨーロッパでは原始共同體、奴隸制度および封建制度といふ三種の社會制度が取つて代つた。東部ヨーロッパでは、すなはちソヴェート同盟では、四種の社會制度さへ交替した。しかるに、この期間にヨーロッパの地理的條件は全く變化しなかつたか、それとも地理學の目にとまらないほど些少な變化しかなかつた。そして、それは甚だ當然のことである。地理的環境にいくらでも重大な變化が起るには數百萬年を要するが、人類社會制度にあつては、極めて重大な變化が起るにさへ、數百年か、一、二千年あれば十分である。

が、右の事情から、地理的環境は社會發展の主要原因、決定的原因とはなりえないといふことになる。けだし、何萬年の期間にさへ殆ど變化しないものが、數百年の期間に根本的變化を遂げるものゝ發展の主要原因とはなりえないからである。

さらに、「社會の物質生活の諸條件」といふ概念の中には人口の増殖、人口の疎密もまた含まれてゐることとは勿論である。人々こそが社會の物質生活の諸條件の要素であつて、人々の最少一定數なしには、社會の物質生活などありえないからである。では、人口の増殖が人類社會制度の特性を決定する主要な力ではあるまいか？

この質問に對してもまた、史的唯物論は否と答へる。

もとより、人口の増殖は社會の發展に影響を及ぼし、社會の發展を促し、あるひはおくらせるが、しかしそれは社會發展の主要な力とはなりえないし、社會發展に對するその影響も決定的影響とはなりえない。といふのは、人口の増殖それ自體では、次のやうな質問に答へる手引を與へないからである。何故、甲の社會制度は、他の制度でなく、間違ひなしに乙の新制度によつて取り代へられるのであるか？ 何故

原始共同體は奴隸制度によつて、奴隸制度は封建制度によつて、封建制度は資本主義制度によつて間違ひなしにうけ繼がれ、決して他の制度によつて繼がれないのであるか？

もし人口の増殖が社會發展の決定的力であるとすれば、人口が高度に稠密なところには、かならず社會制度もまた、それに相應して高度の型を生まなければならぬ筈である。ところが、實際にはそんなことは起つてゐない。支那における人口の密度は、米國にくらべると四倍も高いのであるが、社會發展の程度からいへば、米國は支那よりも高い地位にある。それは、支那には、なほ半封建制度が支配してゐるに反し、米國はとうの昔に資本主義制度の最高の發展段階に達してゐるからである。ベルギーの人口密度は米國のそれよりも十九倍も高く、ソヴェート同盟のそれよりも二十六倍も高い。しかもなほ、米國は社會發展の程度においてベルギーの上に位する。そして、ベルギーは歴史の全一時代もソ同盟よりおくれてゐる。それは、ベルギーには、なほ資本主義制度が支配してゐるに反し、ソ同盟はすでに資本主義制度を撤廢し、社會主義制度を打ち建てゝゐるからである。

が、右の事情から、人口の増殖は、社會發展の主要な力、社會制度の特性、社會の相貌を決定する力ではないし、またなりえないといふことになる。

では、社會の物質生活の諸條件の體系内にあつて、社會の相貌、社會制度の特性、一の制度から他の制度に移る社會の發展を決定する主要な力は何か？

史的唯物論の主張によれば、この力こそは人類生存に必要な生活手段を獲得する方法、すなはち、食物、衣類、履物、住居、燃料、生産用具、等々のことと社會の存在と發展に缺くべからざる物質的福利生産様式である。

、生きるためには、人々は食物、衣類、履物、住居、燃料、等々をもたなければならぬ。これらの物質的福利をもつためには、人々はこれらを生産しなければならぬ。これらを生産するためには、人々は、食物

衣類、履物、住居、燃料、等を造る生産用具をもたなければならぬし、これらの用具を製造し、利用することができなければならぬ。

物質的福利を造る生産用具、一定の生産上の経験や熟練によつて、生産用具を使用し、物質的福利の生産を行ふ人、——これらすべての要素が相寄つて社會の生産力を構成するのである。

しかし、生産力は、生産の單なる一面であり、生産様式の單なる一面であり、物質的福利の生産に利用する目的物および自然力と人との關係を表現する面である。生産の他の方面、生産様式の他の方面は、生産行程における人と人との關係、言ひかへれば、人の生産關係である。自然との鬭争を遂行し、自然を物質的福利生産のために利用する場合、人々は互に孤立し、はなればなれの個人としてそれを行ふのではなく、共同して、集團をなして、社會を作つて行ふのである。ゆゑに、生産なるものは、いつでも、またいかなる條件下にも、社會的生產である。物質的福利生産にあつて、人間は、生産内で種々の相互關係に入り、種々の生産關係に入る。その關係は、搾取から解放されてゐる人々の間では、協力と相互扶助の關係であるかもしれぬ。それは支配と隷屬の關係であるかもしれぬ。最後にまた、それは生産關係の甲の形態から乙の形態への過渡的のものであるかもしれぬ。しかし、生産關係がいかなる性質であつても、いつでも、またいかなる制度の上でも、それは社會の生産力のごとく不可欠な生産要素をなしてゐる。

マルクスは次のごとくいつてゐる。

「生産において、人間は自然に對してのみ働きかけるのではなく、お互の上にも働きかける。人間は一定の方法で共同に働き、そしてその活動を相互に交換する事によつてのみ生産する。彼等は生産するために、相互の間に一定の聯絡と關係とを結び、そして右の社會的聯絡と關係との中でのみ、彼等の自然への働きかけが行はれ、生産が行はれるのである。」(マルクス・エンゲルス全集、第五卷四二九ページ)

それゆゑに、生産、生産様式は、社會の生産力と人間の生産關係との兩者を含み、さうして物質的福利

生産行程における兩者の統一を體現してゐる。

生産の一特徴は、長期にわたつて一ヶ所に決して停止せず、常に變化と發展の状態にあること、さらに生産様式の變化は全社會制度、社會思想、政治的見解、政治的機關等に變化を必然に誘發すること、すなはち、その變化は社會的、政治的秩序全體の再編成を誘發することである。各種の發展段階において、人は種々の生産様式を持つ。あるひは、少しく亂暴な言ひかたをすれば、種々の生活様式をとる。原始共同體の下では甲の生産様式があり、奴隸制度の下では乙の生産様式があり、封建制度の下では丙の生産様式があり、その次には何々、といふ具合である。そして、それにしたがつて、人類社會制度、人間の精神生活、彼等の見解や政治的機關も、さまざまにちがつてくる。

社會の生産様式の如何によつて、社會自體、その思想と理論、その政治的見解と機關も、大體においてさまざまにちがつてくる。

あるひは、すこしく亂暴な言ひかたをすれば、人間の生活ぶりの如何によつて、その考へ方も、さまざまにちがつてくる。

以上のことは、社會發展の歴史は第一に生産發達の歴史であり、數世紀の間に次から次に替る生産様式の歴史であり、生産力と人間の生産關係發展の歴史であるといふことを意味する。

ゆゑに、社會發展の歴史は、同時に、物質的福利生産者そのもの歴史であり、生産行程における主力にして、社會の存在に必要な物質的福利の生産を行つてゐる勤勞大衆の歴史である。

ゆゑに、もし歴史科學が眞實の科學たらんがためには、社會發展の歴史を、王様と將軍の事蹟や、國家の「征服者」と「鎮壓者」の事蹟などに墮落させずに、まづ第一に、物質的福利生産者の歴史、勤勞大衆の歴史、人民の歴史にしなければならぬ。

ゆゑに、社會史の法則研究に對する鍵は、人間精神の中に、社會の見解や思想の中に求められるのでは

なくて、當該歴史時代の社會で行はれてゐる生産様式の中に、社會の經濟の中に求められねばならぬ。

ゆゑに、歴史科學の第一の任務は、生産の法則、生産力および生産關係發展の法則、社會の經濟發展の法則を研究し、明かにすることである。

ゆゑに、もしプロレタリアート黨が眞實の黨たらむがためには、何よりもまづ、黨は生産發展法則の知識、社會經濟發展法則の知識を獲得しなければならぬ。

ゆゑに、政策に過失なからしめんがためには、プロレタリアート黨は、その綱領作成にあつても、その實際行動の上においても、第一に、生産發展の法則から、社會經濟發展の法則から出發しなければならぬ。

生産の第二の特徴は、その變化と發展とが、生産力の變化と發展とをもつて、第一に、生産用具の變化と發展とをもつて、始まるといふことである。したがつて、生産力は、生産の最も可動的な要素である。まづ最初に、社會の生産力が變化し、發展する。それから、この變化に従ひ、これに照應して人間の生産關係、彼等の經濟關係が變化する。しかし、かう云つたからといつて、生産關係は生産力發展に影響を與へず、また後者が前者によつて制約されないといふ意味にはならぬ。生産關係の發展が生産力の發展によつて制約されながら、こんどは逆に、生産力發展の上に反作用し、これを早めたり、あるひは妨げたりする。この點に關して、次のことが注意されなければならぬ。すなはち、あまりに長い間、生産關係が生産力の膨脹に後れ、これと矛盾する状態にあることはできない。なぜかといふに、生産關係が生産力の性質、状態に照應し、その發展を精一杯に延ばさせる時はじめて生産力もまた最大限に發展することができからである。だから、生産關係が生産力の發展にいちじるしくおくれてゐても、おそかれ早かれ、生産力發展の水準に、生産力の性質に一致して來なければならぬし、——また、實際に一致してくる。しからざる場合は、生産機構内で生産力と生産關係との統一は根柢から破られ、生産全體の破

裂、生産の危機、生産力の破壊が起るのである。

生産關係が生産力の性質に照應せず、それと衝突する場合の一例は、資本主義諸國における經濟恐慌であつて、そこでは、生産手段の資本主義的私有制が、生産行程の社會的性質と、すなはち生産力の性質とはなほだしい不一致に陥る。この不一致が經濟恐慌を起させ、恐慌によつて生産力は破壊される。そしてこの不一致そのものが社會革命の經濟的基礎をなし、その革命の目的は、現存の生産關係を破壊し、生産力の性質に一致した新たな生産關係を創りだすことである。

しかして、右の反對に、生産關係が生産力の性質と完全に一致する場合の一例は、ソ同盟の社會主義的國民經濟であつて、そこでは生産手段の社會的所有制が生産行程の社會的性質に完全に一致し、それがために、經濟恐慌も生産力の破壊も起らないのである。

それゆゑに、生産力は、生産上における最も可動的で、革命的な要素であるのみならず、生産の發展の上における決定的な要素でもある。

生産力の如何によつて、生産關係も變らなければならぬ。

いかなる生産用具をもつて人間は自分に必要な物質的福利を造るか？ と、いふ質問に對しては、生産力の状態が回答を與へる。同様に、何人が生産手段（土地、森林、水利、礦物、原料、生産用建物、交通通信機關、等々）を所有し、何人が生産手段を支配するか、——全社會であるか、それとも他の個人、集團、または階級の搾取のためにそれを利用する個人、集團、または階級であるか？——この質問に對しては、生産關係の状態が回答を與へる。

こゝに、古代から現代までの生産力發展の素描がある。自然のままの石器から弓矢への變遷と、これに應じる獵師の生活から動物の飼養と原始的な牧畜への變遷。石器から金屬的道具（鐵製の斧、鐵の刃をつけた木製鋤、等々）への變移と、これに照應して、耕作と農業への變遷。材料加工のための金屬製道具

の一層の改良、鍛冶屋の轉の出現、陶器の出現、これに照應して、手工業の發達、手工業の農業からの分離、獨立した手工業の發達と、それにつぐマヌファクチュア（工場制手工業）の發達。手工道具から機械への變移、および手工業と工場制手工業の機械産業への變化。機械制度への變遷と近代大規模機械産業の勃興。——以上が、全人類史を通ずる社會の生産力發達の、完全ではないが、一つの概観である。明らかに、生産用具の發達や改良は、生産に關與する人間によつて行はれ、人間に無關係に行はれるものではない。その結果、生産用具の變遷と發達につれて、生産力の最も重要な要素としての人間の變化と發展が起り、彼等の生産上の經驗、その熟練、その生産用具操縦技能の變化と發展がおこる。

歴史の進行中におこる社會の生産力の變化と發展に照應して、人間の生産關係、その經濟關係もまた變化し、發展する。

生産關係に五種の主たる型があることが史上に知られてゐる。すなはち、原始共同體、奴隸制度、封建制度、資本主義制度および社會制度である。

原始共同體の下における生産關係の基礎は、生産手段が社會的に所有されてゐるといふ點にある。このことは、大體において、當時代の生産力の性質に照應してゐる。石器、その後の弓矢をもつてしては、人間はひとり／＼の力で自然力や猛獸と闘ふことができなかつた。森林の果實を採集し、魚を捕獲し、ある種の棲家をつくるためには、人間は共同して働かねばならなかつた。さうしなければ、彼等は飢死するかあるひは猛獸や近隣の部落の犠牲となつたからである。共同に働いたことが、生産手段の共有、同時に生産物の共有をもたらしした。こゝでは、生産手段の私有といふ考へは存在しなかつた。たゞ例外として、猛獸に對する防護手段にも併用されるやうな、ある種の生産道具の個人的所有があつたゞけである。こゝでは、搾取もなく、階級もなかつたのだ。

奴隸制度の下における生産關係の基礎は、奴隸所有者が生産手段と生産に従事する勤勞者、すなはち奴

隸を所有するといふ點にある。そして、奴隸所有者は奴隸を家畜と同様に、賣買し、または殺すこともできる。かやうな生産關係は、大體において、當時代の生産力の状態に照應する。石器の代りに、今や人間は金屬製造具を使用する。牧畜も農耕も知らなかつた獵師のみぢめな原始的經濟とちがつて、今や、牧畜農耕、手工業、これらの生産分野における分業等が現れる。そして、個人の間、社會の間に、生産物交換の可能、數人の手中に富の集積の可能、少數者の手中に生産手段の現實的集積、少數者による多數者の征服と奴隸化の可能が生れる。こゝでは、生産行程に關與する社會の全成員の間に、共同にして自由な勞働を、もはや見出しえない。すなはち、こゝでは、勤勞しない奴隸所有者によつて、搾取されてゐる奴隸の強制勞働が行はれてゐる。だから、こゝでは、生産手段の共有もなければ、したがつて生産物の共有もない。それは私有によつて取つて代はられる。こゝでは、奴隸所有者が、言葉の意味通りに、第一位の主要な財産所有者として現れる。

貧と富、搾取者と被搾取者、全權利をもつ人々と權利をうばはれた人々、兩者の間における激烈な階級闘争、——これが奴隸制度の描寫である。

封建制度の下における生産關係の基礎は、封建領主が生産手段を所有するが、生産に従事する勤勞者、すなはち農奴を完全に所有しないといふ點にある。こゝで領主は農奴を殺すことは最早やできぬが、賣買することはできる。封建的所有とならんで、農民と手工業者による、生産用具と本人の勤勞にもとづく私的經營の個人的所有がある。かゝる生産關係は、大體において、當該時代の生産力の状態に照應する。鎔鐵や鐵加工の一層の改良、鐵製鋤や織機の普及、農業、園藝、葡萄栽培および酪農の一層の發達、手工職

場とならんで工場制手工業の出現、——これが、生産力の状態の特徴である。

新らたな生産力の要求するものは、勤勞者が生産上に或る種の創意を發揮し、仕事に對する嗜好、仕事に對する興味をもたなければならぬといふことである。したがつて、封建領主は、仕事に興味をもたず

創意を全く無く勤勞者としての奴隷をしりぞけて、自分の農業と、自分の生産用具とをもち、仕事に對する或る程度の興味をもつ農奴を相手とすることをえらぶ。この興味は、土地の耕作と收穫物の何割かを現物で領主に支拂ふためには、缺くべからざるものである。

こゝでは、私有財産制はさらに一段發展する。が、搾取は、奴隷制におけるとほとんど變らずひどいものであり、——たゞ、ほんのわづか緩和されたにすぎない。搾取者と被搾取者との階級闘争は、封建制度の主要な特徴である。

さて、資本主義制度の下における生産關係の基礎は、資本家が生産手段を所有するが、生産に従事する勤勞者、すなはち賃銀勤勞者を所有しないといふ點にある。こゝで、賃銀勤勞者は個人的に隷屬してゐないから、彼等を資本家が殺したり、賣つたりすることはできぬ。けれども、彼等は生産手段を奪はれてをり、飢死しないがためには、彼等の勞働力を資本家に賣ることを餘儀なくされ、したがつて搾取の桎梏にしばりつけてゐる。生産手段の資本家的所有にならんで、農奴的隷屬から解放された農民と手工業者による生産手段の私有が存在し、初期には廣く普及してゐたが、その生産手段の私有は本人の勞働にもとづいたものである。手工業職場や工場制手工業の代りに、機械を据えつけ巨大な工場が現れる。農民の原始的な生産用具で耕作した貴族の領地の代りに、今や農業技術にもとづいて經營され、農業機械を供給されてゐる大規模の資本家的農場が現れる。

生産に従事する勤勞者は、虐げられた蒙昧な農奴よりもつと文化的で、智的でなければならぬし、彼等は機械を了解し、これを正當に運轉することができなければならぬ。——このことを新生産力は要求するのである。そこで、資本家は、農奴制の絆から解放され、かつ機械を正當に運轉しうるだけの教育をうけた賃銀勤勞者を相手とすることをえらぶ。

しかし、資本主義は、生産力を恐ろしく膨脹させたので、資本主義の解決のできない矛盾にひつかゝつ

てしまつた。資本主義は商品を作ることができるだけ大量に製造し、その値段をさげ、さうして競争を激化し、中小私有財産所有者の大群を没落させ、彼等をプロレタリア化し、彼等の購買力を減退させ、その結果、製造品の處分は不可能になつてくる。他方において、資本主義は、生産を増大し、大工場に幾百萬の勤勞者を集中し、さうして生産行程に社會的性質を與へ、これによつてそれ自身の基礎を顛覆する。なぜならば、生産行程の社會的性質は、生産手段の社會的所有を要求するにもかゝらず、生産手段は依然として、生産行程の社會的性質と兩立しない資本家的私有財産として残つてゐるからである。

かゝる生産力の性質と生産關係の相容れない矛盾は、生産過剰による週期的恐慌としてあらはれる。恐慌に際し、資本家は、みづから作りだした人口の大多數の窮乏のために、自分の商品に對する有力な需要を見出すことができず、その結果、生産物を焼き、製造品を破毀し、生産を停止し、あるひは生産力を破壊することを餘儀なくされてゐる時、その時、商品の不足からでなく、商品の過剰生産のために、幾百萬の人間が失業と饑餓に苦しまされてゐるのである。

このことは、資本主義的生產關係が社會の生産力の状態に照應しなくなり、それと相容れない矛盾に陥るといふことを意味する。

このことは、資本主義が革命を胚胎することを意味する。そして、その革命の使命は、現存生産手段の資本主義的所有制を社會主義的所有制によつて取りかへることである。

このことは、資本主義制度の主要特徴が搾取者と被搾取間の最も尖鋭化した階級闘争であることを意味する。

社會主義制度は今までのところ、ソ同盟にだけ實現されてゐるが、その制度の下における生産關係の基礎は、生産手段の社會的所有制といふことである。こゝでは最早や、搾取者も被搾取者もゐない。生産物は「働かざる者は食ふべからず」と云ふ主義の下に、遂行された勞働に従つて分配される。こゝでは生産

行程における人々の相互關係の特色は、搾取から解放された労働者の同志的協力と社會主義的相互扶助とである。こゝでは、生産關係は生産力の状態に完全に一致する。それは、生産行程の社會的性質が生産手段の社會的所有制によつて補強されてゐるからである。

この理由のために、ソ同盟における社會主義的生産は、過剰生産による週期的恐慌も、それに伴ふ不合理も知らないのである。

この理由のために、生産力は急速度で増進する。それは、生産力に照應する生産關係が、かゝる増進に無限の機會をあたへるからである。

以上が、人類史における、人間の生産關係發展の一描寫である。

以上が、生産關係の發展が、社會の生産力の發展に、第一に生産用具の發展に依存することを示し、その依存性のために、生産力の變化と發展は、これに照應した生産關係の變化と發展を、早晚、誘導するのである。

マルクスは次のごとくいつてゐる。

「労働用具（註）の使用と造出とは、或る種の動物にもその萌芽を示してゐるとはいへ、それは人類労働行程に特有な性質となつてゐる。そこで、フランクリンは人類を定義して、道具を造る動物だと言つた。絶滅した動物種屬の身體組織を認定するには、その遺骨の構造を知ることが重要であるが、それと同様に、労働用具の遺物を知ることが、既往の社會の經濟的形態を判断する上に重要な手懸りとなる。經濟上の各時代を區別するものは、何が造られるかといふことではなくて、如何にして、造られるかといふことである。……労働用具は、單に人間労働力發達の分度器たるのみでなく、またその労働が遂行される社會的關係の指標ともなる。」（マルクス、資本論、第一卷一二二ページ、一九三五年版）

（註——マルクスのいふ「労働用具」は、主として生産用具を意味した。編輯部）

さらに、54。

（イ）「社會關係は生産力と密接に連結する。新らたな生産力をうると共に、人間は彼等の生産様式を變更する。そして、彼等の生産様式を變へ、生活資料獲得方法を變へると共に、彼等はあらゆる社會關係を變更する。手摺白は封建領主のある社會を作り、蒸氣白は産業資本家のある社會を作る。」

（マルクス・エンゲルス全集、第五卷三六四ページ）

（ロ）「生産力は増進し、社會關係は破壊され、觀念は形成される。——かゝる不斷の運動が存在する恒久不變のものは、たゞ運動の抽象、これあるのみ。」（前提書、三六四ページ）

さらに、エンゲルスは「共產黨宣言」のなかで、定義化された史的唯物論について次の如く説明してゐる。

「あらゆる歴史的時代の經濟的生產、ならびにこれから必然的に生れる社會の構成は、それらの時代の政治的および智的歴史の根柢を形づくる……。したがつて、太古の土地共有體が解體して以來、一切の歴史は、階級闘争の、すなはち社會發展の種々なる段階における被搾取者と搾取者との、被支配階級と支配階級との「闘争の歴史であつた……。しかし、今やこの闘争は、被搾取および被抑壓階級（プロレタリアート）は、搾取、抑壓および階級闘争から同時に、全社會を永遠に解放することなしには、もはや自己を搾取し抑壓する階級（ブルジョアジー）から解放されえないところの、一つの段階に達してゐる」（「共產黨宣言」、ドイツ版へのエンゲルスの序言）

生産の第三の特徴は、新らたな生産力の、これに照應した生産關係の發生は、舊制度とは無關係に、舊制度の消滅の後に起るのではなくて、舊制度の内部で起るといふこと、それは、人間の熱慮、意識活動の結果としてではなく、自然發生的に、無意識的に、人間の意志とは獨立に起るといふことである。それが自然發生的に、人間の意志とは獨立に起るについては、こゝの理由がある。

第一に、人は生産様式をあれこれと自由に選ぶことはできないといふことである。なぜならば、各新世代が生れる場合には、前世代の事業の成果として既に存在する生産関係に當面し、そのために、新世代は物質的福利を生産しうるためには、先づ、生産領域に既存するすべての物を採用し、そしてそれに適應しなければならぬからである。

第二の理由はかうである。すなはち、人が種々の生産手段を、種々の生産力の要素を改良するに際して、その改良が如何なる社會的結果を誘導するかといふことを、悟りも、理解もしないし、よく考へてもみない。たゞ考へることは、彼等の日々の利害關係や、彼等の労働を軽減し、或る直接の有形の便益を自分にもたらすことだけである。

原始共同體の或る成員が、徐々に、そして暗中模索的に、石器の使用から鐵器の使用にうつつた時に、無論、彼等は、この革新が如何なる社會的結果を誘導するかといふことを、知らなかつたし、よく考へてもみなかつた。金屬器への變遷が生産上の革命であることや、それがいつかは奴隸制度を誘導するといふことを、彼等は理解も、悟りもしなかつた。彼等はたゞ彼等の労働を軽減し、即時の、有形の便益をうることを欲しただけである。そして、彼等の意識的活動は、右のとき日常の私的利害關係の狭い範圍内に限られてゐた。

封建制時代では、ヨーロッパの新興ブルジョアジーは、小さいギルド（職人組合）の職場とならんで、大きな工場制手工業經營を開始し、さうして社會の生産力を前進させたが、その時にも、無論、彼等はこの革新が如何なる社會的結果を誘導するかといふことを知らなかつたし、よく考へてもみなかつた。またこの「ちつぽけな」革新が、帝王の權力に反對し、貴族に反對する革命に終らざるを得ないやうな社會的諸勢力の再編成を結果することを、彼等は悟りも、理解もしなかつた。しかも、彼等は君寵に隨喜の涙を流してゐたし、また彼等の一流の代表者はしばしば、貴族の高位に列せられんとしたのであつた。彼等の

たゞ欲したものは、製造品の原價をさげ、アジアおよび近く發見されたアメリカの諸市場に、多量の商品を送りこみ、より大なる利潤をつかむと、これだけであつた。彼等の意識的活動は、右のとき凡俗な實用的な目的の狭い範圍にかぎられてゐた。

ロシアの資本家が、ツァーリ制に一指も觸れず、また農民を地主の餌食にすると同時に、外國資本家と協力して、ロシア内に近代の大規模機械産業を全力をあげて扶植した時にも、むろん彼等は、この廣範圍にわたる生産力の増進が、如何なる社會的結果を誘導するかといふことを悟らなかつたし、よく考へてもみなかつた。また、社會の生産力の領域におけるこの大飛躍が、プロレタリアートをして農民と聯合し、社會主義革命の勝利をえさせるやうな、社會的諸勢力の再編成を誘導するといふことを、彼等は悟りも、理解もしなかつた。彼等のたゞ欲したものは、工業生産を無限に増大し、龐大な國內市場を支配し、獨占者となり、國民經濟からできるだけ多くの利潤を搾りとること、これだけであつた。彼等の意識的活動は、彼等の凡俗な、すこぶる實用的な利害關係より一步も外に出でなかつた。そこで、マルクスは次のやうにいつてゐる。

「人間は、その生活の社會的生產において、（すなはち、人間生活に必要な物質的福利生産において——編輯部註）一定の、必然的な、彼等の意志とは獨立した（註）諸關係に、すなはち、彼等の物質的生產力の一定の發展段階に照應するところの、生産諸關係に入りこむ。」（マルクス選集、第一卷二六九ページ）

（註——傍點は編輯部）

しかし、以上のことは、生産關係の變化や舊生産關係から新生産關係への移行が、衝突なしに、震駭なしに、圓滑にはこぶといふことを意味しない。反對に、かゝる移行は、舊生産關係の革命的顛覆と新生産關係の樹立といふ方法で行はれるのが普通である。一定の時期まで、生産力の發展と生産關係内の變化と

は、人間の意志とは獨立に、自然發生的に進行するが、それはたゞ一定の時機までのことである。發生し發展しつゝある生産力が、適宜の成熟状態に達するまでのことである。新生産力が成熟してしまつた後は現存生産關係とその支持者等——支配階級——は「打ち克ちがたき」障礙となり、この障礙は、新興諸階級の意識的行動により、この階級の強力行爲により、革命により、はじめて除去され得る。こゝに、新社會思想の、新政治的機關の、新政治權力の偉大な役割が巍然とそばだち、そして、これらの使命は、舊生産關係を強力によつて撤廢するといふことにある。新生産力と舊生産關係との衝突から、また社會の新經濟要求から、新社會思想が生れる。新社會思想は大衆を組織し、動員する。大衆は新政治軍隊に結合され、新革命權力を樹立し、これを、生産關係内における舊制度を強力によつて撤廢して、新制度を確立するために利用する。自然發生的發展過程が、人間の意識的行爲に場所をゆづり、平和な發展が暴力的激變に、進化が革命に場所をゆづるのである。

マルクスはいつてゐる。

「プロレタリアートは、ブルジョアジーとの闘争において、必然的に、階級としてみづからを結成し……。革命によつて、みづからを支配階級となし、そして支配階級として舊生産關係を強力によつて撤廢する。」（『共産黨宣言』、一九三八年版五二ページ）

さらに

（イ）「プロレタリアートは、その政治的支配を利用して、徐々に、ブルジョアジーから一切の資本を奪ひ取り、あらゆる生産用具を國家の手中に、すなはち、支配階級として組織されたプロレタリアートの手中に集中し、しかして生産力の量をできるだけ急速に増大するであらう。」（前掲書、五〇ページ）

（ロ）「強力なるものは、新らたなる社會を孕めるすべての舊社會に對する產婆である。」（マルクス『資本論』、第一卷六〇三ページ、一九三五年版）

こゝに、一八五九年に、マルクスが、彼の名著「經濟學批判」の歴史的序文中でなした史的唯物論の精髄の傑然たる定義がある。

「人間は、その生活の社會的生產において、一定の、必然的な、彼等の意志とは獨立した諸關係に、すなはち、彼等の物質的生產力の一定の發展段階に照應するところの、生産關係に入りこむ。これらの生産諸關係の總體は、社會の經濟的構造、すなはち現實の基礎を形成し、その上に法律のおよび政治的の上部構造がたち、そしてその基礎に一定の社會的意識諸形態が照應する。物質的生活の生産様式は、社會的、政治的、および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼等の存在を決定するのではなくて、反對に、彼等の社會的存在が彼等の意識を決定する。社會の物質的生產力は、その發展の一定段階に達するや、今までそれが内部で作用してきたところの現存生産關係、もしくははその法律的表现にすぎないところの所有關係と矛盾におちいる。それらの關係は、生産力の發展形態からその桎梏に轉化する。こゝに社會革命の時代がはじまる。經濟的基礎の變動と共に、巨大な上部構造全體が多かれ少かれ急激に變革される。かゝる變革を考察するにあたり、自然科学的に忠實に確認せらるべき經濟的生產條件の物質的變革と、それから、人間がこの衝突を意識し、決戦せんとする、その法律的、政治的、宗教的、藝術的、哲學的の、約言すれば、觀念上の諸形態とは、つねにこれを區別しなければならぬ。われわれが或る個人を判断するのに、その人自身の考へるところにもとづいてしないと同様に、かゝる變革の時代を、その時代の意識から判断することはできない。反對に、この意識を物質的生活の諸矛盾から、社會生産力と生産關係との現存の衝突から、説明しなければならぬ。一つの社會機構は、そこに發展する餘地のある一切の生産諸力が發展し終る前に、決して破滅するものではない。また、あらたな一層高度の生産諸關係は、その物質的生存諸條件が、舊社會の胎内で生育し終る前に、決して出現するものではない。されば、人類は自ら解決しうる問題のみを常に提

起する。けだし、もつと嚴密に考察すれば、當の問題の解決に必要な物質的諸條件がすでに存在するか。あるひは少くともその生成の過程にある時にのみ、問題そのものが發生することを見出すからである。』(カール・マルクス、選集、第一卷二六九—二七〇ページ)

以上が、社會生活に、社會史に應用されたマルクス主義的唯物論である。

以上が、辯證法のおよび史的唯物論の主要特徴である。以上のことから、いかなる理論的實物が、黨のためにレーニンによつて警護され、修正派と裏切者の攻撃から防衛されたか、また、レーニンの勞作「唯物論と經驗批判論」の出現が、わが黨の發展の上に、いかに重大であつたか、あきらかであらう。

三、ストルイビン反動期のボルシエヴィキとメンシエヴィキの闘争 解黨派とオトゾヴィストに對するボルシエヴィキの闘争

反動期における黨組織内の仕事は、前の革命發展期におけるよりも、はるかに困難であつた。黨員數は激減した。多數の小ブルジョアの黨同伴者、とくにインテリゲンチヤは、ツァー政府の彈壓をおそれ、黨の陣列から脱落した。

レーニンは、かゝる時期にこそ、革命的諸黨はさらに徹底的に學ばなければならぬことを指摘した。革命の昂揚期には、いかに進撃するかを彼等は學んだ。が、反動期には、いかに適當に退却し、いかに地下に入り、いかに非法黨を保全し、強化し、黨と大衆との關係を緊密ならしめるために、いかに合法的可能を利用し、いかに一切の合法的現存諸組織、とくに大衆的諸團體を利用するか、これを彼等は學ばなければならぬ。

メンシエヴィキは、新らたな革命の昂揚が可能であることを信ぜずして、算をみだして退却した。彼等は、黨綱領の革命的要求や革命的スローガンを、不埒にも、放棄した。彼等は、プロレタリアートの革命的非法政黨を解消し、廢棄することを欲した。これがために、この種のメンシエヴィキは解黨派と呼ばれるにいたつた。

メンシエヴィキと異り、ボルシエヴィキは、數年ならずして、革命の昂揚があり、この新昂揚のために大衆を訓練することが黨の任務であると確信した。革命の根本的諸任務は何等解決されてゐなかつた。農民は地主の土地を獲得しなかつた。勞働者は八時間勞働制を獲得しなかつた。人民怨嗟の的であるツァー専政制度は倒されてゐないし、一九〇五年に人民の手でもぎ取つた些細な政治的自由さへも再び壓殺された。されば、一九〇五年の革命を起させた同じ原因が、依然として、頑強に残つてゐた。こゝに、ボルシエヴィキが、革命運動の新昂揚を確信し、これがために準備し、勞働階級の勢力を集結した理由がある。

一九〇五年の革命が勞働階級に、大衆的革命闘争によつて彼等の權利を獲得することを教えたといふ事實からもまた、新らたな革命の昂揚が不可避であるといふ確信を、ボルシエヴィキはもつた。資本家が攻勢をとる反動期に、勞働者は一九〇五年の右の教訓を忘れることはできなかつた。レーニンは勞働者達のいくたの手紙を引用してゐるが、その手紙には、工場勞働者が工場主によつて再び壓迫され、蹂躪されてゐることを告げ、そしてかう書いてゐる、「しばらくの辛抱だ、また一九〇五年が来る！」と

ボルシエヴィキの基本的政治目的は、一九〇五年の時と同じであつた。すなはち、ツァー制を顛覆し、ブルジョア民主主義革命を完成し、社會主義革命に轉移することであつた。一瞬なりとも、ボルシエヴィキはこの目的を忘れず、民主共和國、地主の土地沒收、八時間勞働制、——といふ、中心的革命スローガンを大衆の前にかゝげつゞけた。

しかし、黨の戰術は、一九〇五年の昂揚期におけると同一ではありえない。たとへば、近き將來に、政

治的總罷業とか武装蜂起を起せなど、大衆に呼びかけてはならなかつた。といふのは、革命運動は下り坂にあり、労働階級は極度に疲勞してをり、反動階級はいちじるしく強化されたからである。黨は新情勢を勘定にいれなければならなかつた。攻撃戦術に代へて、防禦戦術が、勢力集結の戦術が、カードル（黨の働き手）を地下に置いて、地下から黨の活動を遂行する戦術が、非合法的仕事を合法的労働階級諸組織内の仕事と結合する戦術が、用ひられねばならなかつた。

そして、ボルシエヴィキはこれを遂行しうることを證明した。

「われわれは、革命にさきだつ長年月の間、活動することができた。われわれがツピョルドカーメン（註）とあだ名されたについては、まんざら理由がないわけではない。社會民主主義者はプロレタリア黨を結成してゐた。そして、その黨は第一回の軍事的攻撃が失敗したからといつて意氣消沈しないし、周章狼狽しないし、冒険に魅惑されもしない。」（レーニン全集、第十二卷一二六ページ）と、レーニンはいつた。

（註——岩のことであつて、岩のやうに堅いことを意味する——譯者）

ボルシエヴィキは、非合法黨組織を保全し、強化することに努力した。しかし、同時に、彼等はいかなる合法的可能も、いかなる合法的ひつかかりも利用することを義務だとした。これによつて、大衆との結びつきが維持され、保全され、かくして黨が強化されたのである。

「今や、わが黨が、ツアー制に對する公然たる革命的闘争から、廻り道の闘争方法へ、共済組合から國會の演壇にいたる一つ一つの、あらゆる合法的機會の利用へ轉換する時期である。今や、われわれが一九〇五年の革命に敗北した後をうけた、退却の時期である。この時期は、われわれの勢力を集結し、ツアー制に對する公然たる革命闘争を再び始めるために、新たな闘争方法を習熟することをわれわれに義務づけた。」（スターリン、第十五回黨大會報告速記録、三六六—三六七ページ、一九三五年）

保存された合法的諸組織は、黨の地下組織に對する一種の掩護に、そして大衆との結びつきを保持する手段に役立つた。ボルシエヴィキは、大衆との連繫を保全するために、労働組合とか、他の合法的既存公衆諸組織、たとへば、疾病共済組合、労働者消費組合、クラブ、教育團體、市民會館、等を利用した。ボルシエヴィキは、國會の演壇を利用して、ツアー政府の政策を摘發し、カデット（立憲民主黨員）を暴露し、プロレタリアートに對する農民の支持を獲得することに努めた。非合法黨組織の保全、ならびに該組織を通じて、他のあらゆる政治的活動形態の指導によつて、黨は、正しき黨方針を遂行することができ、新たな革命の昂揚にそなへて勢力を集結することができた。

ボルシエヴィキは、二つの戦線での闘争によつて、すなはち、黨の公然たる敵である解黨派、ならびに黨の隠れたる敵であるオトゾヴィスト（召還主義者）、この黨内二種の日和見主義に對する闘争によつて、

ボルシエヴィキの革命の方針を遂行した。

レーニン、ボルシエヴィキは、解黨主義に對し、その日和見主義傾向の最初の萌芽の時から、峻烈な闘争を敢行した。レーニンは、解黨派は黨内における自由主義ブルジョアジーの手先であると指摘した。一九〇八年十二月、ロシア社會民主労働黨第五回（全ロシア）會議がパリで開かれた。レーニンの動議で、當會議は解黨主義、すなはち「現存ロシア社會民主労働黨組織を解消し、いかなる犠牲を拂つても黨の綱領、戦術、傳統の放棄を敢てしても、合法的埒内で活動する或る無定形聯合體をもつて、これに代へんとした」一部の黨インテリゲンチヤ（メンシエヴィキ）の企圖を難詰した。（引用文は、ソ同盟共產黨「ボルシエヴィキ」決議集、第一部一二八ページより）

會議は、すべての黨組織に呼びかけて、解黨派の企圖に對する断乎たる闘争を敢行することを求めた。しかるに、メンシエヴィキは、該會議の決議を遵守せず、かへつて解黨主義に、革命の裏切りに、カデットとの共闘にますます専心從事した。メンシエヴィキは、いよ／＼露骨に、プロレタリアート黨の革命

的綱領を拒否し、民主共和国八時間労働制や地主の土地没収といふ諸要求を放棄した。彼等は、黨の綱領と戦術を棄てるといふ代償を拂つて、公然たる、合法的な、廣「労働」黨の存続の公認を、ツアー政府からあがなはんと欲した。彼等は腹をきめてストルイビン統治と和解し、これに順應せんとした。これが、解黨派が「ストルイビン労働黨」とも呼ばれた理由である。

タン、アクセルロッド、ポトレソフに指導され、マルトフ、トロツキー、その他のメンシエヴィキにたすけられた革命の公敵、すなはち、解黨派と闘争すると共に、ボルシエヴィキは、「左翼」的言辭を弄して自己の日和見主義を偽装せんとする、覆面の解黨派、オトゾヴィストとも非妥協的な闘争を行つた。オトゾヴィストといふ名稱は一部の舊ボルシエヴィキに附けられたものであつて、彼等は國會から労働者議員を召還し、また現存合法諸組織内の活動を全く中止することを要求したのであつた。

一九〇八年に、一部のボルシエヴィキは、社會民主黨議員を國會から召還（オトズイヴ）することを要求した。こゝから「オトゾヴィスト」といふ名稱が生れた。オトゾヴィストは彼等自身のグループ（ボグダノフ、ルナチヤルスキー、アレクシンスキー、ボクロフスキー、ブブノフ、その他）を作り、レーニンと彼の方針とに抗争しはじめた。オトゾヴィストは、労働組合や他の現存合法諸組織内で活動することを断乎として拒否した。かやうにして、彼等は労働者の大業に大なる危害をあたへた。オトゾヴィストは黨と労働階級との間を裂き、黨と黨外大衆との連繫を黨から奪つた。彼等は地下組織内に隠遁しようとし、これによつて合法的掩護を利用する可能をも奪つて、その組織を危険にさらした。國會内で、そして國會を通じて、ボルシエヴィキは、農民に影響をあたへることができ、ツアー政府の政策、ならびに農民の支持をベテンで釣らうとするカデットの政策をあばきうることを、オトゾヴィストは理解しなかつた。オトゾヴィストは革命の新たな昇揚のために諸勢力を集結することを妨げた。されば、オトゾヴィストは「裏返し」の解黨派であつた。彼等は現存合法諸組織を利用する可能を滅却し、そして、廣汎な黨外大衆

のプロレタリア的指導を、事實において拒否した。彼等は革命的仕事を抛棄したので。

オトゾヴィストの行動を討議するために、一九〇九年、ボルシエヴィキの新聞「プロレタリア」の擴大編輯局會議が開催され、會議は彼等を難詰した。ボルシエヴィキは、オトゾヴィストとは何等の共通點もないことを聲明し、ボルシエヴィキ組織から除名した。

解黨派とオトゾヴィストの両者は、プロレタリアートとその黨に對する小ブルジョアの同伴者にすぎなかつた。時あたかもプロレタリアートにとつて困難となるや、解黨派とオトゾヴィストの本質は、まさまざとさらけだされたのであつた。

四、トロツキズムに對するボルシエヴィキの闘争。

八月反黨プロツク（聯合）

プロレタリア黨の一貫せる方針を擁護して、二つの戦線——解黨派とオトゾヴィストとに對して、非妥協的な闘争をボルシエヴィキが遂行してゐた時、トロツキーはメンシエヴィキ・解黨派を援助した。彼にレーニンが「ユダイトロツキー」なる烙印をおしたのは、じつにこの時であつた。トロツキーは、ヴィエナ（オーストリア）で作家の一團體をつくり、「超分派」の看板で、じつはメンシエヴィキの新聞を發行しはじめた。當時、レーニンはトロツキーについてかう書いてゐる、「トロツキーは最も下劣な野心家や分派主義者とひとしく振舞つてゐる……。彼は黨にお世辭をいふが、彼の舉動は他のいかなる分派主義者よりも悪質である。」と。

その後、一九一二年に、トロツキーは、八月プロツクを組織した。これはレーニンとボルシエヴィキ黨に敵對する一切の反ボルシエヴィキ的なグループや思想のプロツク（聯合）であつた。解黨派とオトゾヴィ

イストは右の反ボルシェヴィキ・プロツクに入り、さうして彼等の間の親類關係を實證した。トロツキとトロツキスト等は、根本的諸問題のすべてに對して解黨派的立場をとつた。が、トロツキはその解黨主義を中間主義、すなはち調停主義の假面でかくした。彼は主張していふ、ボルシェヴィキにも、メンシエヴィキにも彼は屬さぬ、彼は兩者を調停せんとつとめてゐる、と。この點に關して、レーニンはトロツキは大ビラな解黨派よりもつと卑劣で有害であるといつた。なぜなれば、トロツキはメンシエヴィキ・解黨派を實際には全的に支持してゐながら、彼が「超分派」であるやうに労働者達を信じさせ、かうして彼等を偽購せんとつとめてゐるからである。トロツキズムは、中間主義を育成した主要グループであつた。

同志スターリンは次のごとくいつてゐる。

「中間主義は一つの政治的概念である。そのイデオロギーは、一個の共同黨内部において、プロレタリアートの利益を小ブルジョアジーの利益へ適應させるイデオロギーであり、從屬させるイデオロギーである。このイデオロギーはレーニン主義に反し、これに敵對するものである。」(スターリン「レーニン主義の諸問題」、三七九ページ第九版)

この時期に、カメネフ、ジノヴィエフおよびルイコフ等は、實際にトロツキの覆面の手先であつたなげならば、彼等はしばしばレーニンに敵對して、トロツキに助力したからである。ジノヴィエフ、カメネフ、ルイコフ、ならびに他のトロツキの覆面の同盟者の協力をもつて、黨中央委員會總會が、一九一〇年一月、レーニンの意志に反して、開催された。幾多のボルシェヴィキの逮捕の結果、この時まで、中央委員會の構成は變つてゐた。で、動搖分子達は反レーニンの決定を通過させることができた。とへばボルシェヴィキ新聞「プロレタリア」を閉鎖して、ヴィエナで發行されたトロツキの新聞「ブラヴダ」に財政的援助を與へることが、右の總會で決定された。カメネフはトロツキの新聞の編輯局に入り、ジ

ノヴィエフと協力して、トロツキの新聞を中央委員會機關紙にしようとして努力した。

一月中央委員會總會が、解黨主義とオトゾヴィズムを非難した一決定を採擇したのは、レーニンの強硬な主張があつたからである。しかし、こゝでもジノヴィエフとカメネフは、解黨派をその本名で呼ばないといふトロツキの提案を固執した。

事態は、レーニンが豫知し、あらかじめ警告を發したやうになつた。ボルシェヴィキだけが中央委員會總會の決定に服従して、その機關紙「プロレタリア」を閉鎖したが、メンシエヴィキはその分派的解黨主義新聞「ゴロス・ソチアル・デモクラト」を續刊した。

レーニンの立場は、同志スターリンによつて全的に支持された。同志スターリンは「ソチアル・デモクラト」第十一號に特別の一論文を發表し、その中でトロツキズムの手傳人の行爲を難詰し、そして、カメネフ、ジノヴィエフ、ルイコフ等の裏切行爲によつて、ボルシェヴィキ・グループ内におこされた異常事態を終熄させる必要を述べた。同論文はまた、當面の任務を提議した。それは、のちにブラーグ黨會議で實行された。すなはち、全黨會議の召集、合法的黨新聞の發行、ロシア國內における非合法の實際的黨中心の創設、これである。同志スターリンの右論文は、レーニンを全的に支持してゐたバクー黨委員會の決定にもつづいたものであつた。

解黨派とトロツキストから、オトゾヴィストと建神主義者にいたる反黨分子の面々だけからなつたところの、トロツキの反黨的八月プロツクに對抗して、非合法プロレタリア黨を保全し、強化せんと欲する人々からなる一個の黨プロツクが形成された。このプロツクは、レーニンを首領とするボルシェヴィキと、ブレハノフを首領とする少數の黨支持メンシエヴィキとから成つてゐた。ブレハノフと、彼の黨支持メンシエヴィキのグループとは、幾多の問題については依然としてメンシエヴィキ的立場を保持したが、八月プロツクと解黨派とからはだんぜん分離し、ボルシェヴィキと協定を結ぶことを求めた。レーニンはブレ

ハノフの提議をうけいれ、反黨分子と闘ふために彼と一時的プロツクをつくることに賛成した。かゝるプロツクは黨に有利にして、解黨派にとつては致命的であると考へたからである。このプロツクを、同志スターリンは全的に支持した。當時、彼は流刑されてゐたが、そこからレーニンに手紙を書いた。曰く、

「自分の意見によれば、プロツク(レーニン—ブレハノフ)の方針は唯一の正しいものである。すなはち(一)この方針、しかりこれのみが、ロシアにおける運動の眞實の利益に答へるものであり、運動は眞實の黨要素全部が結集することを要求してゐる。(二)この方針、しかりこれのみが、メキ(註)労働者と解黨派の間に溝を掘り、そして後者を分散させ、始末をつけ、これによつて解黨派の束縛から合法的組織を解放するといふ過程を促進するものである。」(「レーニン—スターリン」著作集、第一巻五二九—五三〇ページ)

(註—メキとはメンシエヴィキの略稱——編輯部)

巧妙な非合法と合法活動の結合のおかげで、ボルシエヴィキは合法的労働者諸組織内に大なる勢力となることができた。なかんづく、右のことは、當時合法的に開催された四つの大會で、ボルシエヴィキが、労働者グループにあつたへた大きな影響といふ事實にあらはれてゐる。四つの大會とは、市民大學大會、婦人大會、工場醫大會および禁酒大會である。これらの大會でのボルシエヴィキの演説は、大きな政治的意義を有し、かつ全國に反響を喚びおこした。たとへば、市民大學大會で、ボルシエヴィキ労働者代議員は、すべての文化活動を窒息させるツアー制の政策を暴露し、ツアー制が撤廢されるにあらざれば、國內の眞實の文化向上は考へられないことを主張した。また、工場醫大會では、労働者代議員は、労働者が生活し、働かされてゐる戦慄すべき不衛生状態を語り、ツアー制が打倒されないかぎり、工場衛生は適當に保存されえないといふ結論を引きだした。

ボルシエヴィキは、なほ存続してゐた各種の合法諸組織から、解黨派連中をじよじよに追ひだしてゐた。ブレハノフの黨支持派との統一戦線といふ特殊な戦術によつて、ボルシエヴィキは幾多のメンシエヴィキ労働者團體(ベテルブルグのヴィボルグ區、エカテリノスラフ、その他)を獲得することができた。上記のごとき困難な時代に、いかに合法的活動が非合法的活動と結合されねばならぬかといふ一模範をボルシエヴィキは行動によつて示したのである。

五、一九一二年ブラーグ黨會議。ボルシエヴィキ、獨立マルクス主義政黨となる

解黨派とオトゾヴィストに對する闘争、同様にトロツキストに對する闘争に直面して、すべてのボルシエヴィキを結束させ、彼等を一個の獨立ボルシエヴィキ黨に結成させるといふことが、ボルシエヴィキにとつて緊急を必要となつた。これは、労働階級を分裂させてゐる黨内の日和見主義的思潮にとどめを刺すためばかりでなく、労働階級の勢力を集結させる任務を完成し、革命の新らたな昂揚に労働階級をそなへる上にも、絶對に必要であつた。

が、この任務を完成しうるために、まづ第一に、黨は日和見主義者を、メンシエヴィキを清掃しなければならなかつた。

同一黨内に、依然としてメンシエヴィキと一緒に留るなど、ボルシエヴィキには思ひもよらぬといふことを、今や一人のボルシエヴィキも疑はなくなつた。ストルイビン反動期におけるメンシエヴィキの裏切行爲、プロレタリア黨を解消して、新らたな改良主義黨を組織せんとする彼等の意圖は、彼等との決裂を不可避とした。同一黨内にメンシエヴィキと共にとどまらぬことによつて、ボルシエヴィキは、メンシエヴィ

イキの行動に對して、あれこれと道徳的責任を負つた。けれども、メンシエヴィキの公然たる裏切に對して道徳的責任を負ふことは、黨と労働階級に對する裏切者たることにみづから甘んぜざるかぎり、ボルシエヴィキには到底思ひもよらぬことであつた。かくして、同一黨内にメンシエヴィキと一緒に存在することは、労働階級とその黨に對する裏切たる性質を帯びてくるやうになつた。そこで、メンシエヴィキとの實際的決裂は、その結末まで、すなはち、彼等との形式的組織的決裂、ならびに黨からメンシエヴィキを放逐するところまで、徹底しなければならなかつた。

右の方法によつてのみ、單一綱領と單一戰術と單一階級組織とをもつ革命的プロレタリア黨を再興することができた。

右の方法によつてのみ、メンシエヴィキが破壊したところの、眞實の（單に形式的でない）黨の統一を再建することができた。

この任務は、ボルシエヴィキが準備してゐた第六回全黨會議によつて果されるべきであつた。けれども、これはわづかに問題の一面にすぎなかつた。メンシエヴィキと形式的に決裂し、ボルシエヴィキが別個の黨になることは、むしろ、きはめて重要な政治的任務であつた。だが、ボルシエヴィキは、他の、もつと重要な任務をもつてゐた。ボルシエヴィキの任務は、單にメンシエヴィキと斷絶して、みづから別個の黨になるといふことだけではない。なによりも第一に、メンシエヴィキと斷絶して、西歐の在來の社會民主諸黨とことなり、日和見主義分子が清掃され、プロレタリアートを權力獲得の闘争に導くことができるころの、新たな黨をつくり、新たな型の黨をつくることであつた。

アクセルロッドとマルチノフから、マルトフとトロツキーにいたるあらゆる色彩のメンシエヴィキは、ボルシエヴィキと闘争するにあたり、西歐社會民主主義者の庫から借用した武器を相かはらず使用した。彼等は、たとへば、ドイツやフランスの社會民主黨と同様な黨を、ロシアでも欲した。彼等がボルシエヴィ

イキに何か新しいものを、西歐社會民主主義者に稀有な、ことなつたもので感知したといふ理由で、彼等はボルシエヴィキと闘争した。ところが、西歐の社會民主主義諸黨はその當時どんなものであつたか？ それは一箇の混合物であつた。すなはち、マルクス主義者と日和見主義分子との、革命の盟友と仇敵との、黨原則の支持者と反對者との混合物であり、前者は後者に思想的に一步一步妥協し、そして實質的に服従していつたのである。日和見主義者との、革命の裏切者との妥協、そもそもそれは何のためなのか？ かく、ボルシエヴィキは西歐社會民主主義者に質問する。これに對して、後者は答へる、——「黨内の和平」のために、「統一」のために、と。では何人との統一か？ 日和見主義者とのか？ 彼等は答へる、しかし日和見主義者との、と。そこで、かゝる黨は革命的政黨とはなりえないといふことが全くはつきりしたのである。

ボルシエヴィキが観ざるをえなかつたことは、エンゲルスの死後、西歐社會民主黨は、社會革命の黨から「社會改良」の黨に墮落しはじめ、またこれらの諸黨のおのが、一箇の組織體として、指導的勢力から自己の議員團の附屬物にすでに變質したことである。

ボルシエヴィキが知らざるをえなかつたことは、かゝる黨は、プロレタリアートにとつては有りがたくなく、またかゝる黨は労働階級を革命に指導することができないことである。

ボルシエヴィキが知らざるを得なかつたことは、プロレタリアートにとつては、かゝる黨でなく、別種の、新しい、眞實にマルクス主義的の黨が必要であり、しかし、この黨は、日和見主義者に對しては非妥協的で、ブルジョアに對しては革命的なものであり、鞏固に團結されて、一枚石から成るものであり、それは社會革命の黨、プロレタリアート獨裁の黨であることである。

この新たな種類の黨こそ、ボルシエヴィキの欲したものであつた。そして、ボルシエヴィキはかゝる黨を準備し、建設するために活動した。「經濟主義者」、メンシエヴィキ、トロツキスト、オトゾヴィスト

および經驗批判論者にいたるあらゆる色彩の觀念論者に対する闘争の全史は、正にかゝる黨結成の歴史であつた。ボルシエヴィキは、眞實の革命的マルクス主義黨をもつことを欲するすべての者にとつて、一個の模範となる新たな黨、すなはちボルシエヴィキ黨を創立せんと欲した。ボルシエヴィキは、舊「イスクラ」時代以來、たえずかゝる黨の樹立のために活動してゐた。そのために彼等は頑強に執拗に、萬難を排して働いた。この準備工作において、基本的かつ決定的役割が、レーニンの諸勞作「何をなすべきか？」、「二つの戦術」等々によつて演ぜられた。レーニンの「何をなすべきか？」は、かゝる黨に對する思想的（イデオロギー的）準備であつた。レーニンの「二歩前進、二歩退却」は、かゝる黨に對する組織的準備であつた。レーニンの「民主主義革命における社會民主主義者の二つの戦術」は、かゝる黨に對する政治的準備であつた。そして、最後に、レーニンの「唯物論と經驗批判論」は、かゝる黨に對する理論的準備であつた。

史上のいかなる政治的グループも、それが一個の政黨となるために、ボルシエヴィキ・グループほど周到に準備されたものは、かつてなかつたといふことが、安心して斷言できる。

ゆゑに、ボルシエヴィキがみづから政黨になるための諸條件は、十分に成熟し、用意されてゐた。

第六回黨會議の任務は、メンシエヴィキを放逐し、新黨、すなはちボルシエヴィキ黨を結成し、これによつて、すでに準備されてゐる仕事を完成することであつた。

第六回全ロシア黨會議は、一九一二年一月、ブライグで開かれた。二十以上の黨組織が代表された。ゆゑに、會議は、正式の黨大會の意義をもつてゐた。

破壊された黨中央機關の再建と黨中央委員會の結成を發表した會議の報告書の中で、反動期は、ロシア社會民主黨が一定の組織體として形成されて以來の、黨のために最も困難な時期であることを語つてゐた。が、あらゆる迫害にもかゝはらず、外から黨に加へられたひどい打撃にもかゝはらず、黨内の日和見

主義者の裏切りと動搖にもかゝはらず、プロレタリアートの黨はその旗幟と、その組織とを保全した。「ロシア社會民主黨の旗幟、その綱領およびその革命的傳統を生き残しただけではない、迫害によつて毀損され、弱められはしたが、まったく破壊されはしなかつた黨の組織をも生き残した。」と會議の報告書は聲明した。

會議は、ロシアにおける労働運動の新たな昂揚の最初の徴候と、黨活動の復活とを記録した。

地方諸組織から提出された諸報告に關する會議の決議中に、次のことが書きとめられた。すなはち、「地方の非合法社會民主的諸組織とグループを強化する目的をもつて、社會民主的労働者の間に、いたるところで、精力的な活動がなされてゐる。」と。

會議は次のことを書き留めた。すなはち、退却期におけるボルシエヴィキ戦術のもつとも重要な法則、換言すれば、合法的に存在する各種の労働者會團や組合内での合法活動と非合法活動との結合は、すべての地方で認められる。」と。

ブライグ會議は、ボルシエヴィキ黨中央委員會を選挙した。それは、レーニン、スターリン、オルジョエキツゼ、スヴェルドロフ、スパンダリヤン、ゴロステキヤン、その他によつて構成されてゐた。同志スターリンとスヴェルドロフとは、當時流刑中であつたので、缺席のまゝで中央委員會に選挙された。中央

委員候補者中には、同志カリーニンが選挙されてゐた。

ロシア國內の革命的活動を指導するために、同志スターリンを頭部にいたゞく實際的中心（中央委員會

ロシア・ピエロー）が創設された。中央委員會ロシア・ピエローには、同志スターリンの外に、ヤ・スヴェルドロフ、エス・スパンダリヤン、エス・オルジョエキツゼ、エム・カリーニン、ゴロステキヤン

等の諸同志が列した。

ブライグ會議は、日和見主義に對する、ボルシエヴィキの當時までの全闘争を決算して、メンシエヴィキ

を黨から放逐することを決定した。
メンシエヴィキを黨から放逐することによつて、ブライグ會議は、ボルシエヴィキ黨の獨立的存在を形成した。

思想的に、組織的に、メンシエヴィキを殲滅し、彼等を黨から放逐して、ボルシエヴィキは、その黨の古い旗幟——ロシア社會民主労働黨の黨名を確保した。これが、ボルシエヴィキ黨が、一九一八年まで、括弧入りの「ボルシエヴィキ」なる文字を附加して、ロシア社會民主労働黨と稱したゆゑである。
レーニンは、一九一二年の初めに、ブライグ會議の結果についてゴルキーに通信して、次のやうにいつてゐる。

「解黨派の惡漢に抗して、つひにわれわれは黨とその中央委員會を再建することに成功した。この事實について、貴君もわれわれと共に悦ばれることを期待する。」(レーニン全集、第二十九卷十九ページ)ブライグ會議の意義について語つて、同志スターリンはかういつてゐる。

「この會議は、わが黨史に最大の意義を有する。それが、ボルシエヴィキとメンシエヴィキとの間に境界を劃し、そして全國のボルシエヴィキ諸組織を一個の統一ボルシエヴィキ黨に合同したからである。」(ソ同盟共産黨「ボルシエヴィキ」第十五回大會速記録、三六一—三六二ページ)

メンシエヴィキを放逐し、ボルシエヴィキが獨立黨となつたのち、ボルシエヴィキ黨は、一層鞏固になり、強力になつた。黨はその戦列から日和見主義分子を清掃してみづから強化すること、——これが、第二インターナショナルの社會民主主義諸黨と根本的にことなる新型の黨であるところの、ボルシエヴィキ黨の一つのスローガンである。第二インターナショナルの諸黨は、マルクス主義黨と自稱するが、現實にはマルクス主義の敵、公然たる日和見主義者とその陣營内にとどめることを厭認し、そして第二インターナショナルを破敗させ、破滅せることを彼等にゆるしてゐた。これに反して、ボルシエヴィキは日和見主義者に対して峻烈な、闘争を敢行し、プロレタリア黨から日和見主義の汚物を一掃し、新型の黨、レーニン主義黨、のちにプロレタリアート獨裁を成就した黨を創設することに成功した。

もし、日和見主義者がプロレタリア黨の戦列内に残留したならば、ボルシエヴィキ黨は大道にでて、プロレタリアートを指導することはできなかつたらうし、黨は政權を獲得して、プロレタリアート獨裁を樹立することはできなかつたらうし、また、勝利者として國內戦争から脱し、社會主義を完成することはできなかつたであらう。

ブライグ會議は、その決定で、黨の緊切な中心政治スローガンとして、最小限綱領中の次の諸要求をかかげた。——民主共和國八時間労働制、そして全地主の土地沒收。

じつに右の革命的スローガンの下に、ボルシエヴィキは第四回國會選舉に對するカンパを遂行したのであつた。

實に右のスローガンの下に、一九一二——一四年における労働大衆の革命運動の新たな昂揚が進行したのであつた。

要約

一九〇八——一二年の數年は、革命的仕事の上に、もつとも困難な時期であつた。革命の敗北ののち、革命運動が沈衰し、大衆が疲勞したとき、ボルシエヴィキはその戰術を變更して、ツアー制に對する直接の闘争から、廻り道の闘争方法に轉じた。ストルイビン反動時代の困難な條件下にあつては、ボルシエヴィキは、大衆との結びつきを確保するために、最小の合法的機會(疾病共済組合や労働組合から國會の演壇にいたる)をも利用した。ボルシエヴィキは、革命運動の新たな昂揚にそなへて、勢力を集結するたために、不撓不屈に活動した。

革命の敗北 反政府的諸思潮の離散、革命に對する失望、黨から脱落したインテリゲンチヤ（ボグダノフ、バザロフ、その他）による黨の理論的基礎を修正せんとする懸命の努力——これらによつておこされた困難な条件下にあつて、黨の旗幟をまかす、黨綱領にあくまで忠實であり、マルクス主義理論に對する「批評家」の攻撃を撃退した唯一の勢力は、黨内にあつて、たゞボルシエヴィキのみであつた（レーニンの「唯物論と經驗批判論」）。黨とその革命的原則とを擁護する上に、レーニンを中心としたボルシエヴィキの主要核心をたすけたものは、この核心がマルクス主義、レーニン主義イデオロギイによつて鍛錬され、革命の見透しを把握してゐたといふことであつた。「われわれがツビヨルドカーメン（岩）とあだ名されたについては、まんざら理由がないわけではない」と、レーニンは、ボルシエヴィキについて語つてゐた。

當時のメンシエヴィキは、革命からますます離れていつた。彼等は、プロレタリアートの非合法革命黨の解消、廢棄を要求する解黨派となつた。彼等は、黨綱領、黨の革命的任務とスローガンをますます大ビラに放棄し、労働者が「ストルイビン労働黨」と名づけたところの、彼等自身の改良主義的政黨の組織を企圖した。トロツキイは、實際には解黨派との統一を意味する「黨の統一」といふスローガンを、煙幕として偽善的に使用して、解黨派を援助した。

他の一方では、ボルシエヴィキの一部は、ツァー制との闘争にあつて、新らたなまはり道の闘争方法にうつる必要を理解せずして、合法的機會を利用すべきでなく、國會の労働者議員は召還さるべきであることを要求した。これらのオトゾヴィストは、黨を大衆から切り離す方向に押し、革命の新昂揚のために諸勢力を集結することを妨害した。オトゾヴィストは、「左翼」的言辭を煙幕としてもちひ、本質においては、解黨派と同様に、革命的闘争を放棄した。

解黨派とオトゾヴィストとは、レーニンに敵對して、トロツキイの組織した共同プロツク、八月プロツクに統一された。

ボルシエヴィキは、解黨派とオトゾヴィストとの闘争において、八月プロツクとの闘争において、勝利し、そして非合法プロレタリア黨を防護することに成功した。

この時期における最も重要な事件は、ロシア社會民主労働黨のブラীগ會議であつた（一九一二年一月）。當會議で、メンシエヴィキは黨から放逐され、ボルシエヴィキとメンシエヴィキとの同一黨内での形態上の統一は、永久に終結をつづけた。ボルシエヴィキは、一個の政治的グループから、一個の獨立政黨、すなはち、ロシア社會民主労働黨（ボルシエヴィキ）に正式になつた。ブラীগ會議は、新らたな型の黨、レーニン主義の黨、すなはちボルシエヴィキ黨を創設した。

ブラীগ會議では日和見主義者、メンシエヴィキがプロレタリア黨の戦列から清掃されたが、これは黨と革命のその後の發展に、重大な、決定的な意義をもつてゐた。もし、ボルシエヴィキが、労働者の大衆の裏切者、メンシエヴィキ妥協者を黨から放逐しなかつたならば、プロレタリア黨は、一九一七年に、プロレタリアート獨裁の勝利のために大衆を騒起させることはできなかつたであらう。

第五章

第一次帝國主義戰爭前の労働運動
昂揚期におけるボルシェヴィキ黨

(一九一二年—一九一四年)

ストルイビン反動の勝利は短命であつた。人民に善と被首蓋しかあたへないやうな政府が、長つときするはづはない。いまでは弾壓に慣つてこになつて、人民はもはや大抵なことではおどかさなくなつた。革命の失敗直後の數年に、労働者の面上にあらはれた疲勞の色は消えはじめた。労働者は再び闘争に立ちはじめた。新たな革命的昂揚が不可避であるといふ、ボルシェヴィキの豫言は正しかつた。一九一一年前の數年間に起つた同盟罷業者の數は、全體をひつくるめても、五萬から六萬にしか達しなかつたが、同年にはすでにその數は十萬人を越えるにいたつた。一九一二年一月に開かれたブラーグ黨會議は、労働運動の復活の開始について、とくに言及した。が、革命運動の現實の昂揚は一九一二年の四月、五月にはじまつた。その時、大衆的政治ストライキが、レナ金鑛鑛夫の射殺事件に關聯して勃發したのであつた。

一九一二年四月四日、シベリアのレナ金鑛ストライキ最中に、ツァー憲兵士官は鑛夫に發砲することを命令し、五百人以上の死傷者をだした。鑛山事務所との交渉におとなしく素手でやつてきたレナ鑛夫の射殺は、全國をわきたゞせた。ツァー専制制度のこの新たな血なまぐさい行爲は、鑛夫の經濟的ストライキをブツぶすために、レナ金鑛を所有する英國資本家の利益のためになされた。英國資本家とそのロシアの共同者とは、労働者の破廉恥な搾取によつて、レナ鑛山から毎年七百萬ルーブルを越える巨額の利潤をむさぼつてゐた。彼等は労働者にきはめて低い賃銀をはらひ、そして粗惡な腐つた食料を食はせた。六千のレナ金鑛労働者は、かゝる虐待と屈辱にもはや耐えられなくなつて、ストライキを決行したのであつた。

ペテルブルグ、モスクワ、其他のあらゆる産業中心地と地方のプロレタリアートは、大衆的ストライキ、デ

モンストレーション、集會等によつて、レナ射殺事件に呼應した。

「われわれは全く茫然自失して、しばしばわれわれの感動を表す言葉を見いだすことができなかつた。われわれのなした、いかなる抗議も、それはわれわれすべての體驗した精神的激動の弱い陰影にすぎないであらう。涙も、抗議も、なんのやくにもたゞない。たゞ、組織された大衆的闘争あるのみ。」と、一團の工場の労働者が彼等の決議中で宣言した。

レナ虐殺の問題について國會でなした社會民主議員團の質問に答へて、ツァーの大臣マカロフが、「そのとほりだつたし、將來もそのとほりだらう！」と傲然と放言した時、労働者の憤怒はさらに激發された。

レナ労働者の殺戮に抗議する政治的ストライキの参加者數は、三十萬人にのぼつた。

レナ事件は、ストルイビン政治でつくられた「平靜」な空氣を一掃した暴風のやうなものであつた。

こゝに、同志スターリンがこの問題について、一九一二年に、ボルシェヴィキのペテルブルグ新聞「ズヴェズダ(星)」に書いた一文がある。

「レナの發砲は沈黙の氷をやぶり、民衆運動の河は動きはじめた。動きだした！……現政治のすべての悪と毒、苦しみ多きロシアのすべての不幸、——これらが一つの事實に、レナ事件に、集中されたのだつた。こゝに、レナの發砲がストライキと示威運動の合圖となつた理由がある。」

解黨派とトロツキスト等は革命を埋葬しようとしたが、それは無駄であつた。レナ事件は、革命の諸勢力は生存し、巨大な革命の精力は労働階級内に蓄積されてゐることを示した。一九一二年のメーデー・ストライキは四十萬の労働者を動員した。しかも、これらのストライキは顯著な政治的性質をもち、民主共和國、八時間労働制・地主の全土地の沒收といふ、ボルシェヴィキの革命的スローガンの下に行はれた。右の中心諸スローガンは、廣汎な労働者大衆ばかりでなく、農民や兵士をも、専制制度に對する革命的攻撃のために團結させるものと考へられてゐた。

「全ロシアのプロレタリアートによる巨大なメーデー・ストライキと、それに伴ふ街頭デモ、労働者群衆に對する革命的檄文と演説、これらはロシアが革命的昂揚期に入つたことを、明瞭に示した。」
かうレーニンは、「革命的昂揚」と題する一文に書いてゐる。(レーニン全集、第十五卷五三三ページ)

労働者の革命的氣勢に驚愕して、解黨派はストライキや闘争を非難し、それを「ストライキ博奕」と呼んだ。解黨派ならばにその同盟者たるトロツキーは、プロレタリアートの革命的闘争を「請願運動」にすりかへようとした。彼等は労働者に呼びかけて、「権利」(團結、罷業等の制限撤廢)の賦與を數願する紙片、すなはち「請願書」に署名し、しかる後、それを國會に提出することをすすめた。しかして、ボルシェヴィキの革命的スローガンの周圍に數十萬の労働者が結集したが、そのとき解黨派の方はわづかに千三百の署名を集めたゞけであつた。

労働階級は、ボルシェヴィキによつて指示された道にしたがつた。
當時の國內の經濟状態は次のやうであつた。

一九一〇年には、すでに、不景氣にかはつて、主要産業部門に復興、生産の擴張がみられた。鉄鐵の生産額は一九一〇年に一億八千六百萬プード、一九一二年に二億五千六百萬プードであつたのが、一九一三年には二億八千三百萬プードに達した。(一プードは十六・三八キログラム、また四貫三六八匁——譯者註)石炭の産額は、一九一〇年の十五億二千二百萬プードから、一九一三年の二十二億一千四百萬プードに増加した。

資本主義産業の膨脹は、プロレタリアートの急速な増大をともしなつた。産業發展の一特徴はますます大規模の工場に生産が一層集中されることであつた。一九〇一年に、五百名以上を雇傭する大工場の労働者數は、労働者總數の四割六分七厘であつたのが、一九一〇年には、五割四分、すなはち半數以上を占めるにいたつた。かやうな産業の集中程度は古今未曾有のことであつた。産業的に發達したアメリカのやうな

國でさへ、當時は、労働者總數の三分の一が、大工場に雇はれてゐたにすぎなかつた。

プロレタリアートの増大とその大企業への集中、ならびにボルシェヴィキ黨のごとき革命政黨の存在、これらはロシアの労働階級を、國內政治生活の上における最大の勢力とした。工場内でおこなはれてゐる労働者に對する野蠻な搾取形態、ならびにツアアの酷吏のたえがたい警察政治、これらはすべての大ストライキに政治的性質を賦與した。その上、經濟的闘争と政治的闘争とのからみあひは、大衆的ストライキに異常な革命的力を賦與した。

革命的労働運動の前衛に英雄的なペテルブルグのプロレタリアートが進軍した。ペテルブルグについてバルチツク沿海諸地方、モスクワ市とモスクワ縣、その次ぎには、ヴォルガ流域地方と南部ロシアがつゞいた。一九一三年には、運動は西部地方、ポーランド、コーカサスにひろがつた。一九一二年には、政府の統計によると、全體で七十二萬五千の労働者、もつと完全な統計によると、百萬を越える労働者がストライキに参加した。一九一三年には、政府の報告によると八十六萬一千人が、もつと完全な統計によると百二十七萬二千人がストライキをやつた。そして、一九一四年の前半期には、ストライキに参加した労働者數は、すでに約百五十萬に達した。

かやうにして、一九一二——一四年の革命的昂揚は、ストライキ闘争の規模は、一九〇五年の革命の初期の狀態に國內をちかづけた。

プロレタリアートの革命的大衆ストライキは、全人民的意義をもつた。ストライキは専制制度に對して向けられ、それは勤勞人口の大多數の同情をえた。ストライキに對して、工場主はロツク・アウトをもつて労働者に復讐した。一九一三年に、モスクワ縣では、資本家は五萬の纖維労働者を街上に放りだした。一九一四年三月には、一日のうちにペテルブルグで、七萬の労働者が誅首された。他の工場や産業部門の労働者は、基金を募集したり、ある時は同情ストライキを決定して、罷業者を、閉めだされた仲間を支援

した。

労働運動の昂揚と大衆的ストライキは、農夫大衆を覺醒させ、彼等を闘争にひきこんだ。農民はふたたび地主に對する闘争に躍起し、地主の領地やクラトクの農場（フートル）を破壊した。一九一〇—一四年中に、一萬三千以上の農民騷擾があつた。

革命的進出は軍隊内部でもはじまつた。一九一二年にトルケスタンで軍隊の武装叛亂が勃發した。叛亂の氣勢はバルチツク艦隊でも、セバストポールでも熱した。

ボルシエヴィキ黨によつて指導された革命的なストライキ闘争や示威運動は、労働階級は部分的な要求や「改良」のためでなく、ツァーリ制から人民を解放するために闘つてゐることを示した。國は新たな革命を迎へつゝあつた。

レーニンは、一九一二年の夏、ロシアにもつと接近するために、パリからガリシア（以前のオーストリー）に移つた。同地で、中央委員と黨の重要な働き手からなる二つの會議を、レーニンは司會した。一つの會議は、一九一二年末にクラコフで開かれ、他は翌一九一三年の秋、クラコフ附近のポローニノといふ小さな町で開かれた。これらの會議は、次のとき労働運動の重要な諸問題についての決議を採用した。すなはち、革命的昂揚、ストライキと黨の諸任務、非合法諸組織の強化、國會内の社會民主議員團、黨機關紙、保險カンパ、等。

二、ボルシエヴィキ新聞「ブラヴダ」。第四次國會における

ボルシエヴィキ議員團

ボルシエヴィキ黨が、その諸組織を強化し、その影響を大衆の間に擴大するために使用した一つの強力な

手段は、ベテルブルグで發行されたボルシエヴィキ日刊新聞「ブラヴダ（眞理）」であつた。同紙は、レーニンの指令にしたがひ、スターリン、オルミンスキー、ボレタエフの發起で創刊された。「ブラヴダ」は、革命運動の新たな昂揚と時を同じくして誕生した大衆的労働新聞であつた。その創刊日は四月二十二日（新曆の五月五日）にあらはれた。この日は労働者にとつて眞實の祭日であつた。で、「ブラヴダ」出現を紀念して、五月五日を労働者出版物デーとして祝ふことが決定された。

「ブラヴダ」の前に、ボルシエヴィキは、すゝんだ労働者のために「ズヴェズダ（星）」と呼ぶ週刊新聞を持つてゐた。「ズヴェズダ」はレナ事件當時、重要な役割を演じた。同紙は、労働階級を闘争に動員するために、レーニンやスターリンによつて書かれた、幾多の戦闘的政治論文を載せた。しかし、革命の昂揚に直面して、週刊紙ではもはやボルシエヴィキ黨の要求に合致しなくなつた。非常に廣汎な労働者層を目標とした日刊大衆政治新聞が必要とされた。すなはち、「ブラヴダ」は、かゝる新聞であつた。

この時期における「ブラヴダ」はきはめて偉大な役割を演じた。「ブラヴダ」は廣汎な労働階級大衆を、ボルシエヴィキの味方に獲得した。間断なき警察の彈壓、罰金、檢閲官の嗜好に適さぬ論文や通信の載つた號の發賣禁止と沒收、かういふ事情の下で、「ブラヴダ」が存続しえたのは、もつぱら數萬の進んだ労働者からえた積極的支援のためのものであつた。巨額の罰金を「ブラヴダ」が支拂ふことのできたのも、もつぱら労働者の間でなされた大きな贈金のおかげであつた。おびただしい數の「ブラヴダ」發禁號が、ドン・ドン讀者の手中に入つていつたが、それはすゝんだ労働者が夜中に印刷所へきて、新聞包をかゝへてゆくからであつた。

ツァーリ政府は、二ヶ年半のうちに、「ブラヴダ」に八回も發行停止をくらわした。しかし、そのたびごとに、同紙は、労働者の支援をえて、新しい、しかし似た名前で、例へば、「ザ・ブラヴダ（眞理のため）」とか「ブーチ・ブラヴデー（眞理の道）」とか「ツルドヴァヤ・ブラヴダ（労働眞理）」といふやうな名前で、

ふたゝび妻をあらはした。

「ブラヴダ」の日々の平均配布部数は四萬であつたが、メンシエヴィキの日刊新聞「ルチ（光線）」の毎日の配布数は一萬五千か一萬六千にしかなかった。

労働者は「ブラヴダ」を彼等自身の新聞と考へ、これに非常な信頼をもち、その呼びかけにたゞちに應じた。一枚の「ブラヴダ」は手から手にわたつて、數十人の讀者に讀まれ、彼等の階級意識を形成し、彼等を教育し、彼等を組織し彼等を闘争にたたせた。では、「ブラヴダ」は何を書いたのか？

毎號労働者からの數十通の通信を載せた。それには、労働者の生活、ならびに、彼等が資本家、その支配人や職工長からうけてゐる野蠻な搾取や諸種の形態の虐待と屈辱が述べられてゐた。これらの通信は、資本主義制度に辛辣であり、これを狙ひ正しく摘發した。「ブラヴダ」は、仕事がなくして絶望し、飢餓に瀕した失業者の自殺事件を、しばしば報道した。

「ブラヴダ」は、諸種の工場や産業部門の労働者の必要や要求について書き、その要求のためにいかに労働者が闘つてゐるかを報道した。ほとんど毎號、いろいろの工場で起つたストライキについて書いた。大きな、ながびいたストライキが起つた場合には新聞は、罷業者の支援のために、他の工場や産業部門の労働者の間に、基金募集を組織した。ある時は數萬ルーブルが罷業基金として集められた。大多數の労働者が日給七十か八十コペークしかもらつてゐない當時にあつては、「右の金額はじつに大金といはねばならぬ。これは、プロレタリア連帯性の精神と全労働者の利益の一致といふ意識を、労働者の間にうゑつけた。

労働者は、あらゆる政治的事件に、あらゆる労働者の勝敗に呼應して、「ブラヴダ」に手紙、挨拶、抗議等々を送つた。「ブラヴダ」は、その論文で、一貫したボルシエヴィキ的立場から、労働運動の任務を論じた。合法新聞はツァー制打倒を公然と叫ぶことはできぬ。で、暗示しかあたへられなかつたが、しかし

階級意識のある労働者はそれを十分に了解し、そして大衆に説明した。たとへば、「ブラヴダ」が「完全な削除なしの五年の諸要求」と書けば、それがボルシエヴィキの革命的スローガン、すなはちツァー制の打倒、民主共和国、地主の土地没收、八時間労働制、等を意味することを労働者は了解した。

「ブラヴダ」は、第四次國會の選挙直前に、すすんだ労働者を組織した。同紙は、自由主義ブルジョアジ

ーとの協調の賛成者や、「ストルイピン労働黨」の賛成者であるメンシエヴィキの裏切りの態度を暴露した。「ブラヴダ」は「削除なしの五年の諸要求」の賛成者であるボルシエヴィキに投票するように、労働者に呼びかけた。選挙はいくつかの段階を必要とする間接選挙であつた。最初に労働者の集會で全権委員を選挙する。ついで、これらの全権委員が選挙人をえらぶ。この選挙人が國會の労働者議員選挙に参加することである。「ブラヴダ」は、選挙当日に、ボルシエヴィキ選挙人の名簿を發表して、この人々に投票することを労働者に勧告した。この名簿は選挙当日よりも前に發表できなかつた。といふのは、指名された候補者が検査される危険があつたからである。

「ブラヴダ」はプロレタリアートの闘争を組織することをたすけた。一九一四年の春、ペテルブルグで大きなロツク・アウトがおこつた時、大衆的ストライキを宣言するには、不得策であつたので「ブラヴダ」は労働者に激して、他の闘争形態、たとへば、工場内の大衆的集會とか、街上のデモをすすめた。これを新聞に公然と書くことはできなかつた。しかし「労働運動の諸形態について」なるつゝましましやかた表題を冠したレーニンの論文を讀んだ階級意識のある労働者にとつては、右の呼びかけはよく了解された。その論文には、當瞬間においては、ストライキは、労働運動のより高い形態に、代へられなければならぬことが述べられてあつたが、それは集會や示威運動の組織への呼びかけを意味したのであつた。

かやうにして、ボルシエヴィキの非合法的革命活動は、「ブラヴダ」を通じて、労働大衆への煽動と組織の合法的形態と結びついた。

「ブラヴダ」は労働者の生活、彼等のストライキと示威運動について書いただけでなく、農民の生活、彼等の飢餓、封建的地主の搾取、ストルイビン「改革」の結果として、クラーク農場経営者による農民の最良の土地略奪、等についても書いた。「ブラヴダ」は、農村地方に集積されてゐる大量の燃えあがりやすい材料について、階級意識のある労働者の注意を喚起した。一九〇五年の革命の諸目的は解決されてゐないこと、新たな革命が切迫してゐることを、「ブラヴダ」はプロレタリアートに教えた。この第二の革命において、プロレタリアートは革命的農民のごとき強力な同盟者をうるであらうことを、「ブラヴダ」は教えた。

メンシエヴィキは、プロレタリアートが革命について考へないやうに努力した。メンシエヴィキは労働者にかういふことを吹きこんだ。人民について、農民の飢餓について、黒百組的反動封建地主の支配について考へるなかれ。しかして、「結社の自由」のためにだけ戦へ、これを求める「請願」をツァー政府に送れ、と吹きこんだ。が、ボルシエヴィキは労働者にかう説明した。革命の放棄、農民との同盟の放棄といふメンシエヴィキの説教は、ブルジョアジーの利益のために傳道されてゐること、労働者はその同盟者として農民を自己の味方にひきつけるならば、まちがひなく、ツァー制に勝ちうることを、メンシエヴィキのごとき悪牧師は、革命の仇敵として驅逐されねばならぬことを説明したのである。

「ブラヴダ」は、その「農民生活」欄にどんなことを書いたか？

一九一三年の敷通の通信を、實例として、こゝに引用しよう。

「農村事件」と題したサマラからの手紙は、次のことを報告してゐる。ブグルミンスク郡のノヴォハスブラタ村の四十五人の農民は、オトルブ（割前地）をえんとする農民に共有地を分割するに際して測量師に抵抗したかどで大部分が長期の禁錮に處された、と。

ブスコヴ縣からの短信は、次のごとく報道してゐる。「ブシツ村（ザヴァルエ驛の近傍）の農民は、村の

巡査に武器をもつて抵抗した。負傷者があつた。衝突の原因は、農業上の紛議からである。村の巡査がブシツに集結されてゐる。副知事と検事も當村に急行した、」と。

ウファ縣からの通信は報告する。農民の分配地は競賣で賣却されてゐる。飢饉と農村オブシチーナ（土地共有體）からの脱退をゆるす法律の結果、土地のない農民の数が増加してゐる。ポリソヅカ部落に例をとらう。こゝでは、二十七の農家が五百四十三デシヤチン（一デシヤチンは一町一段餘—譯者註）の耕地を所有してゐる。ところが、飢饉のときに、五農家が三十一デシヤチンを當時の地價の三分の一乃至四分の一の値段で、すなはち、一デシヤチンにつき二十五乃至三十三ルーブルといふ値段で永久に手ばなした。また、同部落では、七農家が百七十七デシヤチンの土地を抵當に入れ、一デシヤチンにつき十八乃至二十ルーブルを借り、六ヶ年償還、利率年一割二分の契約であつた。で、農民の窮乏と高い利子を念頭にいれる時、おそらく百七十七デシヤチンの半分は高利貸の手中に落ちるにちがひない。こんなペラボウな金額を六年間に償却するなど、負債者の半分にもできさうもないからである、と。

レーニンは、「ロシアにおける地主の大土地所有と農民の小土地所有」なる一文を「ブラヴダ」に発表した。同論文で、いかに廣大な土地が寄生地主によつて所有されてゐるかを、労働者、農民に明白し示した。三萬の大地主だけで七千萬デシヤチンの土地を所有した。同一面積の土地が一千万農家の持分であつた。だから、大地主は一人平均二千二百デシヤチンを所有し、クラークをもふくめて各農家は、平均七デシヤチンを所有したことになる。それだけではない、経済的に微力な五百萬の農家、すなはち全農民の半数は、一戸あたりわづかに一乃至二デシヤチンを所有したにすぎなかつた。これらの事實は、農民の窮乏と飢餓との根源は、大地主の土地所有に、封建の遺制にあること、そして、農民は、これらを労働階級によつてみちびかれる革命によつてのみ除くことができることを明瞭に示した。

「ブラヴダ」は、農村地方とつながりのある労働者を通じて、農村に浸透し、そこですゝんだ農民を革

命的闘争に激起させた。

「ブラヴダ」が創立されたとき、非合法社会民主諸組織は、完全にボルシェヴィキの指導下にあつた。しかし、他方、合法的形態の諸組織、たとへば、國會議員團、出版物、疾病共済會、労働組合、等のときは、メンシエヴィキの手から完全にはもぎ取つてゐなかつた。で、ボルシェヴィキは、解黨派を労働階級の合法的諸組織から驅逐するために、決定的闘争を行はねばならなかつた。しかして、「ブラヴダ」のおかげで、この闘争は勝利に歸したのである。

「ブラヴダ」は、黨精神のための闘争、大衆的労働者革命黨の復活のための闘争の中心となつた。「ブラヴダ」は、ボルシェヴィキ黨の非合法的中心の周圍に合法的諸組織を集結させ、労働運動を一定の目標に、すなはち革命の準備の方向にみちびいた。

「ブラヴダ」は、おびたゞしい數の労働者通信員を有した。わづか一年間に、労働者からの通信を一萬一千通も載せた。だが、「ブラヴダ」が労働大衆と連絡をたもつたのは、通信によつてだけではない。多數の労働者が工場から、毎日、編輯所に訪ねてきた。「ブラヴダ」の編輯所に、黨の組織活動の多くの部分が集中されてゐた。こゝで、地方の黨細胞代表者との會合が開かれた。こゝで、工場内の黨活動の報告が受けとられた。そして、こゝから、ベテルブルグ委員會や黨中央委員會の指令が發送された。

ボルシェヴィキは、大衆的革命的労働者黨の復活のために解黨派となした二年半の頑強な闘争の結果、一九一四年の夏までに、ボルシェヴィキ黨と「ブラヴダ」の戦術に對して、全ロシアの積極的労働者の五分の四の支持を獲得することに成功した。これは、たとへば、次の事實によつて證明される。すなはち、一九一四年に七千の労働者グループが労働新聞に賛金したが、その内五千六百グループがボルシェヴィキ新聞に、わづかに一千四百グループがメンシエヴィキ新聞に寄附した、といふ事實である。けれども、メンシエヴィキの方は、自由主義的ブルジョア・インテリゲンチヤの間に「金持の友人」を

多くもち、彼等がメンシエヴィキ新聞の維持に必要な基金の半分以上を負担したのであつた。

當時、ボルシェヴィキは「ブラヴダ主義者」と呼ばれた。「ブラヴダ」によつて、革命的プロレタリアートの全世代が、のちに十月社会主義革命を行つた世代が、成長した。「ブラヴダ」は數十萬の労働者に後援された。革命の昂揚期（一九一二年—一九一四年）に、大衆的ボルシェヴィキ黨の鞏固な基礎をきづくことができ、この基礎は、帝國主義戦争時代におけるツァーリ制のいかなる追求迫害にも破壊されなかつたのだ。

「一九一二年の「ブラヴダ」——これが一九一七年のボルシェヴィキの勝利の基礎を据えたものである。」（スターリン）

もう一つの全ロシア的合法的黨機關は、第四次國會内のボルシェヴィキ議員團であつた。

一九一二年、政府は第四次國會選舉を施行することを指定した。わが黨はこの選舉に参加することに重大な意義をかけた。國會の社会民主議員團と新聞「ブラヴダ」とが、全國的規模での主要な合法的足場であり、これを通じて、ボルシェヴィキ黨は大衆の間での革命的活動を遂行してゐた。

ボルシェヴィキ黨は、國會選舉にあたり、その独自のストロトガンをもつて、獨自に活動を開始し、政府御用諸黨にも自由主義ブルジョアジー（カデット立憲民主黨）にも、同時に攻撃をあたへた。ボルシェヴィキの選舉カンパのストロトガンは、民主共和國、八時間労働制、地主の土地没収であつた。

第四次國會選舉は一九一二年の秋に行はれた。十月のはじめに、政府はベテルブルグの選舉の經過に不満をいだき、幾多の大工場の労働者の選舉権に干渉しようとした。これに報復して、わが黨のベテルブルグ委員會は、同志スターリンの提議にもとづき、一日間のストライキを執行するように、大企業の労働者に檄した。政府は、苦境にたたされて、退却を餘儀なくされ、労働者は彼等の集會で彼等の欲する者を選挙することができた。労働者は大多數、同志スターリンの起草した全權委員と議員への「註文」に賛成投票した。ベテルブルグ労働者のその労働議員に對する「註文」は、解決されなかつた一九〇五年の諸任

務を思ひおこさせた。

「註文」には次のやうに書かれてあつた。

「ロシアはいま、一九〇五年におけるよりも、おそらくもつと深刻な、まさに来らんとする大衆運動の前夜にある、とわれわれは考へる……。五年の時と同様に、これらの運動の首領はロシアの社會におけるもつとも進んだ階級、ロシア・プロレタリアートであらう。その同盟者には、ロシアの解放に切實な利害をもつところの、虐げられた農民のみがなりうる。」

「註文」は、人民の將來の行動は、二つの戦線、すなはち、ツァー政府に對する闘争と、ツァー制と妥協せんとする自由主義的ブルジョアに對する闘争の形態をとらなければならぬ、と聲明してゐる。

レーニンは、革命的闘争に駆起することを労働者に呼びかけた「註文」に、非常な重要性を附した。そして、労働者は彼等の決議の中でこの呼びかけに呼應した。

ボルシエヴィキは選挙で勝利を占め、同志バダエフはベテルブルグ労働者によつて國會に選出された。労働者は、國會選挙にあたり、國民の他の層とは別個に投票した。(労働者クリヤと呼ばれた。)労働者クリヤから選挙された九人の議員のうち、六人がボルシエヴィキ黨員であつた。すなはち、バダエフ、ベトロフスキー、ムラノフ、サモイロフ、シャゴフ、マリノフスキー(その後プロバカートルたる事が暴露された)。ボルシエヴィキ議員は、労働階級の五分の四以上も集中してゐるやうな大工業中心地から選出された。ところが、若干の解黨派は、労働者からではなく、つまり労働者クリヤからではなく、他からえらばれた。それがために、六名のボルシエヴィキに對し、七名の解黨派が國會に出ることになつた。最初、ボルシエヴィキと解黨派とは國會に一つの合同社會民主黨員團をつくつた。ボルシエヴィキ議員は、ボルシエヴィキの革命的活動を妨害する解黨派に對して頑強な闘争を行つたのち、ボルシエヴィキ中央委員會の指令によつて、一九一三年十月、合同社會民主黨員團から脱退して、獨立ボルシエヴィキ議員團

をつくつた。

國會で、ボルシエヴィキ議員は革命的演説を行ひ、専制制度をあげき、あるひは労働者の虐使や資本家の非人道的な労働者搾取について、政府に質問した。

また彼等は、農業問題についても國會で演説し、その演説で封建地主と闘争することを農民に激し、あるひは地主の土地没収とその農民への讓與に反對するカデットを暴露した。

ボルシエヴィキは、八時間労働制に關する法案を國會に提出した。もとより、それは黒百組的反動國會で採擇されはしなかつたが、しかし大きな煽動的效果があつた。

國會のボルシエヴィキ議員團は、黨中央委員會やレーニンと密接な關係をたもち、彼から指示を受けてゐた。また、彼等は、同志スターリンがベテルブルグに住んでゐた時は、彼によつて直接指導された。

ボルシエヴィキ議員は、國會内の活動にだけ制限せず、彼等は國會外でも大きな活動を展開した。彼等は工場を訪問し、全國の労働者中心地に旅行し、そこで彼等は演説し、秘密集會を開いて黨の決定を説明しあるひは新しい黨の組織をつくつた。議員はたくみに合法活動と、非合法、地下活動とを結合した。

三、合法的諸組織におけるボルシエヴィキの勝利。革命運動の

一層の昂揚。帝國主義戦争の前夜

この期間に、ボルシエヴィキ黨は、プロレタリアートの階級闘争のあらゆる形態と表現における指導の模範を示した。黨は地下組織をつくりあげた。黨は非合法リーフレットを發行した。黨は大衆の間に秘密な革命的仕事を遂行した。それと同時に、黨は労働階級の諸種の現存合法的諸組織をますます獲得していった。黨は労働組合、市民會館、夜間大學、クラブ、疾病共濟會、等の指導を握るために努力した。これ

らの合法的諸組織は、永い間、解黨派の避難所となつてゐた。ボルシエヴィキは合法的諸團體をわが黨の足場にかへるために、猛烈な闘争を行つた。ボルシエヴィキは、非合法活動と合法活動とを巧妙に結合して、ベテルブルグとモスクワの労働組合組織の大多数を獲得してしまつた。ボルシエヴィキは、一九一三年におけるベテルブルグの金屬労働者組合幹部の選挙ではとくにすばらしい勝利をえた。すなはち、集會に集つた三千人の金屬工のうち、わづか百五十人だけが解黨派に投票したのだつた。

同様のことが、第四次國會内の社會民主議員團のとき合法的組織についてもいへる。メンシエヴィキは國會に七人の議員を有し、ボルシエヴィキは六人だけであつた。けれども、メンシエヴィキの七人組は主として非労働者地帯からえらばれて、からうじて労働階級の五分の一を代表するにすぎなかつた。ところが、ボルシエヴィキの六人組は、國內の主要工業中心地（ベテルブルグ、モスクワ、イワノヴォ・ヴォズネセンスク、コストロマ、エカテリノスラフ、ハリコフ）から選挙されて、國內労働階級のじつに五分の四以上を代表した。したがつて、労働者は六人のボルシエヴィキ議員（バダエフ、ベトロフスキ、その他）を彼等の議員と見なし、七人のメンシエヴィキを無視した。

ボルシエヴィキは合法的諸組織の獲得に成功したが、その理由はかうである。すなはち、ツァーリの野蠻な弾壓や解黨派とトロツキストの譏謗にもかゝはらず、ボルシエヴィキは非合法黨を保全し、その陣營内に鐵の規律をたもつことができ、労働階級の利益を忠實に防護し、大衆と緊密な結合をたもち、そして労働運動の敵に對して非妥協的な闘争を決定したことが、その理由であつた。

かやうにして、合法的諸組織内におけるボルシエヴィキの勝利とメンシエヴィキの惨敗とは、全線にあつて發展した。國會の演壇からの煽動的仕事についても、また労働新聞や他の合法的諸組織についてもメンシエヴィキの影はうすくなつた。労働階級は、革命運動に影響されて、ボルシエヴィキの周圍に鞏固に集結し、メンシエヴィキに背をむけたのである。

あげくの果てに、メンシエヴィキは民族問題に關しても破産したことを立證した。ロシアの邊境地域における革命運動は、民族問題に對して明確な綱領を要求した。しかるに、メンシエヴィキは、何人をも満足させないやうなブツドの「文化的自治」をもつただけで、そのほかに、何等の綱領をもたなかつた。ボルシエヴィキのみが民族問題に對してマルクス主義的綱領をもち、それは「マルクス主義と民族問題」と題する同志スターリンの論文、および「民族自決権について」と「民族問題についての批判的註釋」と題するレーニンの論文中で述べられてゐた。

上記のときメンシエヴィズムの敗北のうち、八月プロツクが繼目ごとに分裂しはじめたことは、べつに驚くにたならぬ。プロツクはしゆじゆ雜多な要素からできてゐるので、ボルシエヴィキの攻撃に抗しえずして、バラ／＼に分解しはじめた。八月プロツクは、もともとボルシエヴィキとの抗争のためにつくられたのであるが、ボルシエヴィキの攻撃にあつて、一たまりもなく、粉微塵になつた。第一にプロツクから脱退したのは、フベリョード一派（ボグダノフ、ルナチャルスキ、その他）であつて、ついでトヴィア人が、ついで殘餘が脱退した。

解黨派はボルシエヴィキとの闘争に惨敗を喫して、第二インターナショナルに救ひをもとめた。第二インターナショナルは彼等の援助にきた。第二インターナショナルは、ボルシエヴィキと解黨派とを「調停し」、「黨内和平」を確立するといふ口實で、ボルシエヴィキに對し、解黨派の妥協政策の批判を停止することをとめた。が、ボルシエヴィキは和解しなかつた。彼等は日和見主義的の第二インターナショナルの決定にしたがふことを拒否し、いかなる譲歩もしなかつた。

合法的諸組織内におけるボルシエヴィキの勝利は、決して偶然ではなかつたし、またありえなかつた。偶然でなかつた理由は、ボルシエヴィキのみが正しきマルクス主義理論と明確な綱領を有し、闘争によつて鍛鍊された革命的プロレタリア黨であつたといふことである。それだけではない、さらに偶然でなかつ

た理由は、ボルシェヴィキの勝利は漸次に高まりゆく革命の昂揚を反映してゐたといふことにもあつた。労働者の革命運動は、確乎として發展し、町から町へ、州から州へ擴大していつた。一九一四年の初頭トライキはますます頑強に闘はれ、ますます多数の労働者をまきこんでいつた。一月九日には、二十五萬上の労働者が罷業に参加し、そのうちの十四萬はベテルブルグの労働者であつた。五月一日には、五十萬以上の労働者がストライキをやつてをり、ベテルブルグではそのうちの二十五萬餘が加はつた。労働者はストライキで非常な頑固さを示した。ベテルブルグのオプホフ工場のストライキは二ヶ月間以上も繼續し、レスネル工場のは、ほとんど三ヶ月間もつゞいた。幾多のベテルブルグの企業で發生した多数の中毒事件は十一萬五千の労働者のストライキの原因となり、これにつゞいて示威運動が行はれた。運動は擴大しつゞけた。一九一四年の上半期（七月の初旬をふくむ）には、全體で百四十二萬五千の労働者がストライキを決定した。

五月には、バクーで石油労働者の總罷業が勃發し、これはロシアの、全プロレタリアートの注意の焦點となつた。ストライキは組織的に行はれた。六月二十日に、二萬の労働者の示威運動がバクーで行はれた警察はバクー労働者に對して兇暴な彈壓手段をとつた。抗議とバクー労働者との連帯を示して、ストライキがモスクワにおこり、ついで他の地方にひろがつた。

七月三日に、バクーのストライキに關聯して、ベテルブルグのプロフ工場で集會が開かれた。警官が労働者に發砲した。憤怒の嵐がベテルブルグの全プロレタリアートの間に捲きおこつた。七月四日に、ベテルブルグ黨委員會の檄に應じて、九萬のベテルブルグ労働者が抗議のためにストライキを決定した。そして、ストライキ参加者の数は、七月七日には十三萬人に、同八日には十五萬人に、同十一日には二十萬人にのぼつていつた。

不安動搖はすべての工場にひろがり、集會とデモンストレーションがいたるところで開かれた。事態はパリケード（市街戦の防塞）を築くところまでつゝんだ。パリケードはバクーとロツツでもまた急築された。諸所で警官は労働者に發砲した。政府は運動鎮壓のために「非常」手段をとつた。首都は一個の戦陣と化した。「ブラヴダ」は發行を停止された。

しかし、あたかもこの時、國際的性質の新たな力——帝國主義戦争——が舞臺に姿をあらはし、これは事態の進行を一變せざるをえなかつた。七月の革命的諸事件の高潮時に、フランス大統領のポアンカレが、急迫した戦争の開始をツァーと協議するために、ベテルブルグに到着した數日後に、ドイツはロシアに對し宣戦を布告した。ツァー政府は戦争を利用して、ボルシェヴィキ諸組織を破砕し、労働運動を粉砕せんとした。革命の昂揚は世界戦争によつて中斷された。その戦争にツァー政府は革命からの救助をもとめたのであつた。

要約

新らたな革命の昂揚期（一九一二年—一九一四年）に、ボルシェヴィキ黨は労働運動の先頭にたち、それをボルシェヴィキのスローガンの下に、新らたな革命の方向にみちびいた。黨は非合法活動と合法活動とを結合することに成功した。黨は解黨派とその盟友——トロツキストとオトゾヴィスト——の反抗を粉砕して合法運動のあらゆる形態の指導をにぎり、合法的諸組織をその革命的仕事の足場にかへた。

黨は労働階級の仇敵と労働運動内の彼等の手先と闘争しつゝ、黨の戦列をかため、労働階級と黨の連繫をひろげた。黨は國會を革命的煽動の演壇として廣く利用し、且つすばらしい大衆的労働新聞「ブラヴダ」を創刊して、革命的労働者の新世代、すなはち、ブラヴダ主義者を養成した。労働者のこの層は、帝國主義戦争の間にも、國際主義とプロレタリア革命の旗幟を忠實にまもつた。のちに、彼等は、一九一七年十

月革命に際し、ボルシエウイキ黨の中核となつた。

黨は、帝國主義戦争の前夜に、労働階級の革命的行動を指導した。これらの行動は、前衛戦であつて、帝國主義戦争で中斷されはしたが、三年後には復活し、つひにツァーリ制の顛覆に終つた。ボルシエウイキ黨は、プロレタリア國際主義の旗をかざして、帝國主義戦争の困難な時代に入つた。

第六章

帝國主義戦争期のボルシエウイキ黨。

ロシアにおける第二革命

(一九一四年——一九一七年三月)

第六章 帝國主義戰爭期のボルシエヴィキ黨。

ロシアにおける第二革命

(一九一四年——一九一七年三月)

一、帝國主義戰爭の勃發と原因

一九一四年七月十四日(新曆二十七日)、ツァー政府は總動員を布告した。七月十九日(新曆八月一日)には、ドイツはロシアに對して宣戰を布告した。

ロシアは戰爭を開始した。

レーニン、ボルシエヴィキは、戰爭が實際に勃發するつと前に、すでに、それが不可避であることを豫見した。社會主義者の國際的諸大會で、レーニンは、戰爭に際して社會主義者のとるべき行動の革命的方針を決定する目的をもつて、いくたの提案をなしたのであつた。

レーニンは、戰爭は資本主義にかならず附隨するものであることを指摘した。

十九世紀の末期と二十世紀の初期に、資本主義がその發展の最高の、最後の段階、すなはち帝國主義に終局的に入つた時、戰爭はとくに不可避となつてきた。帝國主義の下では、強力な資本家聯合(獨占)や銀行が、資本主義國家の生活に決定的地位を占めるにいたつた。金融資本が資本主義國家の主人となつたとして、金融資本は、新市場、新植民地の占取、資本の輸出のための新領域、原料の新資源地、等を要求した。

しかるに、十九世紀末までに、地球の全地域は資本主義諸國家の間に、すでに分割されつくしてゐた。しかも、帝國主義時代には、資本主義の發展は、すこぶる不均等に、また跳躍的に進行する。つまり、以前には首位を占めてゐた甲の國が、現在は比較的遅々としてその産業を發展させ、以前にはおくれてゐた乙の國が、現在は大飛躍で前者に追いつき、これを追ひこしてゐる。帝國主義諸國の經濟力および武力の相互關係は變化した。新らたな世界再分割の熱望があらはれた。新らたな世界再分割のための鬭争が、帝國主義戰爭を不可避ならしめた。一九一四年の戰爭は、世界と勢力範圍の再分割をめざす戰爭であつた。この戰爭を、すべての帝國主義諸國家が長い間準備してゐた。この戰爭に對しては、すべての國の帝國主義者に責任があつた。

だが、一方では、ドイツとオーストリーによつて、他方では、イギリスとフランスとこの兩國に從屬するロシアによつて、とくにこの戰爭準備が行はれてゐた。イギリス、フランスおよびロシアの同盟である三國聯合(アンタント)は、一九〇七年に締結されてゐた。ドイツ、オーストリー・ハンガリーおよびイタリアは別の帝國主義同盟をつくつてゐた。しかし、一九一四年に戰爭が勃發するや、イタリアは該同盟から脱退して、のちに聯合國側に參加した。ドイツとオーストリー・ハンガリーは、ブルガリアとトルコによつて支援された。

帝國主義戰爭準備にあつて、ドイツは英、佛から植民地を、ロシアからウクライナ、ポーランド、バ

ルチツク沿海諸州を奪取することを目指した。ドイツは、バグダッド鐵道を敷設して、近東におけるイギリスの支配をおびやかした。イギリスはドイツ海軍の軍備擴張をおそれた。

ツアアのロシアは、トルコの分割を目指し、黒海から地中海に通ずる海峡（ダーダネルス）を獲得し、コンスタンチノーブルを強奪することを夢見た。また、ツアア政府の計畫には、オーストリー・ハンガリーの一部であるガリシアの占領もふくまれてゐた。

かくのごとく、帝國主義戦争は、二群の資本主義諸國家の間における深刻な矛盾によつて起されたのである。

この世界再分割のための強奪戦争は、すべての帝國主義諸國の利害に抵觸した。日本、アメリカおよびその他の諸國も、その後、同戦争に引きずりこまれた。

戦争は世界戦争となつた。

戦争が勃発するや、各帝國主義政府は、自分が隣國政府から攻撃されてゐて、けつして隣國を攻撃してゐるのではなからうことを、證明することに努めた。各帝國主義政府は、祖國防衛のために戦争をしてゐることを宣言した。

第二インターナショナルの日和見主義者は、ブルジョアジーが國民をあざむくのを援助した。第二インターナショナルの社会民主主義者は、社会主義の大業、ブルレタリアートの國際的連帯性の大業を、卑劣な手段で裏切つた。彼等は、戦争に反対するどころか、ブルジョアジーをたすけて、祖國擁護に名をかりて、各交戰國の労働者、農民がひに戦争するやうにけしかけた。

ロシアが聯合國側に、フランスとイギリス側に荷擔して、帝國主義戦争に加はつたことは、偶然ではなかつた。一九一四年以前に、ロシア産業の最も重要な部門は、外國資本、おもにフランス、イギリス、ベルギー資本の手中に、言ひかへれば、聯合國側の手中に握られてゐたことを念頭に入れなければならぬ。

ロシアの最も重要な冶金工場は、フランス資本家の手中にあつた。全體で、冶金産業はほとんど四分の三（七割二分）までが、外國資本に依存してゐた。同様のことがドンバスの石炭産業についてもいへる。國內石油産額の約半分は、イギリスとフランス資本の手中にあつた。ロシア産業の利潤の多くの部分が外國銀行、おもに英佛銀行に流入した。これらすべての事情に加ふるに、ツアアは佛、英から數十億を借金しこれがためにツアア制は英佛帝國主義にしばりつけられ、ロシアはこれらの國の屬國に、半植民地にされてゐたのであつた。

ロシア・ブルジョアジーは、彼等の状態を改善する意圖をもつて、戦争に入つた。すなはち、新市場の獲得、軍需品の注文による莫大な利潤、同時に、戦時情勢を利用して革命運動を粉碎すること、これを目的としたのである。

ツアア・ロシアは無準備で戦争をはじめた。ロシアの産業は他の資本主義諸國の産業にくらべると、はなはだしくおくれでゐた。そこでは、磨滅した機械を据えつけた舊式工場が大部分を占めてゐた。半農奴制的土地所有制度が存在し、窮乏と破滅に苦しむおびただしい數の農民が存在したために、農業は長期戦にたえる鞏固な經濟的地盤になりえなかつた。

ツアアの主要支柱は封建的地主であつた。黒百組的反動大地主は、大資本家と提携して、國內と國會を支配してゐた。彼等はツアア政府の内外政策を完全に支持した。ロシア帝國主義ブルジョアジーは、一方では新市場と新領土の略奪を保證し、他方では労働者・農民の革命運動を粉碎することができる一つの鐵拳として、ツアア專制制度に彼等の希望をかけた。

自由主義ブルジョアジーの黨であるカヂツト（立憲民主黨）は反政府の素振りをしたが、しかしツアア政府の對外政策を無條件で支持した。

エス・エル（社會革命黨員）とメンシエヴィキの小ブルジョア諸黨は、開戦勢頭から、社會主義の旗を

煙幕に利用し、戦争の帝國主義的、略奪的性質を隠蔽して、國民を欺瞞し、かうしてブルジョアジエを援助した。彼等は「プロシヤの野蠻」からブルジョアの「祖國」を擁護し、防衛する必要があることを説教し、「國內の和平」政策を支持し、かうして戦争が遂行できるやうに、ロシア・ツァー政府を援助した。これは、ドイツ社會民主主義者が「ロシアの野蠻」に對する戦争の遂行のために、ドイツ皇帝の政府をたすけたのと同様である。

こゝに、たゞボルシエヴィキ黨のみが、革命的國際主義の偉大なる旗幟に忠實なることを示し、ツァー專制制度に對し、地主と資本家に對し、帝國主義戦争に對して、斷乎たる闘争を決行するといふマルクス主義的立場を固守した。ボルシエヴィキ黨は、開戦勢頭から、この戦争が開始されたのは、祖國擁護のためではなく、地主と資本家の利益をめざして他國領土の侵略のために、他國民を強奪するために開始されたこと、そして、労働者はこの戦争に對して斷乎たる闘争を行ふべきであるといふ立場を堅持した。労働階級はボルシエヴィキ黨を支持した。

事實、戦争の初期に、インテリゲンチヤと農民のクラーク(富農)層をつかんだブルジョアの愛國熱は、一部の労働者をも感染させた。しかし、これらの連中は、無頼漢的「ロシア國民同盟」員がおもで、エス・エルとメンシエヴィキの影響下の労働者も一部を占めてゐた。當然、彼等は労働階級の感情を反映しなかつたし、またできもしなかつた。戦争の初期に、ツァー政府によつて組織されたブルジョアジエの排外主義的示威運動に参加したのは、じつにこれらの連中であつた。

二、第二インターナショナル諸黨の自國帝國主義政府への加擔。 個々の社會排外主義黨への第二インターナショナルの分解

レーニンは、第二インターナショナルの日和見主義とその指導者の動搖性を、一再ならずあらかじめ警告したのであつた。第二インターナショナルの指導者は言葉の上だけで戦争に反對してゐること、もし實際に戦争が勃發する場合、彼等はその態度を變へ、帝國主義ブルジョアジエの側に脱走し、戦争の支援者になりうることを、レーニンは常にくりかへし語つてゐた。レーニンの先見は開戦第一日に確證されたのである。

一九一〇年、第二インターナショナルのコペンハーゲン大會で、社會主義者は議會において戦費に反對投票すべきことが決議された。一九一二年のバルカン戦争に際し、第二インターナショナルのパーゼル世界大會は、すべての國の労働者は、資本家の利潤増殖のためにたがひに殺戮しあふことを罪惡なりとみなす、と宣言したのであつた。これが、言葉でも、決議でも語られたものであつた。しかるに、帝國主義戦争の雷鳴がとどろき、今こそ右の諸決議を實行すべき秋がきたとき、第二インターナショナルの指導者は、プロレタリアートの叛逆者、裏切者たることを表明し、ブルジョアジエの下僕たることを表明した。彼等は戦争の支持者となつたのである。

一九一四年八月四日に、ドイツ社會民主主義者は議會で戦費に協賛し、帝國主義戦争支持に投票した。フランス、イギリス、ベルギー、その他の諸國の社會主義者の壓倒的多數も、同様の行動をとつた。第二インターナショナルは存在することをやめた。事實において、このインターナショナルは互に交戦する個々の社會排外主義黨に分解したのである。

社會主義諸黨の指導者は、プロレタリアートを裏切り、社會排外主義の立場と帝國主義ブルジョアジエ擁護の立場に移つた。彼等は労働階級を購着し、且つ民族主義をもつて毒し、かうして帝國主義政府を助けた。これらの社會裏切者は、祖國擁護に名をかりて、フランスの労働者に對してはドイツの労働者をけしかけ、ドイツの労働者に對しては英佛の労働者をけしかけはじめた。第二インターナショナルのごく少

數のみが、國際主義的立場にとゞまり、流れに抗した。事實、彼等はそれを十分に確信をもち、斷乎としてやつたのではなかつたが、しかし、ともかく流れには抗した。

たゞ、ボルシェヴィキ黨のみが、たゞちには、且つ躊躇なく、帝國主義戦争に對する決定的闘争の旗をかかげた。一九一四年の秋にレーニンによつて起草された戦争に關するテーゼ中で、レーニンは第二インターナショナルの没落は偶然でないことを指摘した。第二インターナショナルは日和見主義者によつて破滅させられてをり、革命的プロレタリアートの最良の代表者達は、彼等に對して、夙にあらかじめ警告したのであつた。

第二インターナショナルの諸黨は、戦前すでに、日和見主義に感染してゐた。日和見主義者は大つピラに革命的闘争の放棄を説教し、彼等は「資本主義の社會主義への平和的伸展」の理論を説教してゐた。第二インターナショナルは日和見主義と闘ふことを欲しなかつた。第二インターナショナルは、日和見主義と平和に住むことを欲し、それに鞏固な地歩を占めさせることをゆるした。第二インターナショナルは、日和見主義に對して協調政策をとつて、それ自身日和見主義的なものとなつたのである。

帝國主義ブルジョアジーは、熟練労働者の上層、いはゆる労働貴族を、高給の賃銀や他の賄賂で、系統的に買収し、このためには植民地から、後進諸國の搾取から儲けた利潤の一部を利用した。労働者の右の層から、すくなからざる數の労働組合や消費組合の幹部、市町村會議員や議會の議員、新聞記者や社會民主主義諸組織の役員が輩出した。これらの連中は、開戦とともに、彼等の地位を失ふことをおそれ、革命の仇敵となり、自國ブルジョアジーの、自國帝國主義政府の最も熱心な擁護者となつた。

日和見主義者は社會排外主義者となつた。

ロシアのメンシェヴィキやエス・エルをふくむ社會排外主義者は、國內では、労働者とブルジョアジ間の階級平和を説き、自國の外では、他國民に對する戦争を説いた。彼等は眞實の戦争責任者を隠蔽し、

自國のブルジョアジーは非難さるべきでないと聲明し、かうして大衆をあざむいた。多數の社會排外主義者が自國の帝國主義政府の大臣となつた。

プロレタリアートの大業にとつて、これに劣らず危険なのは、覆面の社會排外主義者、いはゆる中間派である。中間派、——カウツキー、トロツキー、マルトフ、その他は、公然たる社會排外主義者を辯明し擁護し、かうして社會排外主義者と共にプロレタリアートを裏切つた。彼等は、労働階級をあざむく肚で戦争に對する闘争といふ「左翼的」言辭で彼等の裏切りを隠蔽した。實際において、中間派は戦争を支持した。なぜならば、中間派の提案は、戦費に對する投票がとられる場合、これに反對投票をなさずに、棄権することに制限したが、これこそ戦争を支持することを意味したからである。彼等は、社會排外主義者と同様に、自國帝國主義政府の戦争遂行をさまたげないやうに、戦時中、階級闘争を放棄することを要求した。中間主義者トロツキーは、戦争と社會主義のすべての重要問題に關して、レーニンとボルシェヴィキ黨に反對したのであつた。

レーニンは、開戦劈頭から、新たなインターナショナル、第三インターナショナルの創設のために、諸勢力を集結することを開始した。ボルシェヴィキ黨中央委員會は、一九一四年十一月に發表した戦争反對の聲明書の中で、かゝる破廉恥な破産をとげた第二インターナショナルにかはつて、第三インターナショナルを結成すべき任務をたてたのであつた。

一九一五年二月、聯合國側の社會主義者の會議がロンドンで開かれた。同志リトヴィノフは、レーニンの指令を受けて、同會議で演説し、社會主義者等（ヴァンダーヴェルデ、サンバ、ゲトド）がベルギーとフランスのブルジョア政府から辭職し、帝國主義者と完全に手を切り、彼等との共働を拒否すべきことを要求した。彼はまた、すべての社會主義者は自國の帝國主義政府に對して斷乎たる闘争を行ひ、戦費賛成投票を非難すべきことを要求した。だが、この會議におけるリトヴィノフの聲には一人の呼應するものも

なかつた。

一九一五年九月の初旬、國際主義者の第一回會議がチンメルワルドで開かれた。レーニンは、當會議を戰爭に反對する國際運動發展の「第一步」とよんだ。當會議で、レーニンはチンメルワルド左翼グループを組織した。しかし、チンメルワルド左翼内で、戰爭に反對して正しい、終始一貫した態度をとつたのはたゞレーニンを指導者とするボルシェヴィキ黨のみであつた。チンメルワルド左翼は、ドイツ語で「フオルボーテ(先驅者)」といふ雜誌を發行し、これにレーニンは寄稿した。

一九一六年、國際主義者はスイスの村落、キーンタールで第二回會議を開くことに成功した。これは第二回チンメルワルド會議とよばれてゐる。この時までには、國際主義者のグループは、ほとんどすべての國に結成され、國際主義要素と社會排外主義者との分裂は、いよいよ鮮明になつてきた。だが、もつとも重要なことは、この時までには、大衆自體が、戰爭と戰禍に苦しめられて、左翼の方に動いてゐたといふことである。キーンタール會議で起草された宣言は、會議で争つてゐた各種グループ間の妥協の結果採用されたのであつた。でも、それはチンメルワルド宣言に比して、一步を進めたものであつた。

けれども、キーンタール會議もまた、帝國主義戰爭の國內戰爭への轉化、自國帝國主義政府の敗戦、第三インターナショナルの樹立、といふボルシェヴィキ政策の基本的論綱を採用しなかつた。それにもかゝらず、キーンタール會議は國際主義要素を結晶することをたすけ、のちに彼等から共產主義第三インターナショナルが構成されたのである。

レーニンは、ローザ・ルクセンブルグやカール・リーブクネヒトのごとき、左翼社會民主主義者中の不徹底な國際主義者の誤謬を批判したが、同時に、正しい立場をとるやうに彼等を助けた。

三、戰爭、平和および革命の問題に關するボルシェヴィキ黨の

理論と戰術

ボルシェヴィキは、左翼社會民主主義者の大多數がなしたやうに、平和にあこがれ、平和の宣傳にだけ浮身をやつやうな、たんなる平和主義者ではなかつた。ボルシェヴィキは、平和のための積極的な革命闘争を主張し、それが交戦帝國主義ブルジョアジー權力の顛覆し、徹底することを主張した。

ボルシェヴィキは、平和の問題とプロレタリア革命の勝利の問題とを結合し、そして戰爭を終結し、公正な平和、すなはち領土併合と賠償の伴はぬ平和を確保するもつとも確實な方法は、帝國主義ブルジョアジーの權力を顛覆することである、と主張した。

メンシエヴィキやエス・エル(社會革命黨員)の革命の放棄と、戦時中は「國內和平」をたもつといふ彼等の裏切的スローガンに對して、ボルシェヴィキは「帝國主義戰爭を國內戰爭に轉化せよ」といふスローガンをかゝげた。このスローガンの意味するところは、軍服をまとひ武装された労働者・農民をふくむ動勞大衆が、もし戰爭を終結させ、公正な平和をえんと欲するならば、彼等の銃口を自國のブルジョアジーに向け、その權力を打倒すべきであるといふのである。

メンシエヴィキとエス・エルのブルジョア祖國擁護政策に對して、ボルシェヴィキは「帝國主義戰爭における自國政府の敗北」といふ政策を提起した。これが意味するところは、かならず戦費反對に投票すべきこと、軍隊内に非合法革命組織を結成すること、戦線における兵士の交歓を支持すること、戰爭に反對する労働者・農民の革命的行動を組織すること、これらの行動を自國帝國主義政府に對する蜂起に轉化すべきこと、これである。

ボルシェヴィキはかう考へた、——帝國主義戦争でツァー政府が軍事的に敗北することは、國民にとつては、むしろ小さい不幸である。なぜならば、これはツァー制に對する國民の勝利を容易にし、資本主義の奴隸と帝國主義戦争から解放されんとする労働階級の闘争の勝利をたやすくするからであると考へた。その場合、レーニンは、自國帝國主義政府の敗北といふ政策は、たんにロシアの革命家によつてのみ勵行されるのではなくて、すべての交戦國の労働階級の革命的政黨によつて行はるべきであることを主張した。ボルシェヴィキの反對したのは、あらゆる種類の戦争ではない。彼等はたゞ侵略戦争に反對し、帝國主義戦争に反對したのである。ボルシェヴィキは戦争には二つの種類があると考へた。

(イ) 正義の戦争、これは侵略戦争でなく、解放戦争であつて、外國からの攻撃や、隸屬化さうとする陰謀から國民を防衛せんとし、あるひは資本主義の奴隸たることから人民を解放せんとし、あるひは、帝國主義の抑壓から植民地や屬國を解放せんとする目的をもつものである。次に

(ロ) 不正義の戦争、これは侵略戦争であつて、他國と他民族とを征服し、奴隸化せんとするものである。

第一種の戦争をボルシェヴィキは支援した。第二種の戦争に關しては、これに對して斷乎たる闘争を敢行し、その闘争は革命と自國帝國主義政府顛覆のところまで徹底すべきことを、ボルシェヴィキは主張した。

戦時中にレーニンのなした理論的業績は、全世界の労働階級にとつて非常に大きな意義を有した。一九一六年の春、レーニンは「資本主義の最高段階としての帝國主義」と題する一書をあらはした。同書で彼の示したことは、帝國主義は資本主義の最高段階であつて、この段階では資本主義はすでに「進歩的」資本主義から寄生的資本主義、腐朽しゆく資本主義にうつつたこと、帝國主義は死滅しゆく資本主義であること、であつた。もとより、これは、資本主義がプロレタリアートの革命なしにみづから滅亡したり、熱

柿のやうに自分でおちるといふのではない。レーニンは、労働階級の革命のみが資本主義を顛覆しうることを、つねに教へた。だから、レーニンは、帝國主義を死滅しゆく資本主義と定義しながら、それとともに該書で「帝國主義はプロレタリアートの社會革命の前夜である」と説いた。

レーニンは教示した。——帝國主義時代には資本主義の抑壓がますます強まること、帝國主義の條件の下では資本主義の基礎に對するプロレタリアートの憤激が成長すること、資本主義諸國の内部に革命的爆發の要素が集積されることを。

レーニンは教示した。——帝國主義時代には植民地と屬國に革命的危機が尖鋭化すること、帝國主義に對する憤激の要素が集積され、同様に帝國主義反對の解放戦争の要素もまた集積されること、を。

レーニンは教示した。——帝國主義の條件の下では資本主義發展の不均等と矛盾がいちじるしく尖鋭化されること、商品販賣市場と資本輸出市場のための闘争や、植民地や、原料供給地のための闘争が、新たな世界の再分割のための週期的帝國主義戦争を不可避とすること、を。

レーニンは教示した。——この資本主義發展の不均等性が、帝國主義戦争を誘發するものであつてこの戦争によつて帝國主義の力は弱められ、その最も弱い地點から帝國主義戦線のくづれる可能をあたへること、を。

以上のすべてから、レーニンは次の結論に到達した。——プロレタリアートによつて、帝國主義戦線の一ヶ所または數ヶ所を突破することは、十分可能なこと、社會主義の勝利は、まづ初めに數ヶ國で、または、單獨に一國でさへ可能であること、世界の諸國における資本主義發展の不均等の結果、社會主義がすべての國々で同時に勝利することは不可能であること、社會主義はまづ一國內で、または數ヶ國內で勝利し、爾餘の諸國はある時期の間ブルジョア國として残るであらう、と。

以下にかゝけるものが、レーニンのなした右の獨創的結論の定義であつて、これは彼が帝國主義戦争中

に書いた二つの論文中に收められてゐる。

(一)「経済的および政治的發展の不均等性は、資本主義の絶対法則である。こゝからして、社会主義の勝利が、はじめに少数の資本主義國で、または、單獨に一國でさへ可能であるといふことになる。勝利した當該國のプロレタリアートは、資本家を收奪し、あはせて自己の社会主義生産を組織し、かくして爾餘の、資本主義世界に對抗して、諸外國の被壓迫階級を自己の周圍に引き寄せるであらう……」(一九一五年八月起草の論文「ヨーロッパ合衆國のストローガンについて」より)(レーニン全集、第十八卷二三二—二三三ページ)

(二)「資本主義の發展は、種々の國によつて、いちじろしく不均等に進行する。これは商品生産制度の下では、しからざるをえないのである。こゝからして、社会主義がすべての國々で同時に勝利しえられないといふ確乎不易の結論が生れる。社会主義は、最初一ヶ國で、または數ヶ國で勝利するが、爾餘の諸國は、ある期間、ブルジョア國またはブルジョア前期の國としてとゞまるであらう。このことは單に磨擦を起させるだけでなく、社会主義國の勝利せるプロレタリアートの粉碎に向つて、他の諸國のブルジョアジーが躊躇なく突進することにみちびくにちがひない。かゝる場合には、われわれの側の戦争は適法であり、正義である。それは社会主義のための、ブルジョアジーからの他民族解放のための戦争となるであらう。」(一九一六年秋起草の論文「プロレタリア革命の戦争綱領」より)(レーニン全集、第十九卷三二五—三二六ページ)

右は社会主義革命のあらたな、完成された理論である。その理論は個々の國における社会主義勝利の可能についての、この勝利の諸條件についての、この勝利の見透しについての理論であり、その根本は、遠く一九〇五年に、レーニンのパンフレット「民主主義革命における社会民主主義者の二つの戦術」中に述べられてゐたものである。

この理論は、帝國主義以前の資本主義時代のマルクス主義者の間にもつばら通用してゐた見地とは根本的にちがつてゐた。當時、マルクス主義者は、ある一ヶ國での社会主義の勝利は不可能であり、社会主義の勝利はすべての文明國において同時に起こるものであると主張したのである。レーニンは、彼の名著「資本主義の最高段階としての帝國主義」中に記述した帝國主義的資本主義に関する諸種の事實にもとづいて、右の見地を陳腐なものとしてしりぞけ、新たな理論的見地をあたへた。この見地は、すべての國において同時に社会主義が勝利することは不可能であると考へるが、單獨に、一つの資本主義國で社会主義が勝利することは可能であると認めた。

レーニンの社会主義革命理論の絶大な意義は、それが新理論をもつてマルクス主義を豊富にし、マルクス主義を前進させたといふ點だけにあるのではない。その意義はさらに次の點にもある。すなはち、該理論は個々の國のプロレタリアートに對して革命の見透しをあたへ、自國ブルジョアジーに對する攻撃に彼等の發意を發揮させ、この攻撃を組織するために戦時状態を利用することを彼等に教え、プロレタリア革命の勝利に對する彼等の信念を強めたといふ點である。

以上が、戦争、平和および革命の問題に關する、ボルシェヴィキの理論的、戦術的見地であつた。右の見地にもとづいて、ボルシェヴィキは、ロシアで、その實際活動を遂行したのであつた。

戦争の當初、ボルシェヴィキの國會議員、バダエフ、ベトロフスキー、ムラノフ、サモイロフ、シヤゴフ等は、警察の苛酷な彈壓にもかかわらず、幾多の組織を訪問し、戦争と革命に對するボルシェヴィキの態度を演説した。一九一四年十一月、戦争に對する態度を討議するために、ボルシェヴィキの國會議員團の會議が開かれた。會議の三日目に、出席者の全部が逮捕された。裁判は、全ボルシェヴィキ議員に對して、市民権剝奪と東部シベリアへの流刑を宣告した。ツァー政府は彼等に對して「叛逆罪」をもつて罰したのである。

法廷における國會議員の行動の光景は、わが黨の名譽をかめるものであつた。ボルシェヴィキ議員はツアリの法廷で勇敢に行動し、法廷を、ツアリの領土侵略政策を暴露する演壇にかへてしまつた。

この事件に連座したカメネフは全くちがつた行動をとつた。臆病なために、彼は危険を感じるやいなやボルシェヴィキ黨の政策をすてしまつた。彼は戦争問題ではボルシェヴィキに同意しないことを法廷で聲明し、且つ、これを證據だてるために、メンシエヴィキのヨルダンスキーを證人として喚問することを要求した。

ボルシェヴィキは、戦争の必要に應ずるためにつくられた軍事産業委員會に反対し、労働者を帝國主義ブルジョアジの影響にまきこまうとする、メンシエヴィキの企圖に反対して、大きな活動を起した。帝國主義戦争が全人民の戦争であるやうに、みんなを信じさせることに、ブルジョアジは切實な利害關係を有した。戦時中に、ブルジョアジは政治上に大きな影響をもつやうになり、彼等の全國的組織——「ゼムストヴォ(地方自治會)・都市同盟なるものをつくつた。ブルジョアジにとつては、その指導と影響の下に、労働者をもとらへることが、必要であつた。そのための方法として、軍事産業委員會に屬する「労働者團」をつくることを考へた。このブルジョアジの考へにメンシエヴィキは飛びついた。ブルジョアジにとつては、これらの軍事産業委員會に労働者の代表者を一枚加へることは有利であつた。といふのは、これらの代表者は、砲彈、大砲、鐵砲、彈藥筒、その他の軍需品をつくる工場の労働生産力を向上させることの必要を説いて、労働大衆を煽動してくれるだらうからである。「何もかも戦争のために、誰もかれも戦争に」——これがブルジョアジのスローガンであつた。このスローガンの本當の意味は、「軍需品の注文と他國領土の侵略でできるだけ儲ける」といふにほかならぬ。ブルジョアジのこのにせ愛國主義工作に、メンシエヴィキは積極的に参加した。彼等は、軍事産業委員會の「労働者團」の選舉に参加するやうに労働者の間に大々的に宣傳し、かうして資本家を援助した。ボルシェヴィキは右の考案に反対した。

彼等は、軍事産業委員會のボイコットを宣傳し、そしてこのボイコットに成功した。しかし、一部の労働者は、有名なメンシエヴィキのグヴオズデフやプロバカートルのアプロシモフ等の指導の下に軍事産業委員會に参加した。ところが、一九一五年九月に、軍事産業委員會「労働者團」の最終選舉のために労働者委員が集つた時、彼等の大多数が委員會参加に反対するといふ事態をひきおこした。労働者委員の大多数は、軍事産業委員會参加反対の辛辣な決議を採用し、労働者は平和のため、ツアリの打倒のために戦ふことを目的とすると聲明したのである。

ボルシェヴィキはまた、陸海軍内での仕事を廣範圍におこなつた。彼等は兵士や水兵大衆に、戦争の未開の戦慄や人民の慘禍に何人が責任があるかを説明し、人民にとつて帝國主義戦争からのがれる唯一の道は、革命であることを説明した。ボルシェヴィキは、陸軍と海軍に、戦線と後方部隊に、細胞を組織し、そして戦争反対闘争に呼びかけたピラを配布した。

クロンシュタットでは、ボルシェヴィキは「クロンシュタット軍事組織中央集團」をつくり、これはベトログラード黨委員會と緊密な連絡をたもつてゐた。ベトログラード黨委員會の軍事組織は、守備隊内の活動のために設けられた。一九一六年八月、ベトログラード秘密政治警察の長官は、次のやうな報告をしてゐる。「クロンシュタット集團では、何事も非常に慎重に、秘密にやられてゐる。その成員はいづれも無口な、用心深い連中である。この集團は陸上にも代表者をもつてゐる。」と。

戦線では、黨は交戦兵士相互の交歡を煽動し、世界のブルジョアジが敵であること、帝國主義戦争を國內戦争に轉化し、彼等の銃口を自國のブルジョアジとその政府に向けることによつてのみ、戦争を終らせらることを強調した。部隊が襲撃にできることを拒否するやうな事件がますます頻繁に起つた。かゝる事件は、すでに一九一五年にもあつたが、一九一六年に入ると共にさらにふへた。

ボルシェヴィキは、とくに大きな活動を、バルチック沿海諸州の北部戦線の軍隊内でおこなつた。一九

一七年の初めに、北部戦線軍司令官のルズズキト將軍は、ボルシエヴィキが同戦線で猛烈な革命的活動を展開してゐることを司令本部に報告してゐる。

戦争は、國民の生活に、世界の勞働階級の生活に、深刻な變化をもたらした。國家の運命、國民の運命、社會主義運動の運命が、いまや危殆に瀕した。ゆゑに、戦争は、社會主義的と自稱する一切の政黨や思潮に對する試金石であり、試練であつた。これらの黨や思潮が、社會主義の大業に、國際主義の大業に忠實な立場にとゞまるか、それとも、彼等が勞働階級を裏切り、彼等の旗幟を捲き、それを自國の民族ブルジョアジの足下にふみにぢらせるか、問題は、この時、右のごとく立てられてゐたのである。

戦争は、第二インターナショナル諸黨が右の試練に堪ええなかつたことを示し、彼等が勞働階級を裏切り、自國の民族的、帝國主義的ブルジョアジの前に彼等の旗幟を引きおろしたことを示した。

そして、黨内部に日和見主義を培養し、また日和見主義者や民族主義者に讓歩するやうに教育されたこれらの諸黨は、これと違つた行動をとりえなかつたのである。

戦争は、ボルシエヴィキ黨が、光榮ある試練にたえ、社會主義の大業に、プロレタリア國際主義の大業に、終始一貫忠實であつた唯一の黨であることを示した。

そして、これは當然であつた。新しい型の黨のみが、日和見主義に對する非妥協的闘争の精神できたえられた黨のみが、日和見主義と民族主義から解放された黨のみが、しかり、かゝる黨のみが偉大な試練に堪えることができ、勞働階級の大業に、社會主義と國際主義の大業に忠誠たりうるのである。そして、ボルシエヴィキ黨こそ、かゝる黨であつたのである。

四、ツアー軍隊の敗戦。經濟的破綻。ツアー制の危機

戦争はすでに三年間つゞいてゐた。戦死、戦傷、戦時状態から起つた傳染病による死亡、かういふ具合にして、戦争は數百萬の人命を奪つた。ブルジョアジと地主は戦争によつて巨萬の富をえた。だが、勞働者と農民は、ますます増大する困窮と缺乏に悩まされた。戦争はロシアの國民經濟を破壊した。約千四百萬の壯健な勞働者が經濟的仕事から引きはなされて、軍隊に編入された。工場は休止した。勞働力の不足のために、穀物播種は減少した。國民と戦線の兵士は飢え、彼等ははだしで、はだかで歩いた。戦争は國內の全資源を蕩盡したのである。

ツアー軍隊は連戦連敗した。ドイツの大砲がツアー軍隊に砲彈の雨を降らせてゐるとき、ツアー軍隊には、大砲や砲彈どころか、鐵砲さへも不足をつけた。時には三人の兵士に一挺の銃しかわたらなかつた。戦争の眞最中に、ツアーの陸軍大臣であるスホムリノフがドイツの間諜と通謀する賣國奴であることが發覺した。スホムリノフは、軍需品供給を混亂させ、戦線に銃砲を送るな、といふドイツ特務部の指令を實行してゐたのである。いく人かのツアーの大臣や將軍もひそかにドイツ軍をたすけた。つまり、彼等はドイツ人と系累をもつ皇后と一緒にたつて、軍事的機密をドイツに内通したのである。だから、ツアー軍隊が敗北を喫し、退却を餘儀なくされたからといつて、毫も驚くにたらぬ。一九一六年までに、すでにドイツはポーランドとバルチック海岸の一部とを占領してしまつた。

すべてこれらは、勞働者、農民、兵士、インテリゲンチヤの間に、ツアー政府に對する憎惡と憤怒とをわきたし、戦後でも、戦線でも、また中央でも、邊境地帯でも、戦争とツアー制に對する國民大衆の革命的運動を強化させ、激化させた。

不満はロシア帝國主義ブルジョアジの間にも廣がりはじめた。あきらかにドイツとの單獨媾和のため活動してゐたラスプチンのごとき無賴漢が、ツアー宮廷にのさばつてゐるといふ事實に、ブルジョアジはいたく激昂した。彼等は、ツアー政府に戦争をうまくやつてゆく力がないことを、ますますさとして

きた。彼等は ツアー制が自己の地位を救ふために、ドイツと單獨講和を締結しはせぬかをおそれた。そこで、ロシア・ブルジョアジーは、宮廷騒動を起すことを決意し、これによつてツアー・ニコライ二世を退位させて、そのあとへブルジョアジーと關係の深いミハイル・ロマノフをもつてこようとした。彼等はかゝる方法で、一石二鳥を目論んだ。すなはち、第一には、彼等自身が權力を握つて、帝國主義戦争の繼續を保證することであり、第二には、たかまつてきた大きな人民革命の爆發を、大きくない宮廷騒動で食ひとめようとするのであつた。

これについては、ロシア・ブルジョアジーは、英佛政府から全的の支持をうけた。英佛政府は、ツアーには戦争の繼續ができぬことを知つた。彼等は、ツアーがドイツと單獨講和を結んで、戦争を終結させるかもしれないことをおそれた。もしツアー政府が單獨講和を締結するやうなことがあれば、英佛政府はロシアといふ軍事同盟國を失ふことになる。この同盟國のロシアは、自分の戦線の方へ敵の勢力を轉じさせただけでなく、數萬のロシアの精兵をフランスに供給してゐたのである。だから、英佛政府は、宮廷騒動を起さうとするロシア・ブルジョアジーの陰謀を支持したのである。

かくして、ツアーは孤立させられてしまつた。

戦線で失敗をかさねてゐる時、經濟的破綻はいよいよ尖鋭化した。一九一七年の一月と二月には、食料、原料、燃料供給の破綻は、その規模と尖鋭さにおいて極點に達した。ペトログラードとモスクワに對する食料の供給はほとんど停止してしまつた。企業は次から次に閉鎖された。企業の閉鎖は失業者を續出させた。労働者の状態はとくに堪えがたいものとなつた。かゝる堪えがたい状態から脱けでる唯一の道は、たゞツアー専制制度の顛覆であるといふ確信を、ますます多くの人民大衆がいだくにいたつた。ツアー制はあきらかに致命的危機に當面した。ブルジョアジーは、この危機を宮廷騒動で解決しようと考えた。

ところが、人民はそれを自己流に解決したのである。

五、二月革命。ツアー制の倒壊。労働者兵士代表ソヴェートの樹立。臨時政府の成立。二重政權

一九一七年は一月九日のストライキではじまつた。このストライキの最中に、ペトログラード、モスクワ、バタール、ニジニ・ノヴゴロド等で示威運動が行はれた。モスクワでは、一月九日のストライキに、全労働者の約三分の一が参加し、ツヴェルスコイ・ブルヴァールでは二千人の示威行進が、騎馬巡査の馬蹄によつて蹴ちらされた。ペトログラードのヴィボルグ大通りの示威行進には兵士も参加した。

「總罷業の思想が毎日に新しい賛成者をえてをり、一九〇五年の時と同様に、大衆的になつてきた」とペトログラードの警察が報告してゐる。

メンシエヴィキとエス・エル（社會革命黨員）とは、この開始された革命運動を、自由主義ブルジョアジーのもどめる枠内にさそひ込まうとくわだてた。メンシエヴィキは、國會開會當日の二月十四日に、國會に向つて労働者の行列を組織することを提案した。しかし、労働大衆はボルシエヴィキにしたがひ、國會にはゆかず、デモンストレーションに出かけた。

一九一七年二月十八日に、ペトログラードのプチコフ工場でストライキが勃發した。二月二十二日には、大多数の大工場の労働者がストライキに入つた。二月二十三日（三月八日）の國際婦人労働者デーには、ペトログラード・ボルシエヴィキ委員會の機に應じて、労働婦人が街上に出て、飢餓と戦争とツアー制反對の示威運動を決行した。ペトログラードの労働者は、全市にわたる總罷業の擧にいでて、労働婦人の示威運動を支援した。政治的ストライキは、ツアー制に對する政治的總示威運動に成長發展しはじめた。

二月二十四日（三月九日）、示威運動はさらに大きな勢ひをもつて、盛りかへした。約二十萬の労働者が

すでにストライキに加はつてゐた

二月二十五日(三月十日)、ペトログラードの労働者の全部が革命運動に参加した。地區の政治的ストライキは、ペトログラード全市の政治的總罷業にうつつた。デモはいたるところで警官と衝突した。労働者大衆の頭上には赤旗がひるがへり、それには次のスローガンが書いてあつた。「ツァーを倒せ!」「戦争反對!」「パンを與へよ!」と。

二月二十六日(三月十一日)朝、政治的ストライキと示威運動とは蜂起の性質を帯びてきた。労働者は警官と憲兵の武装解除をおこなひ、彼等自身を武装した。しかし、警官との武力衝突は、つひにズナメンスカヤ廣場での示威行列射撃をもつて幕をとぢた。

ペトログラード軍官區司令官であるハバロフ將軍は、二月二十八日(三月十三日)に、労働者は就業すべし、しからざれば戦線に送ると布告した。二月二十五日(三月十日)に、ツァーはハバロフ將軍に勅令をくだした。曰く、「おそくとも明日中に、帝都の騷擾を中止せよ。朕これを爾に命ず」と。

だが、革命を「中止」することは、もはやできなかった。

二月二十六日(三月十一日)晝、バヴロフスキー聯隊豫備大隊第四中隊が發砲した。——だが、それは労働者に對してではなく、反對に、労働者と交戦してゐた騎馬巡查の一隊に發砲したのである。軍隊を味方に引入れるために、最も精力的な執拗な闘争がなされた。それはとくに労働婦人によつて行はれ、彼等は兵士に直接にブツつかり、兵士と交戦し、憎むべきツァー專制制度打倒のために人民を助けるように呼びかけた。ボルシエヴィキ黨の實際活動の指導部は、當時、ペトログラードにあつた同志モロトフを首長とするわが黨の中央委員會ビュロー(事務局)であつた。二月二十六日(三月十一日)、中央委員會ビュローはツァー制に對する武装闘争の繼續と臨時革命政府の結成を激した宣言書を發表した。

二月二十七日(三月十二日)、ペトログラードの軍隊は労働者に發砲することを拒否

蜂起せる民衆の

側に荷擔しはじめた。二月二十七日朝の蜂起に加はつた兵士の數はまだ一萬を越えなかつたが、夕方までにはすでに六萬を越えるにいたつた。

蜂起した労働者と兵士は、ツァーの大臣や將軍連を逮捕しはじめ、革命家を監獄から釋放した。釋放された政治犯人は革命闘争に加はつた。

街上では、家屋の屋根裏に機關銃を据えつけた警官や憲兵と、なほ、射ちあつてゐた。しかし、軍隊が急速に労働者側に移つたことが、ツァー專制制度の運命を決定した。

ペトログラードにおける革命の勝利の報道が、他の町や戦線にひろがつた時、あらゆるところで、労働者と兵士はツァーの官吏を罷免しはじめた。

二月のブルジョア民主主義革命は勝利した。

革命が勝利したのは、労働階級が革命の先鋒であり、「平和、パン、自由」を要求して、軍服を着た數百萬の農民の運動の先頭に立つたからである。じつに、革命の成功を決定したものは、プロレタリアートのヘゲモニー(指導權)であつた。

「革命はプロレタリアートによつてなされた。彼等は英雄的行爲を示した。彼等は鮮血を流した。彼等は、勤勞し、貧乏してゐる人口の最も廣汎な大衆をひき連れていつた」と、レーニンは革命の初期に書いた。(レーニン全集、第二十卷、二二—二四ページ)。

一九〇五年の第一革命は、一九一七年の第二革命の急速な勝利を準備した。

「一九〇五—一〇七年の三年間に、ロシアのプロレタリアートによつて示された巨大な階級闘争と革命的精力なしには、第二革命は、その最初の段階が數日間で完成されたほど、かくも速かにはこびえなかつたであらう」と、レーニンは指摘した(前掲書、一三—一四ページ)。

ソヴェートは、革命の第一日に出現した。勝利せる革命は、労働者兵士代表ソヴェートに立脚した。蜂

起した労働者と兵士とは、労働者兵士代表ソヴェートを結成した。一九〇五年の革命は、ソヴェートが武装蜂起の機關であると同時に、新たな革命的權力の胎兒であることを示したのである。ソヴェートの思想は労働大衆の胸中に生きてゐた。そして、ツァーリ制が顛覆された翌日に、彼等はこの思想を實現した。が、それは次の相違點をもつてである。すなはち、一九〇五年に組織されたものは労働者代表だけのソヴェートであつたが、一九一七年二月には、ボルシエヴィキの發意で労働者および兵士代表のソヴェートが出現したのである。

ボルシエヴィキが、街上で大衆の鬨争を直接に指導してゐるとき、協調主義政黨であるメンシエヴィキとエス・エルは、ソヴェート内の議席を占領し、そこに多数派を構成してゐた。このことは、次の事情で幾分助成された。つまり、ボルシエヴィキ黨の大多数の指導者は、投獄、あるいは流刑されてゐたが（レーニンは亡命中、スターリンとスヴェルドロフとはシベリアの流刑地にゐた）、その時、メンシエヴィキとエス・エルはベトログラードの街を横行闊歩してゐたのである。その結果として、ベトログラード、ソヴェートとその執行委員会とが、協調主義政黨の代表者、メンシエヴィキとエス・エルによつて牛耳られるにいたつた。モスクワや幾多の他の都市でも同様であつた。たゞイワノヴォ・ヴォズネセンスク、クラスノヤルスク、その他の數ヶ所だけで、ボルシエヴィキが、劈頭からソヴェートに多数を占めてゐた。

武装せる人民——労働者と兵士は、ソヴェートを人民の權力機關とみなし、そこに彼等の代表者を送つた。労働者兵士代表ソヴェートは、革命的人民の全要求を實現し、まづ第一に、平和を締結するであらうと彼等は考へ、かく信じた。

ところが、労働者、兵士は自分の過信から一杯食はされた。エス・エルとメンシエヴィキとは、戦争を締結させ、平和を締結するなどといふ意圖は毛頭もつてゐなかつた。彼等は革命を利用して戦争を繼續しようとした。革命と人民の革命的諸要求とについていへば、革命はすでに終了したので、現在の任務は

それを封印し、そして、ブルジョアジーと手をたづさへて、「正常」な立憲的存在の軌道にうつることである、とエス・エルとメンシエヴィキは主張した。ゆえにベトログラード、ソヴェートのエス・エルとメンシエヴィキ指導者等は、戦争終結の問題や、平和の問題を握りつゝ、そして權力をブルジョアジーに引きわたすことに全力をあげた。

一九一七年二月二十七日（三月十二日）、國會の自由主義的議員は、エス・エルとメンシエヴィキ指導者等との秘密協定の結果、地主で君主主義者の第四次國會議長ロジヤンコを會長とする、國會臨時委員會なるものをデツチあげた。そして、數日後には、國會臨時委員會と労働者兵士代表ソヴェート執行委員會のエス・エルとメンシエヴィキ指導者等とは、ボルシエヴィキには秘密に、ロシアの新政府を組閣する協定をとげた。その新政府とは、二月革命以前にツァーリニコライ二世が自分の政府の總理大臣に持つてこようとした男、ルヴォフ公を首班とする一個のブルジョア臨時政府であつた。臨時政府には次の連中が入閣した。カデット（立憲民主黨）黨首のミリニコフ、オクチャプリスト（十月黨）黨首グチコフ、その他著名な資本家階級の代表者連、そして、「民主主義」の代表者としてエス・エルのケレンスキーが入つた。

かやうにして、ソヴェート執行委員會のエス・エルとメンシエヴィキ指導者は、權力をブルジョアジーに譲渡した。しかし労働者兵士代表ソヴェートが、のちに右の事實を知つた時、ボルシエヴィキの抗議にも拘らず、多数決で、エス・エルとメンシエヴィキ指導者の行爲を承認したのであつた。

かくして、ロシアに新政權が出現した。そして、それは、レーニンがいつたごとく、「ブルジョアジーとブルジョア化した地主」の代表者から構成されてゐた。

しかるに、ブルジョア政府にならんで、他の政權——労働者兵士代表ソヴェートが存在した。ソヴェートの兵士代表者は、戦争に動員された農民が主であつた。労働者兵士代表ソヴェートは、ツァーリ權力に對する労働者と農民の同盟の機關であると同時に、彼等の權力の機關、つまり労働階級と農民の獨裁の機關で

あつた。

その結果、二つの権力の、二つの獨裁の奇妙な組合せがあらはれた。すなはち、それは、臨時政府によつて代表されたブルジョアジーの獨裁、ならびに、労働者兵士代表ソヴェートによつて代表されたプロレタリアートと農民の獨裁、これである。

その結果、一重政權が生れた。

最初に、ソヴェートの大多数がメンシエヴィキとエス・エルによつて占められたが、これはいかに説明さるべきであるか？

勝利した労働者と農民が、ブルジョアジーの代表者に権力を自發的に引き渡したが、これはいかに説明さるべきであるか？

レーニンはこれを説明して、政治に無經驗な數百萬の民衆が政治に目覺め、延びはじめたといふことにこれを歸した。彼等の大部分は小經營者とか、農民とか、最近まで農民であつた労働者とか、ブルジョアジーとプロレタリアートの中間に立つ人々であつた。當時のロシアは、全ヨーロッパ大國の内の最も小ブルジョアのな國であつた。そして、當國には「巨大な小ブルジョアの浪が、一切の物にはねかゝり、且つ數の上からだけでなく、思想的にも階級意識あるプロレタリアートを壓倒した。いひかへれば、非常に廣い労働者の層に小ブルジョアの政見を感染させてゐた。」(レーニン全集、第二十卷、一一五ページ)

メンシエヴィキ、エス・エルのごとき小ブルジョア諸黨を表面に立てるにいたつたのは、じつに、かゝる小ブルジョアの奔流の浪であつた。

もう一つの理由は、戰時中に起つたプロレタリアートの構成要素の變化、ならびに、革命の初期におけるプロレタリアートの不十分な意識と組織性であると、レーニンは指摘してゐる。戰時中に、プロレタリアート自體の構成要素に大きな變化が起つた。本職の労働者の約四割が、軍隊に召集された。戰時中に、

プロレタリア心理をもたぬ小經營者、手工業者、店主の多數が、召集をのがれるために、工場に入つた。労働者中のこれらの小ブルジョア層が、メンシエヴィキやエス・エルなどの小ブルジョア政治家を培養する土壌をつくつた。

これが、なぜ次のやうなことが起つたかといふ理由である。すなはち、政治に無經驗な多數の人民大衆が、小ブルジョアの奔流の浪をはねかけられ、革命の最初の成功に陶醉し、革命の最初の數ヶ月に協同主義政黨のとりことなり、ブルジョア政權は、ソヴェートが彼等の仕事をなすことを邪魔しないだらうといふ、幼稚な信念をもつて、ブルジョアジーに権力を讓ることを承諾したのである。

ボルシエヴィキ黨の當面した任務は、大衆の間における辛抱づよい説得によつて、臨時政府の帝國主義的本質に對して大衆の目を覺まし、エス・エルやメンシエヴィキの裏切行爲を暴露し、臨時政府がソヴェート政府によつて取りかへられないかぎり、平和は到來しえないことを示すことであつた。

そして、この仕事に向つてボルシエヴィキ黨は、全力をあげてすすんだ。黨はその合法的機關新聞雜誌を回復した。新聞「プラヴダ」は二月革命後五日目にベトログラードで、そして、數日おくれで「ソチアル・デモクラト」がモスクワで發行された。自由主義ブルジョアジーに對する信頼を、メンシエヴィキやエス・エルに對する信頼を失ひはじめた大衆の先頭にたつて、黨は行動を開始した。黨は、兵士や農民に、労働階級との共働の必要を忍耐強く説明した。黨は、また、彼等に、革命がさらに發展させられ、ブルジョア臨時政府がソヴェート政府によつて取りかへられないかぎり、農民は平和も土地も獲得しえないことを説明したのであつた。

要約

資本主義諸國における發展の不均等性から、主要列強間の均衡の破綻から、戰爭手段によつて世界を新

らたに再分割し、力の新たなる均衡をつくる帝國主義者の必要から、帝國主義戦争が起つた。
もし第二インターナショナルの諸黨が、労働階級の大業を裏切らなかつたならば、もし彼等が第二インターナショナルの諸大會の反戦決議に違反しなかつたならば、もし彼等が彼等の帝國主義政府や戦争の火つけ人に反対して積極的に行動し、労働階級を騒起させることを決意してゐたならば、戦争はかくまで破壊的ではなかつたらうし、おそらくかゝる大きさにはならなかつたであらう。

社會主義と國際主義の大業にあくまで忠實であり、自國帝國主義政府に對して國內戦争を組織した唯一のプロレタリア政黨は、ボルシェヴィキ黨であつた。他のすべての第二インターナショナル諸黨は、その指導者を通じてブルジョアジーと結びつき、帝國主義のとりことなり、帝國主義者の側に脱走してしまつた。戦争は資本主義の一般的危機の反映であると同時に、この危機を尖鋭化し、世界資本主義を弱めた。ロシアの労働者とボルシェヴィキ黨は、世界で最初に、資本主義の無力を利用し、帝國主義戦線を突破し、ツアアを打倒し、労働者兵士代表ソヴェートを樹立することに成功した。

小ブルジョアジー、兵士、ならびに労働者、これらの廣汎な大衆は、革命の最初の勝利に陶醉し、これから先は何もかもうまくゆくであらう、といふメンシエヴィキとエス・エルとの保證に氣をゆるし、さうして臨時政府を信頼し、それを支持した。

ボルシェヴィキ黨は、最初の成功で酔はされてゐる労働者と兵士大衆に次のことを説明する任務に當面した。すなはち、革命の完全な勝利はなほ前途遼遠であること、權力がブルジョア臨時政府の掌中に握られてゐる間は、またソヴェートがメンシエヴィキやエス・エルなどの協同主義者によつて支配されてゐる間は、人民は、平和も、土地も、パンもうることはできぬこと、完全な勝利をうるためには、いま一步を進み、權力がソヴェートにうつされねばならぬこと、——これらを説明する任務に黨は當面したのであつた。

8269

史 共 産 黨 同 盟

I

不 許	複 刻
--------	--------

發行所 東京 都 澁 谷 区 千 駄 ヶ 谷 四 丁 七 番 五 号

日本共産黨出版部

電話 赤坂(48)二四八五
振替・東京 一九五二七
會員番號・B二一四〇〇五

發行 昭和二十一年八月十五日 印刷 改正定價 金二十圓
昭和二十一年八月二十日 發行

譯者 マルクス・レーニン主義研究所
野坂参三

發行者 東京都澁谷区千駄ヶ谷四ノ七一四
中城龍雄

印刷者 東京都板橋區練馬南町一ノ三五三二
増田茂久

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

(新日本印刷株式會社印刷)

363.3
MA59
4

